

石川県立歴史博物館

紀 要

35

2026

3



Ishikawa Prefectural Museum of History

〔論 文〕	石動山の古彫刻 — 地藏菩薩立像と 十一面観音菩薩立像を中心に — …………… 杉 崎 貴 英	1
	二〇世紀金沢の祝祭行列 — 戦勝・御大典・市祭・学校祭 — …………… 大 門 哲	27
〔研究ノート〕	近世能登外浦における干鰯の輸送 — 北川尻・今浜浦を事例に — …………… 吉 田 朋 生	105
〔講演要旨〕	石川の歴史遺産セミナー要旨集 ……………	121
〔史料紹介〕	珠洲市内出土の珠洲焼二題 — 令和6年能登半島地震を契機として 収蔵された資料 — …………… 野 村 将 之	1

石動山の古彫刻

——地藏菩薩立像と十一面観音菩薩立像を中心に——

杉崎 貴 英

前言

本稿は、本誌『石川県立歴史博物館紀要』第三一・三二・三三号に掲載の拙稿「奥能登地域仏像調査報告」と一連をなすものである。

令和五年（二〇二三）に同館が開催した特別展「いしかわの霊場——中世の祈りとみほとけ——」（以下本展）に向けて、筆者はご依頼のもと二〇二〇年九月に始まる調査から準備の過程に関わり、図録の執筆に加え、展覧会の前後にわたり右記の報告を本誌にまとめる機会もいただいていた。その第三回となる前稿では、中能登地域に属する石動山の遺品については今後の別稿に委ねる旨を断っておいたのである。

能登の山岳信仰の霊場として名高い石動山には、かつて天平寺が盛

観を誇っていた。神仏分離を経て、いま山上に残る文化財は石動山資料館（中能登町）に多くが保管・展示される。調査の実施は二〇二二年十一月三十日、同館が冬季の休館期間に入る前日のことであった。

展示室に並ぶ仏像の多くが近世に属するなか、突出した古さを誇るのが木造地藏菩薩立像であり、筆者は一九九九年に石動山を初訪した際も、また二〇〇三年秋、石川県立歴史博物館における特別展『能登仏像紀行』を観覧した折にも眼を惹かれた記憶がある。同館の前身、石川県立郷土資料館が昭和四十七年（一九七四）に開催した『石動山の歴史と文化』展から数えて、本展は通算三度目の出陳となった。

一方で木造十一面観音菩薩立像は、調査の当初計画では対象外となっていた。従来、この像は存分な視認に足る写真資料がなく、また、

光背の墨書銘にある慶長十四年（一六〇九）の年紀を像の制作年とみなす理解が定着してきた。それ故「中世の祈りとみほとけ」を副題とする本展の当初案には含まれていなかったのである。筆者は石動山初訪の際に実見した記憶こそ薄れてはいたが、もともと古くにさかのぼる作と予測した。調査当日、間近に接して南北朝～室町期の院派仏師の作風を確認し、強く推して展示計画に加えていただいたのであった。

本展の事前調査の最終回となった二〇二三年四月三十日、正覚院（羽咋市）への調査同行から石川県立歴史博物館に帰着後、十一面観音菩薩立像の新知見に関し北國新聞社・岩上拓磨記者の取材に対応した。記事は五月二十四日の同紙に掲載され、本展の先触れともなった。会期中は外看板や階段踊り場設置のバナーにこの像の左斜側面の写真が大きく載り、ポスター・チラシを飾った明泉寺（穴水町）千手観音菩薩立像とともにメインビジュアルとして活躍したことも喜ばしかった。

ただ誠に迂闊な次第であるが、それから二年を経た本稿作成の過程で右記『能登 仏像紀行』展図録の「紀行編」を再読したところ、十一面観音菩薩立像を室町時代の院派仏師の作とする評価が、ごく手短ながら既に明言されていることに気づいた。同展の担当者であり、図録に先立ち本誌第十五号（二〇〇三年四月）に論考「能登の禅宗寺院に伝わる院派の仏像」を発表された本谷文雄氏によるものである。今回の報告に際し、まずはこの点につきお詫びを記しておかねばならない。

本稿では、「いしかわの霊場」展に出陳をみた石動山資料館保管の二軀に重点をおき、同館調査時に対象とした三軀も扱う。あわせて附録

として、前述の正覚院（羽咋市）調査の報告を添えることとする。なお副題に掲げた二軀については本展図録の総論。および資料解説、さらに前稿に載せた本展の補遺で扱っているため、以下ではそれらの再説および一部修正も含むこととなるが、煩雑を避け一々は断らない。

なお、石動山の文化財とくに彫刻遺品の伝存状況や研究蓄積に関しては、詳述に代えて参考文献抄「表1」と遺品一覧「表2」を掲げておくこととした。以下あわせての参照を乞う。本稿で扱う五軀はいずれも昭和五十五年（一九八〇）の報告書（「表1」参照）に「石動山区有（旧寺坊）の諸像」として列挙されるものの一部で、その時点では県有林管理事務所（後に石動山資料館となる）内に保管されていた。

一 地藏菩薩立像 【図1】

（1）概要

「形状」 円頂。耳朵は環状・不貫。三道相をあらわす。胸・腹のくくれ各一条。納衣・覆肩衣・裙を着ける。右手は浅く屈臂して垂下し、左手は深く屈臂して胸の高さに構え、直立する。

「法量（cm）」 像高 八七・九（二尺九寸）

頂―顎 二〇・五 面幅 一三・三 耳張（現状）一五・二
面奥（現状）一六・一 胸奥（右）一七・六（左）一七・五
腹奥 一九・九 肘張 三四・〇 袖張 三三・〇
裾張 二三・一 足先開（外、現状）一六・五

像底幅 二三・一 奥 一八・二 台座 高三・〇 幅四五・五

「品質構造」 針葉樹材（ヒノキか）の縦一材から像全体を彫出する。

木芯は頭頂ではほぼ中央、像底では中央前方寄りに位置する。背面の衲衣左寄り裾近くの位置と裾裾のほぼ中央に大きな節がある。両手先は別材製とし雇柄で接合する。両足裏に角柄をつくり出す。表面の大部分は現状で素地を呈し、白色と黒褐色の残存が随所に認められるが、相当程度に風蝕が加わった後の段階で施された所為とみられる。

「保存状態」 両手先亡失。両足先欠失。台座は後補。光背は亡失（台座の背面に光背の基部を取り付ける仕様がある）。

（2）制作時期

彫刻史的見地から評価された機会は、管見の限り昭和四十五年（一九七〇）に文化庁が石川県域を対象に実施した文化財集中地区特別総合調査が最初であったようである。その報告書（表1）6）は「桧材、丸彫、素地、体奥が深く、ずんぐりとした象形に特色がある。製作は平安後期、地方色の濃い作品である」と記す。翌年に能登文化財保護連絡協議会が実施した調査の報告（同前9）では、櫻井甚一がこの記述を承け「藤原時代と推定」する。この調査を一前提とする石川県立郷土資料館の展示（同前10）では「平安末期」の作として出陳された。

平安時代も後期の作とされていたのは「地方」の遺品としての留意からかと思えるが、一木から塊量性に満ちた全容を刻み出す表現は、平安時代も前期における制作を明言すると解して差し支えない。

平安前期の地藏菩薩彫像については浅井和春による総論があり、九〇十世紀と判断される作例の概要と写真を集成している⁴。本像も前記の報告書（同前6）からの転載図版で収められるが、集められた八十一軀のなかで見ると、肥満と短軀は明らかに際立っている。

石川県立歴史博物館の『能登 仏像紀行』展（同前29）出陳時に、九〇十世紀の作として展示されたのも頷けるが、本展の図録（同前34）では十世紀前半とした。彫りが浅い穏やかな顔立ちや、やはり彫りの浅い衣文の彫り口に加えて、正面前下半身の衲衣・衣文において大腿部の丸みの表出が乏しい点や、右胸下方で覆肩衣を衲衣にたくしこむ辺りの表現があいまいな点、その箇所外側で覆肩衣に刻まれる数条と同様の衣文が、その反対側の位置（左胸外側）にも不合理に刻まれる点（相称性を強く意識しての表現ともみなせよう）などが、作期の下降を示すと解してのことであった。ただ会期中にも意見が寄せられたごとく（前稿参照）、九世紀後半にさかのぼる可能性は留意しておきたい。

なお能登で本像に次ぐ地藏菩薩彫像の古例としては、金沢大学資料館保管の一軀が思い当たる。戦後に龍護寺（志賀町）から同大学が他の三軀とともに寄贈を受けたもので、十一世紀前半の作とみられる。

（3）伝来に関する一言説について

前記した文化庁による調査当時、本像は石動山上に建つ伊須流岐比古神社の拝殿内に存した。それ以前の伝来経緯は明らかでなく、また石動山は古代の文献史料を欠き、宗教文化の様相が明らかでない。

伝来に関し、民俗誌的文献に「石動山下、富山湾に面した蛇が島のある中田の浜に寄られた仏様であると伝えられる」⁷という記述があることは若干の留意を要する。これは能登地域の海岸部に多い「寄り神伝承」における「海岸に漂着した後、山頂にあげられた事例」の一つとして挙げられたものである。しかしかなりの重量ある一木彫像でもあり、史実を反映する伝承ではなく、縁起的言説が後代に創出されたケースとみなすべきであろう。氷見市中田周辺は石動山信仰の環境に属し、右の言説はそうした事情を前提に生まれたと解しうる。やはり、造立当時から石動山上にあり続けてきた蓋然性こそ重視したい。

(4) 本地仏あるいは僧形神像という解釈に関して

本像の性格に関する言及は、櫻井甚一が「短い衣に簡略な衣文の刻みから、藤原時代末期頃本地仏として製作されたものであろう」(「表1」¹¹)と述べたのが最初とみられる。「簡略な衣文の刻み」をもって本地仏(の像)とみなす観点は、一九六〇年、川勝政太郎を案内しての能登地域巡検において川勝から学んだものかと思しい⁸。

「本地仏」は、本地垂迹説において日本の神の正体とされた仏教導をさす言葉であり、したがって本地仏像としてつくられた仏像という解釈は、本地垂迹説が成立した平安後期以降においてなりたちうることになる。本像が九く十世紀の作であることが確実視される以上は、「本地仏として製作された」という解釈は否定されねばならない。

しかし一方で、九く十世紀における一木彫像の作例に関してしばし

ば留意されてきた「僧形神像」という観点が問題となる。これはかつて岡直己が論じた視角で、いま地蔵などと呼ばれている当期の作例中には、元来は僧形の神像として造立されたものがままあるのではないかとする見方である。奈良県下の遺品に関して提起されたこの観点は、その後しばしば列島各地の作例に適用され普及してきた¹⁰。したがって本展で、地蔵ではなく僧形神像ではないかとの声が研究者からも一般の愛好者からも聞かれたのは(前稿参照)、想定内の反応であった。ただし今から六十年ほど前に提唱された「僧形神像考」は、当時における斬新さ故に、影響を受けた以後の諸論も含めて検証の必要があると考える。個別の作品を地蔵ではなく神の像と主張するには相応の手續きと説得性が求められよう¹¹。本稿でも安易な適用は控えたい。

(5) 造像背景の展望Ⅰ——古代山林仏教における地蔵菩薩——

本像の性格に関して考慮されるべきは、まずは古代山林仏教と地蔵菩薩との脈絡如何ではなからうか。わずかな手がかりを提供するのが、『元亨釈書』が収める釈藏縁の伝である。

釈藏縁。神融法師之徒也。形短小又甚醜。徐步却疾。人走不及。專唱地藏号。無別業。遊化北土。不移佗方。毀譽不遷。好行施利。人間年齒。対曰八十。然其貌如四十許。感通如響。縛鬼降神。白山立山為修練場。晚縛菴白山笥笠而居。臨終高唱地藏号。院中之衆僧聞之、謂、縁勤持念、詰朝至菴見之、向西端座、合掌化。

蔵縁は白山を開いた泰澄¹²(神融禪師)の弟子といい、もっぱら地

蔵の宝号を唱えて別業はなかったという。史実の存在性を確認できないとはいえ、泰澄ともども古代における山林修行者たちの反映をみることは可能であろうし、白山・立山を修練の場としたという点は、越中―能登―加賀―越前の間を往還する修行者の行動を伝えているよう。

長坂一郎は、仏母寺（福井県勝山市）の地藏菩薩立像（像高七四・〇cm）を新たに紹介した論考¹³で、その白山信仰ゆかりの地に伝わった一木彫像の背景を検討するにあたり右の蔵縁伝に着目、「縛鬼降神」すなわち呪縛業の本尊としての性格を同像に想定した。この解釈案は、上体の抑揚を強調せず体奥が薄い仏母寺像（長坂は十世紀後半の作とする）に比して、それに先立つ時期に造立をみた、威圧感さえ与えるほどの塊量性を帯びた本像にこそ適合しやすいのではないか。

（6）造像背景の展望Ⅱ——石動山系の山林仏教遺跡を参照して——

本像の性格を呪縛業の本尊とまで限定するのには一定の留保を要するとしても、制作環境として九〜十世紀における北陸地域の山林仏教との脈絡を、石動山のみに限定せず視野に入れることは肝要であろう。その視野を中能登ないし口能登地域を範囲に設定する時、当該期に重なる山林仏教遺跡や出土遺物として、福水ヤシキダ遺跡（羽咋市）と銅三鈷饒・銅錫杖頭等の出土品、碁石ヶ岳山麓の中能登町小金森から出土した銅三鈷饒が思い当たる。いずれの出土地も石動山系に位置し、前者は八〜九世紀、後者は九〜十世紀の遺物とされる¹⁴。櫻井甚一氏は前者に関する基礎的論考で、白山から石動山を含む能登全域に

「越前の泰澄と同系の在野の修行僧」の活動が展開したと論じた¹⁵。また時枝務氏は、三鈷饒に関して山岳霊場を結ぶ「海の道」を想定する¹⁶。本像の制作環境／造立主体者に対しては、こうした仏教考古学の知見や解釈が照明となりうるであろう。向後に期待を寄せておきたい。

二 十一面観音菩薩立像 【図2】 【図8】

（1）概要

本像は二〇〇七年三月二十五日の能登半島地震で被災し、翌年度に住友財団の助成のもと保存修復が施された経緯がある。本体の構造および保存状態の項は、その際の楽浪文化財修理所による「文化財修理報告書」（二〇〇九年三月、未公開）を参考にしつつ概要を記す。

「形状」天冠台（意匠は下から紐・連珠・紐・列弁）は正面中央で下方に尖る。天冠台上の地髪は髻および頭上面を取り付ける部位（正面・背面各中央とその左右の、概ね同様の間隔をなす六か所）を除いて波状に毛筋彫りを施す。天冠台下の地髪はまばら彫りとし毛筋彫りを施す。天冠台には正面左右で髪束を絡ませる。髻髪一条が耳をわたる。耳朶は環状・貫通。白毫相。鼻孔を穿つ。三道をあらわす。胸・腹のくくれ各一条。条帛を着け、天衣を両肩から懸ける。裙（正面中央で左前に打ち合わせる）・腰布を着け、正面両脚の間に帯の末端二本を垂らし、互いを結ぶ。右手は浅く屈臂し掌を前に向け、第一指を曲げ他指をのぼす。左手は深く屈臂し胸の高さで五指を丸め持物（水

瓶)を執る。腰を左に捻り、右足をやや前に踏み出して立つ。

〔法量〕像高(地髪の頂まで)八一・二(約二尺六寸八分)

髮際高 七六・八(約二尺五寸三分)

頂(地髪頂部)―顎 一五・〇 面長 一〇・一

面幅 九・一 耳張 一一・七 面奥 一一・八

胸奥(右)一四・八(左)一四・五 腹奥(衣を含む)一四・九

肘張(衣を含む)二九・五(衣を除く)二七・八

裾張 二四・八 足先開(外)一七・九(内)一〇・〇

〔品質構造〕寄木造・金泥塗り・玉眼。頭体幹部は基本的に前後二材からつくり割首、内割りする。頭部では前後の材の間に、両耳を含む部分をなす小材を挟む(修理報告書によると三材)。体部は前後の材の間に、右体側部分をなす材を挟み、下方に両踵の部分を含む一材を矧ぐ。両足先、裾裾後方に別材をあてる。右肩以下は手先までを一材製とし、左肩以下は肘・手首で矧ぐ。表面は頭髪(群青を塗るか)を除き、布貼りした上に錆下地、白土地・丹地を施した上に金泥塗りとする。眉・髭を墨あるいは群青で描き、唇に朱色を塗る。着衣には截金文様および盛り上げ文様を施す。臂釧・腕釧(金銅製)を装着する。右手の掌に小さな釘が打ち込まれていた痕跡が認められる。

〔文様〕確認できたものは次の通り。〔天衣〕截金で小さな細長い花卉(花脈あり)を多く配する(蓮華唐草文か)。〔条帛の表〕地は截金で卍繋ぎ文。周縁部は盛り上げて宝相華唐草文。〔条帛の裏〕地は截金で斜格子文。その外縁に太い截金線、さらに外(周縁部との境)に截

金で二重線。周縁部は盛り上げ文様(水流・飛沫をかたどるような文様)。〔腰布〕地は截金で格子文(対角を結ぶ)。周縁部は表裏とも、

截金で平行線を、その先端(外縁)に盛り上げて房状の飾りをめぐらす。地との境界に盛り上げて連珠文帯。その上下に截金で各一本の線。

〔裙の表〕地は截金で雷文繋ぎ文。その随所に截金で二重線を輪郭とする円を配し、その内側に盛り上げて団花文。周縁部は宝相華唐草文。〔裙の裏〕周縁部に盛り上げて唐草文。その外側に截金で二重線。

〔保存状態〕当初部のうち髻、頭上面すべて、条帛垂下部、両肘内側以下の天衣垂下部、左の臂釧は亡失する。天冠台の両耳上やや後方に削平ないし平滑に整形された箇所がある。光背の頭光部・身光部は当初あるいは中世にさかのぼる可能性を認めたい。頭上面(三面が残存)、金属製の宝冠、胸飾、持物(水瓶)、光背の周縁部(頂部のみ残存)および背面三か所の横棧、台座は後補(多くは慶長十四年再興時の所為か)。二〇〇七年三月の地震では右手が前膊半ばで割損した。本体における二〇〇八年度修理時の新補箇所は白毫(水晶製)、三道正面最下部周辺、左手第五指先、条帛下縁の正面中央辺り、両足柄の一部。

〔銘記(修理銘)〕本体背面に「奉納／西尾勸雄母」の朱漆銘がある。光背裏面には頭光部中央に「梵字キヤ」を墨書し、身光部の左右にそれぞれ次の墨書銘がある(通行の字体で表記。へは割り書き)。

(右) 奉再興白山本地十一面觀世音菩薩春日大明神之御作也則御施主越中之中納言豊富朝臣利長卿同御内君様

(左) 為御武運長久国家安全御息災延命如意吉祥二世安樂也

于時慶長拾四（己酉）年／九月吉日本願法印空照

（2）光背と本体の銘文―伝来に關して―

光背墨書銘によると、本像は慶長十四年（一六〇九）に空照を本願、前田利長夫妻を施主として「再興」された。空照はもと越前波着寺の僧で、利家の加賀入国にともない金沢に移った経歴をもつ。利家は、統制の目付役として石動山別當職に空照を据えたと考えられている¹⁷。

「再興」を像自体の造立や寄進と解したかつての説明は適切でなく、銘文資料の通例からすれば、修復や加飾の意味と解するのが妥当である。かつ本像の伝来は未詳ながらも、慶長十四年に石動山に移入されたのではなく、それ以前から山内に存した蓋然性を重視してよい。

なお本体背面の銘は、石動山延命院の後裔たる西尾家¹⁸の文書中の、概ね同文を記す一紙「御寄進之覚」（「表1」18、二五七頁）ともども、同院が護持していた（あるいはその時期があった）消息を示唆する。

（3）院派作品としての理解

本谷文雄氏が手短ながら指摘しているように（本稿「前言」参照）、本像は院派仏師の作品と考えてよい。四角ばった顔や猫背ぎみの体勢、衣縁に大きなうねりをあらわす表現、細かなところでは頭髮の処理、太い耳朶など、南北朝時代の院派仏師作品の特徴を随所に指摘できる。当期の院派では条帛・裙を着ける菩薩立像の作例が少なく貴重である。形状・仕様が近似し、かつ大きさも近い作例として、山形県寒河

江市・平塩寺本尊の阿弥陀三尊像¹⁹の両脇侍を挙げておきたい。かねて南北朝時代の院派仏師の作品と目されていたが、近時の修理にともない左脇侍像の当初の台座から貞治五年（一三六六）の墨書銘が見出され²⁰、制作年代が明らかになった。対をなす右脇侍像は、左手を胸の高さに構え右手を垂下し、腰を左に捻り右足を踏み出して立つ体勢が本像と共通するため、作風の類似をいっそう明瞭に視認できる。

ただし平塩寺の両脇侍像に比して、本像の下半身の着衣表現は煩雑の度が強い。脇侍像と独尊像との違いに加えて、やはり制作時期なり作者なりの相異が関係していよう。制作時期の絞り込みは難しく思われ、幅をもつて十四世紀半ばから後半頃に求めておきたい。

院派仏師は、南北朝時代には足利將軍家と結びつき大きな勢力となった。南北朝～室町期の院派作品は列島諸地域で確認されており、能登でも「表4」にまとめたごとく各地に見出されている。石動山の歴史をながめわたすと²¹、建武二年（一三三五）の全山焼亡後、暦応四年（一三四一）に足利尊氏が再建を促した事実は一応の注意をひく。

（4）長谷寺式十一面観音像の作例として

右手はすべての指先まで当初のものが完存する。多くの十一面観音立像では全指を伸ばして掌を前に向け与願印とするか、第一指と他の指を相捻じて掌を下に向けるものが多いが、本像では第一指のみを内側に折り曲げ、他指を伸ばしている点が注目される。二〇〇八年度の修理報告書も本像について「長谷寺式」という判断を手短に記すよう

に、観音霊場として名高い長谷寺（桜井市）本尊にならったもので、当初はそれと同様に錫杖が備わり、第一指と掌でその柄を押さえていたはずである。掌に認められる釘跡は固定の痕跡と判断できよう。

長谷寺式（長谷寺形）十一面観音像は、右手に錫杖を、それも柄を握るのではなく第一指と掌で挟むようにして持つ点に特色をもつ。

「表3」に、管見に入った作例を一覧化してみた。石川県下では、彫刻に限れば中世にさかのぼる作例として目下唯一となる。

院派仏師による南北朝期の作例は他に見出せていないが、前後する時期には、神奈川称名寺像・長谷寺像、三重安養院像に可能性を指摘できる。このうち称名寺像は、多くの長谷寺式作例が両足先を揃えて立つなかで、右足を踏み出す体勢が本像と共通しており注目される。

なお法量に関しては、高さ二丈六尺とされた長谷寺本尊の十分の一サイズの模像を意図して造立された可能性を提示しておきたい。

（5）伝世過程における性格の再定義——白山本地仏として

光背墨書銘の一節「春日大明神之御作」は長谷寺縁起における造像譚に淵源をもつ言説なのだが²²、慶長の再興時に長谷寺式十一面観音としての本義が認識されていたかは疑わしい。むしろ「白山本地」仏の十一面観音として再定義されていた事実が注意をひく。

石川県下における中世の長谷寺式十一面観音の作例として、白山五院の一つ極楽寺に伝来した画像が知られている（室町時代、加賀市指定文化財）²³。白山信仰の環境下で、長谷寺式の造形が白山姫神の本

地仏としても受容されたことを示唆しており、本像の参考となろう。

三 その他の彫像

（1）毘沙門天立像【図3】

像高三七・九cm（約一尺二寸五分）、髪際高三三・九cm（約一尺一寸二分）。表面には現状、黒褐色の塗膜が認められる。頭体幹部は一材製。内割りなし。左肩から手首までは後補。別材製としていた右肩から先と左手先、持物は亡失。鼻・唇を欠失する。台座は後補。

髻を結び、大袖衣・裙・袴、襟甲ないし領巾・胸甲・籠手・表甲・前楯・腰帶・天衣・脛当・沓を着け、左手を屈臂して肩の高さに構え（宝塔を捧げていたか）、腰を左に捻って立つ。右手は肩の付け根の角度から、高く掲げて戟を執っていたと考えうる。

全体に簡略な彫りながら、肩を後ろに引き腰を大きく捻って立つ細身の神将形像を整った造形であらわす。一九八〇年の報告書は「鎌倉時代初期頃の製作」とみており、概ねこれに賛同しておきたい。

（2）阿弥陀如来立像【図4】

像高四五・七cm（約一尺五寸一分）、髪際高四二・〇cm（約一尺三寸九分）。螺旋は粒状とし、肉髻珠を彫出する。三道をあらわす。白毫を嵌入する（水晶製か）。衲衣・覆肩衣・裙を着け、来迎印を結んで立つ。現状では彩色。像全体を針葉樹（ヒノキか）の一材からつくる。両手

先、両足先、右袖部、光背・台座（墨書銘あり、判読困難）は後補。他像から転用の胸飾（金属製）を着ける。一九八〇年の報告書は「鎌倉時代」とするが、近世に下る可能性も考慮すべきか。近世の真宗における阿弥陀像に同程度の法量の例が散見することも留意したい。

（3）聖観音菩薩立像【図5】

像高五六・八cm（約一尺八寸七分）。髻を結び、天冠台（紐一条に列弁）上の地髪にのみ毛筋彫りを施し、他は素彫りとする。白毫を嵌入（水晶製か）。鬘髪一条が耳をわたる。三道をあらわす。胸・腹のくくれ各一条。臍を彫る。条帛・天衣・裙・腰布を着け、右手は屈臂して施無畏印とし、左手は胸下辺りの高さで持物（亡失、未敷蓮華か）を執り、直立する。表面は現状、ほぼ素地を呈する。頭体の幹部は針葉樹（ヒノキか）の一材でつくり、両肩以下を別材製とする。両手の肘から先、両足先、天衣垂下部、胸飾（金属製）、台座は後補。一九八〇年の報告書は「室町時代と推定される」と記す。あるいは近世作か。

附 羽咋・正覚院の古彫刻より

気多大社の傍らにある正覚院（羽咋市寺家町、高野山真言宗）は、かつて同社神宮寺の子院であった。阿弥陀堂（収蔵庫）安置の木造阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）は講堂本尊であった来歴をもつ。護持されてきた文化財については平成期に市が実施した調査により

総合的の把握がなされており、二〇二三年四月の調査で対象とした（1）十一面観音菩薩立像、（2）地藏菩薩坐像もその成果たる『正覚院・本念寺史料調査報告書』²⁴（以下『報告書』）に基礎的データが載る。屋上屋を架す感はないが、『報告書』に説かれた理解にいささかの補訂を加えておきたく、あえて本稿の附録として略記したい。

（1）十一面観音菩薩立像【図6】

本堂須弥壇上、向かって右側の厨子内に安置される。能登三十三観音霊場第十六番札所の本尊で、以前は阿弥陀堂（収蔵庫）に、前記の阿弥陀如来坐像向かって右側に安置されていた²⁵。『報告書』が刊行された二〇〇七年の十一月二十六日付で羽咋市指定文化財となっている。

二〇二三年の調査では安全上の配慮から移動を控え、安置状態での観察にとどめた。法量（cm）は次の通り²⁶。

像高 八五・一（約二尺八寸一分）
 髪際高 七三・五（約二尺四寸三分）
 頂上仏面頭頂―顎 二一・五 髻頂―顎 一八・一
 面長 一〇・一 面幅 一〇・一 耳張 一二・三
 胸奥（右）一一・四（左）一一・四 腹奥 一一・三
 肘張 二六・八 裾張 二四・二
 足先開（外）一三・四（内）六・二
 台座 高二・七 幅三二・〇

頂上仏面を含む頭体の幹部および右手は手首まで（天衣遊離部を含

む)、左手は臂までを一材からつくり、内割りには施さない。頂上仏面を除く頭上面(別材製で一部が残存。調査時にはほとんどが遊離する状態にあり、台座蓮肉上に一面が置かれていた)、右手先、左手の肘から先、両足先、左手臂から左腰辺りに至る天衣遊離部、天衣垂下部、金属製装身具・光背・台座は後補。両耳には耳朶が欠損した箇所を整形した状態が認められるほか、面部・肉身部・着衣の随所に後代の修理の手が加わっているとみられる。現状、表面全体に古色を施す。

こうした現状は制作当初の造形を評価する上で留意を要するが、脚部正面に二段にわたる天衣のうち下方分に捻れをあらわす点、その下方の裾の正面に両脚それぞれに沿って彫出される間隔の狭い衣文は、平安時代も古い段階に由来する要素と考える。ただし、上体では腰を左に捻って立つ体勢を意図しつつも脚部には遊脚の表現を認めた点など、全体の立体表現にぎこちなさは否めない。裾の折り返し部には正面ではまったく衣文を刻まない一方、『報告書』の写真によればその背面では例をみない独特な衣文を彫出する点も特異である。制作時期は限定しがたいが、十一〜十二世紀における非主流の仏師が、古い規範を部分的に摂取しつつ制作した状況を想定しておきたい。

『報告書』は、本像における諸点が天台寺(岩手県二戸市)の木造十一面観音立像に「通ずるものがある」「構造・造像技法とも共通性が指摘できる」とし、「従つてほぼ同時期の十一世紀後半から十二世紀前半にかけての制作と判断される」と記す。制作時期の判断については概ね首肯しようとしても、全国に数ある平安時代彫刻のなかで、

天台寺像^がとの間に個別的レベルでの類似・共通を見出すことは難しい。

したがって『報告書』が説くごとく「北陸と東北の交流を考察する上でも重要な仏像」とすることはできないが、前記の阿弥陀如来坐像が定朝様を踏襲した十二世紀後半の洗練された作であるのに対し、気多社周辺に伝わった、それに先立つ時期の造像例として留意に値しよう。

(2) 地藏菩薩坐像【図7】

護摩堂に安置される。法量(cm)は次の通り。

像高 三〇・七(一尺一分) 頂―顎 一一・九 面幅 七・二
耳張 八・五 面奥 九・四 胸奥(右) 九・八(左) 九・六
腹奥(衣を含む) 一一・五 肘張 二一・七 袖張 二六・〇
膝張 二五・一 膝高(右) 四・六(左) 四・七
膝奥 一九・三 像最大奥 二〇・三

円頂。耳朶は環状・不貫。三道を彫出する。胸のくくり線は左右で連続させてあらわし、その中央では上向きの弧線を二本陰刻する。衲衣・覆肩衣・裙(胸の下方にその上縁をのぞかせる)を着ける。右手に錫杖、左手に宝珠を執り、右足を外にして結跏趺坐する。

頭部は耳後ろを通る線で前後二材を短ぎ挿首とし、内割りを施す。体幹部は前面・両肩・背面を各一材で構成し、これに両肩以下、両脚部をなす各一材を短ぎ、内割りを施す。体幹部前面材の下方に像心束をつくり出す。両手先、裙先を別材製とする。表面は基本的に素地仕上げかとみられ、三道の下方には胸飾を描く。

面部の中央、眉間から顎にかけて損傷を修理しており、白毫（亡失）周辺および鼻は後補に替わる。この所為に際して、頭部のほぼ全体に古色を施したとみられる。正面の裙先は亡失。両手先とも指先を欠失するが、いずれも後補か。持物・光背・台座はもとより後補にかかる。

『報告書』は「心束を残す構造から見て、院派仏師の作と思われる」と記す。全体の箱を組んだような概形、頭部や耳の形、衣縁・衣文の形状はいずれも南北朝～室町期における院派の坐像作例に共通するもので、規範に倣った制作態度をうかがいうる。ただし県内における院派作例のなかで、とくに像種を同じくし法量も相近い宝泉寺像（「表4」参照）と比較しつつとらえてみると、本像の頭部が大きめで、膝張に対して坐高が大きいプロポーションは際立つ。着衣表現では、素地仕上げという点を割り引いても硬さが否めない。当期の正統的な院派作例にはみられない胸部中央の陰刻線も、それと同質の彫り口として理解できようか。構造面では、当期の院派の坐像作例では一般に像心束に加え、頭体幹部をなす前後の材から左右の束を造り出すが、本像にはみられない。以上から、院派の規範に基づく作例中では下降した段階に属すと考えられ、十六世紀に入ってから制作と考えるべき。院派の広がり・末流を考える上で参考に資する一作例といえよう。

（帝塚山大学文学部日本文化学科教授）

注

1 ①杉崎貴英「奥能登地域仏像調査報告―明泉寺・岩倉寺・粉川寺・重蔵神社―」、②同「奥能登地域仏像調査報告（二）―翠雲寺・南観音院・高田

寺・曹源寺―」、③同「奥能登地域仏像調査報告（三）―明泉寺・上日寺・西光寺、および「いしかわの霊場」展補遺―」（以上『石川県立歴史博物館紀要』三一～三三、二〇二二～二〇二四年）。

2 該当部分を抜粋しておく。「山頂には、石動山に伝来した仏像などを展示した収蔵庫があり、石動山区（鹿島町石動山）の木造地藏菩薩立像（出品三八）の他に、院派仏師の作と推定される木造十一面観音立像（室町・八二）などが公開されています」。

3 杉崎貴英「能登 霊場の古仏への視点」（『いしかわの霊場』展図録）。

4 浅井和春「平安前期地藏菩薩像の研究」（『東京国立博物館紀要』一二、一九八六年）。

5 ①在田則子「収蔵経緯と背景」（『金沢大学資料館だより』七、一九九六年）、②北春千代「能登地区の仏像」（松島健編『仏像を旅する 北陸線』至文堂、一九八九年）、③米林勝二・山瀬晋吾「龍護寺旧蔵の木彫仏」（『資料館紀要』一、一九九九年）。

6 既に北春千代「龍護寺旧蔵の彫像類について」（『金沢大学資料館だより』七、一九九六年）が彫刻史的評価を詳述、十一世紀の作とする。

7 小林忠雄・高桑守史『能登―寄り神と海の村―』（日本放送出版協会、一九七三年）七四頁。『鹿島町史』石動山資料編（一九八六年）第七章「石動山の民俗文化」（小林忠雄執筆）九七四頁にも同様の記述がある。

8 川勝政太郎「能登文化財紀行」一〇五（『史迹と美術』三〇―九―三一―三、一九六〇（六一）年）参照。また櫻井は「珠洲地方の神道文化」（同『能登加賀の中世文化』北国新聞社、一九九〇年、初出一九八〇年）で、「能登における初期本地仏の特色」について「木彫成で、内削りを施さず、衣文など簡略な彫技」などを述べている。

9 岡直己「僧形神像考」（同『神像彫刻の研究』角川書店、一九六六年）。岡はこれに先立ち、「日羅像に就いて」（『大和文華』一四、一九五四年）、「神像彫刻の一考察」（『仏教芸術』三二、一九五七年）で僧形神像という視角・解釈を提唱している。

- 10 井上正「神仏習合の精神と造形」(田邊三郎助責任編集『神仏習合と修験』〈図説日本の仏教六〉新潮社、一九八九年)ほか。
 - 11 杉崎貴英「神仏習合を日本彫刻史にみる」『鷹陵史学』四九、二〇一三年)でこの問題を論じた。
 - 12 近年の総括的成果として、越前町織田文化歴史館編『異人探究—泰澄十一の疑問—』展図録(二〇一七年)、堀大介『泰澄和尚と古代越知山・白山信仰』(雄山閣、二〇一八年)を挙げておく。
 - 13 長坂一郎「勝山市・仏母寺木造地藏菩薩立像について—山林仏教の遺品として—」『MUSEUM』五一七、一九九四年)。同像はその後、大野市歴史民俗資料館『奥越前、未公開・新出文化財展—白山信仰の遺宝を中心に—』(二〇〇四年)で展示公開された。その図録に載る岩井孝樹「奥越前 白山信仰の源流と道元の遺品」は井上正の霊木化現仏論を承けて八世紀の作とする見方を述べているが、首肯できない。
 - 14 いずれも『いしかわの霊場』図録に載る(解説—野村将之)。
 - 15 櫻井甚一「福水出土の古密教仏具からみた能登の山林宗教考」『能登加賀の中世文化』(注8前掲)、初出一九八三年)。
 - 16 時枝務「平安時代前期における山岳宗教の動向—三鉢鏡を手がかりに—」『山岳修験』二九、二〇〇二年)ほか。
 - 17 空照の動向は桜井憲弘「大宮坊に関する史料」(鹿島町教育委員会編・刊『史跡石動山環境整備事業報告書二(大宮坊跡発掘調査概報・整備工事報告)』一九九五年)に詳しい。
 - 18 桜井徳太郎は九学会連合能登調査委員会編『能登』(平凡社、一九五五年)に「もとの延命院の西尾勸雄氏(石動山院坊の少い生存者の一人)」からの聞き取りを摘記している。西尾家については『鹿島町史』資料編(一九六六年)二七八〜二七九頁を参照。
 - 19 県指定時(二〇一六年十一月)の、各像の概要と正面・両側面・背面の写真載せる資料がWEB公開されている。像高は左脇侍像八一・四cm、右脇侍像八一・八cmと記載。ただし髻(両像とも当初)を含む数値のため、髻を亡失する本像より一回り小さい規模の造像となる。
<https://www.pref.yamagata.jp/documents/4927/kai.gishiryoul033-2.pdf>
YBC山形放送ニュース動画「三体がそろって安置は三年ぶり 山形県有形文化財の平塩寺の仏像が修復終える」(二〇二五年三月三十一日付WEB配信)の視聴による(二〇二六年一月七日再視聴・確認)。
 - 20 杉崎貴英「仏師が登場する中世の霊験仏縁起をめぐる」(『日本宗教文化史研究』二〇一、二〇一六年)。
 - 21 「石動山歴史年表」『鹿島町史』石動山資料編、一九八六年)。
 - 22 絹本著色十一面観音図(畑町区)。石川県立歴史博物館編『白山—聖地へのまなざし—』展図録(二〇〇七年)参照。
 - 23 羽咋市教育委員会文化財課編・刊『正覚院・本念寺史料調査報告書』(二〇〇七年三月)。
 - 24 井上雪『北陸四季の寺』(北國新聞社、一九七六年)。
 - 25 面奥など計測しえなかった箇所は記載していない。
 - 26 天台寺像の写真図版を収録する主要な文献を挙げておく。
 - 27 ①久野健(文)・田枝幹宏(写真)『鈍彫』(六興出版、一九七六年)、②佐藤昭夫『みちのくの仏像』(日本の美術二二二)(至文堂、一九八四年)、③岩手県立博物館編『天台寺 みちのくの霊山・桂泉観音』(岩手県立文化振興事業団、一九八七年)、④井上正「岩手・天台寺仏像群(一)」(古今仏への視点二二)『日本美術工芸』六七二、一九九四年)。
- *本稿掲載の写真図版は、石川県立歴史博物館が撮影した画像の使用を基本とし、以下は筆者撮影の画像を用いた。図2・8 光背・台座を含む全図および像本体・光背の全図を除くすべて、図6 三道下に描かれた胸飾の写真、図7 上段中央・右、下段中央を除くすべて。
- 〔付記〕本稿はJSPS科研費23600182(研究課題名「仏像作例をめぐる再認識と理解形成の追跡—郷土史／在野研究／仏教考古学に注目して—」)による成果を含むものである。

〔表1〕石動山信仰とその文化財 参考文献抄 ―研究蓄積の概観のために―

*網羅的なものではないが、図書とくに仏教美術・石造物に関する内容を含むものを中心に掲げる。

1	昭和33年	1958-10	櫻井甚一『能登と加賀の板碑文化』(石川県図書館協会)
2	昭和36年	1961-03	川勝政太郎「能登文化財紀行(四)―鳥屋町・鹿島町―」 (『史迹と美術』312) *能登文化財保護連絡協議会が川勝を招聘。
3	昭和38年	1963-04	『氷見市史』(氷見市)
4	昭和41年	1966-11	『石川県鹿島町史』資料編(鹿島町)
5	昭和46年	1971-01	櫻井甚一『石川県銘文集成』1〈中世金石文編〉(北国出版社)
6		1971-03	文化庁編『白山を中心とする文化財(石川県)』 〈文化財集中地区特別総合調査報告第9集〉(文化庁) *調査は前年5月実施。彫刻担当は西川新次・西川杏太郎・田邊三郎助・田中義恭。
7		1971-08	櫻井甚一『石川県銘文集成』2〈近世初期金石文編上〉(北国出版社)
8	昭和47年	1972-01	櫻井甚一『石川県銘文集成』3〈近世初期金石文編下〉(北国出版社)
9		1972-03	『能登の文化財』第8輯〈石動山特集〉(能登文化財保護連絡協議会) *櫻井甚一「石動山の造形文化財」はその後、本表〔23〕に再録。 『能登半島に於ける石動山文化の史的研究 調査概報』(同上) *表紙・奥付を除き、上記と同内容。
10		1972-10	石川県立郷土資料館編『石動山の歴史と文化』展図録
11	昭和48年	1973-03a	櫻井甚一ほか『能登石動山』(北国出版社)
12		1973-03b	櫻井甚一『石川県銘文集成』4〈経巻・仏画編〉(北国出版社)
13	昭和55年	1980-03	『石動山天平寺歴史資料調査報告書』(石川県教育委員会)
14	昭和59年	1984-03a	『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』(氷見市教育委員会)
15		1984-03b	氷見市立博物館編『石動山信仰文化展―石動山と越中登り口―』図録
16	昭和60年	1985-03	氷見市立博物館編『氷見の石造美術―石動山山麓を中心として―』図録
17		1985-08	『鹿島町史』通史・民俗編(鹿島町)
18	昭和61年	1986-03	『鹿島町史』石動山資料編(鹿島町)
19		1986-07a	鹿島町文化財保護審議会編『鹿島町の文化財』(鹿島町教育委員会)
20		1986-07b	北国新聞社編『石動山 天平の心今に』(鹿島町商工会・石動山系開発実行委員会)
21	昭和62年	1987-12	中村雅俊『虚空蔵信仰の研究』(御影史学研究会)
22	平成元年	1989-03	『国指定史跡石動山文化財調査報告書―八代仙ダム建設計画関連―』 (石動山文化財調査団・富山県氷見市教育委員会)
23	平成2年	1990-01	櫻井甚一『能登加賀の中世文化』 〈石川県銘文集成6研究編〉(北国新聞社)
24	平成3年	1991-04	佐野賢治『虚空蔵信仰』〈民衆宗教史叢書24〉(雄山閣)
25	平成5年	1993-01	櫻井甚一『石川県銘文集成』5〈補遺編〉(北国新聞社)
26	平成6年	1994-02	由谷裕哉『白山・石動修験の宗教民俗学的研究』(岩田書院)
27	平成8年	1996-03	氷見市寺社所蔵文化財調査委員会編『氷見市寺社調査報告書(臨濟宗 国泰寺派・浄土宗・日蓮宗・高野山真言宗・曹洞宗の部)』(氷見市教育委員会)
28	平成10年	1998-01	佐野賢治「修験道と虚空蔵信仰」〈特別寄稿〉 (泉武夫『虚空蔵菩薩像』〈日本の美術380〉至文堂)
29	平成15年	2003-09	石川県立博物館編『能登 仏像紀行』展図録〔主執筆＝本谷文雄〕
30	平成16年	2004-03	『国指定史跡 石動山』(鹿島町) *合併後の新版〔2011-11〕あり。
31	平成18年	2006-03	『氷見市史』1〈通史編1〉(氷見市)
32	平成19年	2007-01	『氷見市史』10〈資料編8文化遺産〉(氷見市)
33	令和元年	2019-04	石川県立歴史博物館編『いしかわの神々―信仰と美の世界―』展図録
34	令和5年	2023-07	石川県立歴史博物館編『いしかわの霊場―中世の祈りとみほとけ―』展図録

〔表2〕『石動山天平寺歴史資料調査報告書』（1980年、〔表1〕13）所載の諸像と、前後の言及状況

*番号・所在・名称・法量・制作時期・備考は同書の記載を転記する。懸仏・石仏は除く。

*制作時期は検討を要するが、同書での記述を「」で掲げる。文献1～34は〔表1〕のNo.に対応。

番号	名称	法量 (cm)	制作時期・備考	その他の文献	
(一) 石動山所在の彫刻					
1 伊須流岐比古神社の諸像					
(1)	木造五社権現本地仏		「本殿神座」に安置。 「いずれも近世の製作」。 ①は「作品的にも優れ、年代も他の四軀より若干遡るとみられる」とする。	18・22・30	
	①	木造虚空蔵菩薩坐像			像高 45.7
	②	木造十一面観音立像			像高 41.5
	③	木造蔵王権現立像			像高 27.2
	④	木造將軍地藏菩薩像			像高 35
	⑤	木造俱利伽羅不動明王像			像高 55.3
(2)	木造本地仏		(制作時期に言及なし) (制作時期に言及なし) 「江戸後期の本地仏であつたに相違ない」	18・22	
	①	木造虚空蔵菩薩坐像			像高 27
	②	木造聖観音立像			像高 36.5
	—	木造明王立像			(記載なし)
	—	木造僧形立像			(記載なし)
(3)	木造狛犬		「江戸時代後期」	18・22	
	阿形	像高 63			
	吽形	像高 62			
2 石動山区有 (旧寺坊) の諸像 *当時「石川県林業事務所内に設けられた収蔵庫に安置」。					
(1)	木造地藏菩薩立像	像高 88	「平安時代末期」	6・9・10・11・18・22・23・29・34	
(2)	木造毘沙門天立像	像高 37.5	「鎌倉時代初期頃」	18・22	
(3)	木造阿弥陀如来立像	像高 45.8	「鎌倉時代」	18・22	
(4)	木造聖観音立像	像高 57.5	「室町時代」	18・22	
(5)	木造十一面観音立像	像高 82	慶長 14 年 (1609) 光背銘	18・19・25・30・34	
(6)	① 木造金剛界大日如来坐像	像高 36.7	「江戸時代後期に 同一作者によって」	18・22	
	② 木造胎藏界大日如来坐像	像高 36.8			
(7)	木造虚空蔵菩薩坐像	像高 42	「江戸時代後期」	18・22	
(8)	木造多聞天立像	像高 62.7	「江戸時代後期」	18・22	
(9)	木造不動明王立像	像高 46	「江戸時代後期」	18・22	
(10)	木造弘法大師坐像	像高 62.5	元禄 17 年「祖師堂」銘	9・18・19・22	
(11)	銅造歓喜天立像	像高 13.5	厨子あり 制作時期言及なし	18・22	
(二) 五社権現分霊社などの彫刻 *本稿では詳細を略し、下記の受念寺 (鹿島町) 像のみ掲げておく。					
2	木造虚空蔵菩薩坐像	像高 29.5	寛文 2 年 (1662) 銘	2・8・9・11・18・19・22・23・24・28	
(三) 石動山下山の彫刻					
1 長楽寺の諸像 *旧鹿西町。2016 年の火災により、下記はいずれも焼失した。					
(1)	木造大日如来坐像	像高 128.0	頭部平安後期 伝、講堂旧在	18・22	
(2)	木造二天王立像 *2 軀	像高各 140	台座に享保 15 年銘 伝、大師堂旧在	18・22	
(3)	木造地藏菩薩立像	像高 72.5	「江戸時代」	18・22	
(4)	木造不動明王立像	像高 104	「江戸時代」	18・22	
(5)	木造弘法大師坐像	像高 87	「江戸時代」伝大師堂旧在	18・22	
2	本土寺の仁王像 *伝、中門旧在	(記載なし)	旧鹿西町「江戸初期頃」	18・22	
3	光善寺の阿弥陀如来像 *坐像	像高 55	七尾市飯川町「江戸時代」	18・22	
4	法華寺の五智如来像 *5 軀	像高 45～54	旧柳田村「江戸時代」	9・18	
5	長福寺の大日如来像 *2 軀	像高各 33	旧柳田村「江戸時代」	9・18・22	

「表 1」18『鹿島町史』石動山資料編

多くは、氷見市域所在分を含めて、さらに

「表1」18『鹿島町史』石動山資料編は、氷見市域所在分を含めて、さらに多くの遺品をとりあげている。

〔表3〕中世の長谷寺式十一面観音像（懸仏・石仏を除く）

◎＝国重要文化財、□＝府・県指定、△＝市・町指定文化財

年代	指定・所在	地域	像高	備考
安貞2年(1228)頃	◎ 伝香寺	奈良県奈良市	10.7 cm	善円作か。納入品。
1219以降・1256以前	◎ パラミタミュージアム（興福寺旧在）		121.6 cm	長快作。
文永元年(1264)	△ 長栄寺	千葉県市原市	158.8 cm	賢光作。銘に「長谷」。
文永元年(1264)頃か		神奈川県鎌倉市	932.0 cm	文明以降、修理数度。
文永5年(1268)	◎ 乙訓寺	京都府長岡京市	175.0 cm	秋篠寺旧在。
文永6年(1269)	△ 摩尼院	大阪府河内長野市	57.6 cm	銘「円栄」は作者か。
文永11年(1274)以前	□ 観音寺	福島県会津若松市	183.3 cm	下記、弘安寺像の原型。
文永11年(1274)	◎ 弘安寺	福島県会津美里町	194.6 cm	銅造。両脇侍あり。
弘安元年(1278)	△ 薬仙寺	兵庫県神戸市	85.9 cm	右手先は後補の由。
正応3年(1290)	◎ 西大寺	奈良県奈良市	590.8 cm	修理後供養時の年代。
鎌倉時代(13世紀)		奈良県奈良市	117.3 cm	地藏堂に安置。
鎌倉時代	△ 宝樹院	愛知県常滑市	157.2 cm	
13c末～14c初め	□ 安養院	三重県松阪市	174.4 cm	近世の両脇侍あり。
13c末～14c初め		奈良県奈良市	178.2 cm	頭部は後補。
鎌倉時代末期	□ 長谷寺	群馬県高崎市	187.0 cm	前立像。
鎌倉末～南北朝期	□ 奈良木神社	熊本県八代市	134.0 cm	
正安2年(1300)	□ 金禅寺	大阪府豊中市	145.8 cm	
徳治3年(1308)頃	□ 燈明寺	京都府木津川市	182.0 cm	舜慶周辺の作か。
嘉暦年間(1326-29)	◎ 称名寺	神奈川県横浜市	192.5 cm	海岸尼寺旧本尊。
建武元年(1334)頃	△ 観音寺	奈良県奈良市(六条)	184.5 cm	康成作か。
貞和6年(1350年)	□ 新長谷寺	茨城県八千代町	180.0 cm	院祥作。
14世紀後半頃	△ 石動山資料館	石川県中能登町	85.7 cm	光背に再興銘あり。
14～15世紀	△ 松尾寺	奈良県大和郡山市	42.8 cm	行成(康成)作。
15c末～16c初め	△ 鹿野園町	奈良県奈良市	95.0 cm	椿井仏師の作。
永正4年(1507)		奈良県奈良市	124.4 cm	仙算作。
永正10年(1513)	△ 観音寺	奈良県奈良市(都祁)	63.1 cm	
享禄4年(1531)	□ 西念寺	奈良県天理市	179.5 cm	実清・源四郎ら作。
天文7年(1538)	◎ 長谷寺	奈良県桜井市	1018.0 cm	運宗ら作。
	□ 報恩寺	島根県松江市	425.8 cm	康運作。
天文7年(1538)以前		神奈川県鎌倉市	178.0 cm	本尊前立像。
天文10年(1541)	△ 千萬院	奈良県田原本町	189.5 cm	源四郎ほか作。
永禄3年(1560)	□ 大福寺	奈良県広陵町	185.3 cm	実清・源四郎ら作。

〔参考〕長谷寺式ではないが、長谷観音信仰に関わることが銘文・伝来等で確認される作例

建保6年(1218)	△ 満願寺	京都府舞鶴市	134.5 cm	坐像。観賢作。
室町時代	△ 長谷寺	鳥取県倉吉市	101.0 cm	坐像。院派の作か。
明応6年(1497)	△ 殿村自治会	三重県津市	18.8 cm	坐像。定栄作。

*本表作成にあたっては、多くの文献および諸自治体のインターネットサイトの文化財指定に関する情報を参照した。

文献のうち『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記編』（中央公論美術出版）各巻のほか主に以下のものを記す。
 ①奈良国立博物館編『室町時代仏像彫刻―在銘作品による―』（学芸書林、1970年）、②和光大学芸術学科日本彫刻史ゼミナール編・刊『三重・松阪市仏像調査報告書―朝田寺・薬師寺・古井集会所・安養院・海徳寺―』（1987年）、③奈良県教育委員会編（鈴木喜博執筆）・刊『宿院仏師―戦国時代の奈良仏師―』（奈良県中世彫刻調査報告）（1998年）、④瀬谷貴之「長谷観音信仰と中世律宗」（『鎌倉』100、2005年）、⑤伊東史朗編著『調査報告 長快作 長谷寺式十一面観音像』（岡田文化財団パラミタミュージアム、2008年）、⑥根立研介「霊験仏と納入仏を通じた聖性の移植をめぐる」（『美術フォーラム21』22、2010年）、⑦三重県総合博物館編（瀧川和也執筆）・刊『三重の仏像―白鳳仏から円空まで―』（展図録（2019年））、⑧奈良国立博物館編（山口隆介執筆）「修理完成記念 特別公開 奈良・法華寺十一面観音立像」リーフレット（2025年）。

〔表 4〕能登地域における院派の作例 一覧稿

*管見に入った図書資料に写真が載るものに限った。なお一部、院派の作か否か等に検討を要するものを含む。

所在		名称	像高	備考	文献	
珠洲市	法住寺	金剛力士像(阿形)	239.1	享禄2年(1453)銘。院勝・院超作。同年の奉加帳納入。	①⑤⑨	
		金剛力士像(吽形)	247.7			
	曹源寺	釈迦如来坐像	33.5	本尊。脚部後補。	⑤⑥	
	高照寺	薬師如来坐像	27.9	享禄元年(1528)銘あり。	⑪⑫⑬	
輪島市	西光寺	薬師如来坐像	28.4	頭頂部に後補部分あり。	⑩	
門前町 (現輪島市)	總持寺祖院	観音菩薩坐像	30.4	伝「白衣観音」。	⑤⑥⑧	
	宝泉寺	釈迦如来坐像	62.0	本尊。下記は両脇侍。	⑤⑥	
		文殊菩薩騎獅像	83.5	法量は当初の台座を含む。		
		普賢菩薩騎象像	83.0	法量は当初の台座を含む。		
		地藏菩薩坐像	42.0		⑤	
七尾市 (旧中島町)	定林寺	釈迦如来坐像	72.5	像内墨書銘(貞治3年[1364]か)。	⑤⑥	
		文殊菩薩騎獅像	34.5	両脇侍は院派の特徴を示すが、中尊は作風を異にする。		
		普賢菩薩騎象像	35.0			
中能登町 (旧鹿島町)	石動山資料館	十一面観音菩薩立像	81.2	光背裏面に慶長14年(1609)「奉再興」等の墨書銘あり。	⑥⑨⑩	
羽咋市	永光寺	釈迦如来坐像	72.5	本尊。元応3年(1321)定審・定守作の当初像とする説、14世紀後半(中尊)・15世紀初頭(両脇侍)作とする説あり。	②③④⑤	⑥
		聖観音菩薩坐像	36.0			
		虚空蔵菩薩坐像	37.0			
		聖僧文殊菩薩坐像	73.0	僧堂安置。坐高57.5	⑤	⑥
		達磨大師坐像	69.0	法堂安置。坐高47.0。		
		大権修理菩薩坐像	59.0	法堂安置。坐高47.0。		
		徹通義介坐像	104.5	伝燈院安置。像主は瑩山の師。	③④⑤	⑧
		瑩山紹瑾坐像	115.0	同上。像主は永光寺の開山。		
		明峰素哲坐像	109.0	同上。像主は永光寺の2世。		
		峨山韶碩坐像	106.0	同上。貞治5年(1366)銘。		
	正覚院	地藏菩薩坐像	30.7	護摩堂安置。前後束はなし。	⑦	

文献 *珠洲市高照寺薬師如来坐像の像高は、石川県立歴史博物館の示教による。

- ①珠洲市教育委員会文化財課編『法住寺史料調査報告書』(珠洲市教育委員会、1999年3月)
 ②遠藤廣昭「能登永光寺法堂及び僧堂の中世彫刻について」『横浜市歴史博物館紀要』3、1999年3月)
 ③羽咋市教育委員会文化財室編『永光寺史料調査報告書』(羽咋市教育委員会、2000年3月)
 ④東隆真監修(本谷文雄編)『図説永光寺ものがたり 歴史と文化財』(五老峯永光寺復興奉賛会、2002年3月)
 ⑤本谷文雄「能登の禅宗寺院に伝わる院派の仏像」『石川県立歴史博物館紀要』15、2003年3月)
 ⑥石川県立歴史博物館編(本谷文雄主執筆)・刊『能登 仏像紀行』展図録(2003年9月)
 ⑦羽咋市教育委員会文化財課編・刊『正覚院・本念寺史料調査報告書』(2007年3月)
 ⑧薄井和男「能登總持寺祖院観音菩薩像と永光寺瑩山紹瑾禅師像」
 (『鶴見大学仏教文化研究所紀要』22、2017年3月)
 ⑨石川県立歴史博物館編・刊『いしかわの霊場—中世の祈りとみほとけ—』展図録(2023年7月)
 ⑩杉崎貴英「奥能登地域仏像調査報告(3)一明泉寺・上日寺・西光寺、および「いしかわの霊場」展補遺一」
 (『石川県立歴史博物館紀要』33、2024年11月)
 ⑪中井夏帆「よみがえったお薬師さま」〈令和6年能登半島地震によせて vol.6〉
 (『石川れきはく』151、2025年7月)
 ⑫石川県立歴史博物館編・刊『れきはくの文化財レスキュー 令和7年度夏季特別展
 「未来へつなぐ—能登半島地震とレスキュー文化財—」によせて』(2025年7月)
 ⑬能登町教育委員会事務局文化財係編・刊『能登町文化財レスキューNEWS』15(2025年7月)



図1 石動山資料館保管 地藏菩薩立像





図2 石動山資料館保管 十一面観音菩薩立像





図3 石動山資料館保管 毘沙門天立像



図4 同前 阿弥陀如来立像



図5 同前 観音菩薩立像

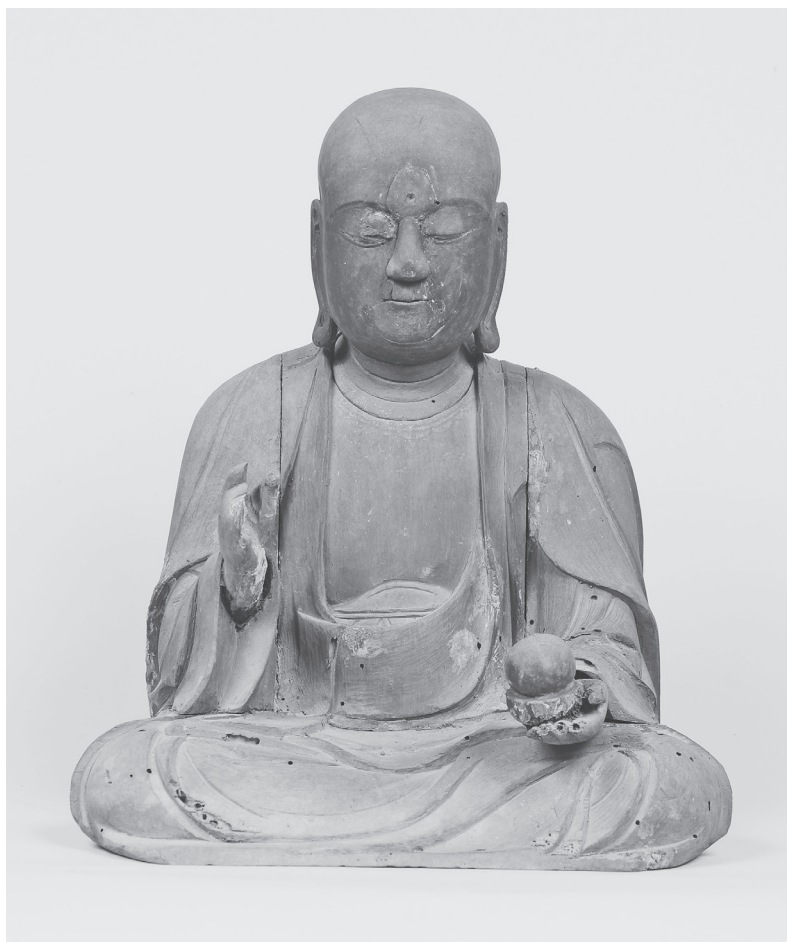


図6 正覚院 地藏菩薩坐像

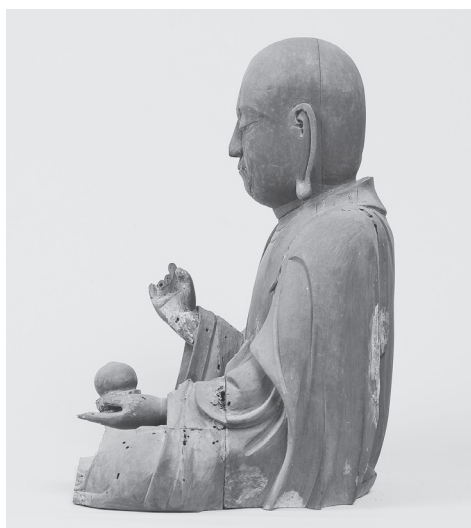




図7 正覚院 十一面観音菩薩立像



腰布の文様（左腰あたり）



右手の詳細（掌に釘の痕）



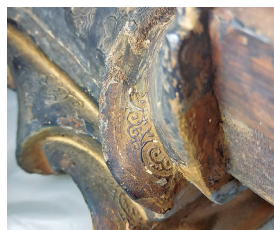
条帛の文様（右脇腹あたり）



正面 裙の折り返し・腰布の文様



正面 裙の文様



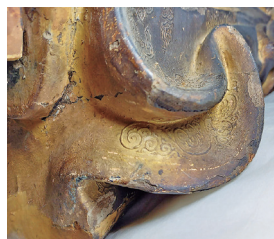
裙の裾裏側の文様（右足外側）



裙の文様（右足外側）



裙の文様（背面左裾あたり）



裙の裾裏側の文様（左足外側）

図8 石動山資料館保管 十一面観音菩薩立像



二〇世紀金沢の祝祭行列

―戦勝・御大典・市祭・学校祭―

大門 哲

一 課題

拙稿「金沢の祭礼俄」で、藩政期より明治三五年（一九〇二）の尾山神社昇格慶賀祭までの祝祭行列（催し物）の変化を検討し、その代表格であった俄が一八世紀後半より矢口、堀川、小立野などと通称される方面地域と東・西の廓を母体に発展し、幕末には祝祭行列の中心として人気を集めるようになり、さらに明治三〇年（一八九七）代に入ると、集団の大規模化、他の催し物との複合・混交化、集団内での趣向の個人／秘匿化という三つの変質を遂げたことを考察した^①。

本稿の目的はその続編として、明治三六年（一九〇三）から昭和三年（一九五五）までの祝祭行列の実態を検証することにある。同年を下限とするのは、百万石祭・百万石行列や金沢美術工芸大学祭・仮

装行列など今に続く祝祭行列の基盤が形成された節目の時期にあたるためである。

行列の経過を追うなかでとくに注目したのは、二〇世紀祝祭行列の最大の特徴といえる提灯行列についてである。その報告分析にあたり留意したいのはまず地域受容の様相である。岸本亜季の成果により行列の濫觴を把握できるが、いまだ地域社会における受容とその後の変化を見届けた成果はない^②。

つぎに人々にとつての提灯行列への参加意義である。行列が催されるのは国民的祝祭が基本であった点、同祭に人々がいかなる意義を見いだしたかに議論は集約する。同祭に関する先行成果は、概して国民統合という定型的な枠組みに解釈を収斂しがちであり^③、その解釈にしたがえば、行列は人々が国民としての主体性・一体性を獲得する機

会にすぎないかに思える。はたして人々はかくも受動的な存在だったのだろうか。

三つ目に行列の統御のありようである。提灯行列の規模は町単位を基本とする通常の祝祭行列の枠組みを超え、街路・広場といった都市空間を埋め尽くす千・万単位の群衆レベルに膨張した。中筋直哉は戦勝祝賀会に参加する群衆は監視・制御される「マス・ゲームの一位」でしかなかったと指摘したが^④、提灯行列というマスゲームにしその運営・統御の方法や、またそもそも主催者・参加者にとつての統御の意義が検証されたことはない。以上、提灯行列に関し、地域社会、主体性、統御という三つの視点に留意し記述をすすめる。

二 日露戦争と祝祭行列

(一) 提灯行列の定着過程

藩政期より明治三五年（一九〇二）まで金沢における祝祭行列（催し物）は、獅子舞の勇壮さ、祇園囃子の華麗さ、そして仮装・踊り・囃子・造り物から構成される俄の滑稽さを魅力としてきた。このような形態を変質させる契機となったのが日露戦争開戦後における提灯行列の普及である。

提灯行列の歴史について、岸本亜季は、学生・学校が西洋のトーチライト・プロセッションを模倣として推進したもので、明治二〇年（一八八七）まで起源がさかのぼれるが、音楽・歌に合わせたの歩行、

軍隊風の身体動作、火器を用いての集団行為への不安などから、実質、日露戦争まで一般的でなかったと指摘する^⑤。

石川県でも明治三二年（一八八九）の憲法発布、同二七年（一八九四）三月の明治天皇結婚二五周年記念、同年開始の日清戦争の勝利などの国民的祝祭での実施は認められず、そのときはいずれも造り物装飾や在来の祝祭行列を繰り出すにとどまった。

明治三六年（一九〇三）になると提灯行列が大衆レベルで定着したことは石川県に接する富山県西砺波郡石動町の同町開始三〇〇年祭で各種催し物のひとつとして提灯行列が繰り出したことから想像できるが（一月五日「北國」）、金沢において頻発化するのは、岸本の指摘通り、日露開戦後である。

学校文化として始まり、西洋由来・西洋音楽・規範的行進を特質とする未経験の行列を人々はどのように受け入れたのか。開戦以後の金沢の人々の祝賀の動向を整理すると、明治三七年（一九〇四）二月一〇日の宣戦布告から約一か月後の三月中旬から五月の九連城攻略までの漸次拡大時期、旅順攻略への期待から戦勝祝賀を先走りに行う同年六月以降の先行実施時期、同三八年（一九〇五）一月の旅順陥落の公報を受け股腰を極めた第一次沸騰時期、そして同年五月の日本海海戦勝利で賑わう第二次沸騰時期、そして同三九年一月の金沢凱旋を祝う第三次沸騰時期に整理できる。以下、行列の実態を報告する。

①宣戦布告後…明治三七年三月

開戦以降、交戦の様子が日々細かに報じられるなか、県内各地の寺

社で戦勝祈禱が盛んに行われるようになる。たとえば、三月一日には石川郡二塚村の佐寄神社で宣戦奉告祭・戦勝祈禱祭が行われ戦勝守護の守札が授与され、また鳳至郡三波村矢波の広福寺では聖壽無量武運長久怨敵退散の祈禱般若会を執行した（三月一日「北國」）。

三月中旬、旅順陥落の一報が届く。同月一日、金沢市内の家々は国旗を掲げ、祝意を表した。このとき、補助座に出演していた壮士俳優花房太郎（初代英太郎）一座が同座の楽隊を先頭に野町端より大樋の端までの大通りを提灯を掲げ歩き、北國新聞社前で君が代を吹奏し、終了後海軍万歳などと叫んだ。途中所々から野次馬連有志が加わり盛況をみせた。また同座と連携し、市内最大の自転車販売店・双輪舎の面々が赤提灯をもつて万歳を叫びながら自転車走らせた。翌一五日には明治印刷会社及び南町有志が提灯行列を実施した（三月一五、六日「北國」）。

俳優一座や自転車店による、なかば広告行列的な行進が金沢の人々に提灯行列という様式を知らしめるきっかけとなったのである。「野次馬連」や「有志」がつぎつぎと参入し集団が膨張した点に従来の祭礼行列との相違を見いだせる。

では、俳優一座の行列をみた人々はどうな感想を抱いたのか。記者はその扮装に関し思い思いの格好が滑稽にみえることから「茶番」と批判し、また「市民よ戦勝を祝す大に能し 唯だ酔ふ勿れ狂ずる勿れ 誠卒たれ熱誠たれ大國民の襟度を忘るべからず」と釘をさした（三月一六日「北國」）。つまり、メディアレベルでは、すでに、提灯行列と

は、国家や軍隊などの体制への礼節をもって規範的・形式的に行うべき、在来の祝祭行列とは異なる様式であるという認識がもたれていたとわかる。

戦局動向に人々が夢中となるなか、これまでは金沢実業会が出征軍人の送迎や戦捷祝賀などの市民動員型の事業について計画をすすめていたが、三月一四日、同会は知事を会長とする石川県愛国議会に事業を委ねる。愛国議会とは県下全体を管轄とし、軍資供給、軍人その他、従軍家族の扶助、恤兵などを目的とした組織で、明治三七年（一九〇四）一月二三日に結成された（三月一六日「北國」）。

四月中旬、戦勝祝賀、士気の鼓舞、不景気挽回を目的とし、青草町・安江町・彦三町・天神町三丁目・材木町一二丁目・宝船路町・伝馬町などの有志が思い思いの扮装で軍歌をうたいながら提灯行列を催した。市街地の要所には行列をひと目みようと、老若男女が押しよせた（四月一九日「北國」）。

注目すべきは観客の反応である。新聞は提灯行列が「まだ「當地では珍し」のために、見物客の方が多かったと報じており（四月一九日「北國」）、開戦まもなくの時点では物珍しい行列として受け入れられたと判断できる。

四月三〇日、九連城戦勝の報告を耳にした笠市町の有志者三〇名が青年提灯行列会と記した桷笠をかぶり、九連城占領と記した紙を貼った大籠を先導に行列をなし、要所で踊りながら、万歳を唱え練り歩いた（五月一日「北國」）。

つまり、マスコミが「茶番」と批判した俄的な行列が、定番となっていたことがわかる。人々にとつて戦勝は近代が生み出した刺激的な祝祭機会であり、国民的祝祭ゆえに提灯行列という新たな様式を導入したものの、単に紅提灯を持つて歩くだけでは、日常からの解放や人々との歓喜の共有を達成できないために在来の様式である俄的趣向を複合させたのである。

提灯行列との距離感を物語るのが既存の民俗行列との接合である。五月三〇日より六月一日にかけ、石川郡野々市村六日通区有志は戦勝祝賀と防虫のため征露軍歌を高唱しつつ田んぼで松明行列を実施した（五月三二日「北國」）。岸本は提灯行列の初期形態として大松行列をあげているが、石川県では虫送りの延長上で提灯行列を受容した地域もあつたのである。

戦勝気分が徐々に盛り上がる中、五月六、七日に招魂祭が催される。同祭の景気盛り上げもあり安江・近江・博労・十間・青草・尾張・中島など各町の有志が毎夜、提灯行列を催した。目を引いたのは博労・十間・青草各町の行列だった。大きな軍艦の造り物に海軍将校に扮した数名をのせ、楽隊がはやし立て、「日本勝った露西亜負けた」とうたい練った（五月九日「北國」）。

造り物・仮装・音楽を組み合わせた行列に対し、新聞は、「各町の隊々に在りて何れも少なからぬ婦人を見たが何となく異様の感受あるのみならず風紀上より見るも感心した事にはあらず」「當地に在りては是迄随分多くの提灯行列あり、今後共續々執行さるべきも是迄の

所にては仁輪加染めたるもののみにして一の熱誠よりなれる提灯行列を見ざるは遺憾」「市内の学校生徒間にありては（中略）模範たるべく隊伍整々熱誠を以て祝意を表する事に努むべし」などと、「仁輪加染めたる」行列として今まで以上に批判を強めた（五月一日「北國」）。

新聞や世間の批判を受けてか、県はこのような状況に対し、五月一八日付けで行列の参加規則をはじめて明示した。その内容は責任体制や事前申し出、隊列遵守など一二項目におよぶもので、隊列に関して「男女混同し行列をなすべからず但小児は此限にあらず」「卑猥の行装をなすべからず」「行灯、提灯、章旗等に用ゐる竿は長さ二間以内とす」などの指導を行つた（五月一九日「北國」）。

翌三八年（一九〇五）の関連記事にはこのときの規制の主眼は「提灯行列を利用し卑猥の行装をなし狂態を演ずる者ありしより是を制せん爲」とふりかえており（一月四日「北國」）、県令の眼目は旧来の祝祭行列と提灯行列との明確な峻別をはかり、前者を単なる「狂態」として、いいかえれば騒擾の萌芽的状况としてみなし否定することにあつたと理解できる。

人々の姿を狂態・騒擾として否定する行政当局側の判断は、提灯行列を国民としての主体・統合化の実践として安易に解釈できないことを示唆する。国家や軍の体制への内部化（礼節・忠誠）を度外視し、ただ趣向を楽しむ姿は、山口昌男の徒党論を想起させる。

山口は徒党の特質を、盗賊、芸能集団、ジャスなどを例に、感情の

共同性、日常からの隔離性、即興性、体制からの外部性などを指摘した^⑥。提灯行列の実態を鑑みると、その内実は、国民的祝祭という機会を利用し、非日常に没頭・耽溺することを目指す徒党行為にひとしかったといえる。

むろん国民としての立場を国民的祝賀において自覚しない人はいないだろう。しかし、人々は国民としての主体性を獲得するために祝祭に参加したのではなからう。他者との日常からの解放感の分かち合いのために参加するのであり、そしてその分かち合いという遂行性のなかで、国民としての自負と一体性を事後的にかつ刹那に意識したにすぎなかったと思われる。

明治三十七年（一九〇四）五月末になると、戦勝に酔いしれる心理状態となり、県内各所で諸団体が自発的に提灯行列を実施するようになる。五月二十八日には四高北辰会報国議会在が「征露の歌」「提灯行列の歌」を歌いながら（五月二十八日「北國」）、また六月一日頃、小立野一帯住人が楽隊を「三組に分ちて行列の歩調を整へ」行進した（六月一日「北國」）。

県の指示を受け、規範性が一見守られたかにみえるが、郡部の様子を見ると、二六日には能美郡安宅町の有志者一五〇〇人が模造軍艦を先頭に行進しており（五月二十八日「北國」）、俄的趣向を完全に排除することはできなかったとわかる。

②旅順陥落への期待…明治三十七年六月

明治三十七年（一九〇四）六月半ば、旅順陥落が近いという情報が出

回り祝賀の準備が活発化する。注目すべきは、学校間や方面地域での連携による行列の大規模編成／群衆化がこのころから活発化したことである。

石川郡野々市村では同地学生団体主催、小学校・消防組・音楽隊・青年団体参加により提灯行列の実施を決める（六月一三日「北國」）。また、市内県立学校合同の提灯行列の挙行が予定されることとなり、第一中学校は行列歌を選定した（六月一四日「北國」）。

さらに石川郡安原村・下安原青年団は大提灯行列を行うべく提灯四〇〇個を購入し（六月一八日「北國」）、小立野一帯の町民は楽隊編成や行列歌作詞などをすすめ（六月一九日「北國」）、金沢市商工会議所は六月二一日に「金澤各団体祝捷會規定」を定め、戦勝の公表をもつて合同提灯行列を実施することにし、参加費・集合場所・服装提灯などの細かな規定を決めた（六月二三日「北國」）。学校や青年団、商工会議所などの公的な機関・組織が規範性をもった行列の実施を企図するようになったわけである。

留意したいのは、提灯行列の準備にあたり四高は「蒼溟千里海鳴りて」で始まる「征露の歌」（五月二十八日「北國」）、野々市村学生団体は「露西亜は平和の敵ぞ」の歌詞を「四百余州」の譜にのせ（六月一三日「北國」）、第一中学校は「満州の野原を蹂躪り」の歌詞を「マーチ」の譜にのせてという具合に（六月一四日「北國」）、各団体がそれぞれ独自に軍歌の譜を選び新たに作詞をしていることである。

つまり、軍歌に趣向を凝らし、ほかの団体との差別化をはかり、そ

れにより各団体は結束性を高めようとしたわけである。いいかえれば、行列は群衆化をみせつつも、その構成単位間での競合志向をもったといえる。

その背景には軍歌の消費形態の変化があった。金沢の市街地が軍歌で包まれる最初の機会となったのは日清戦争の凱旋時と想定できるが^⑦、日露戦争開戦頃には明治三十七年（一九〇四）二月の新聞広告に陸軍少将・福島安正作詞、石川県師範学校教諭・新清次郎作曲の「征露軍歌」（敬文館発行）の販売広告が大きく掲載されたように（二月一四日「北國」）、軍歌の日常的な消費が進み、さらに地元新聞紙には一般からの投稿された軍歌歌詞が頻繁に掲載されるようになる。つまり、軍歌作詞が大衆の文芸娯楽として親しまれるようになったのである。つまり、規範的な提灯行列は文芸娯楽の披露の機会として人々に受容されていったといえる。

七月に入ると、提灯行列や祝賀イベントの準備は県内全域へ拡大する。各地の様子を列挙すると、市内洋服業者は海軍帽子に陸軍服を装い旅順陥落の軍歌をうたいながら行進することを協議し（七月一日「北國」）、また石川郡御手洗村相川新では具体的な実施計画を定め（七月一日「北國」）、能美郡仏教青年会は提灯三〇〇個を用意し（七月二九日「北國」）、七尾町では西湾の雄島雌島にロシア艦造り物を設け大砲で撃ったり、山車大行灯を練りまわったり、碇に日の丸の文様の揃いの衣装を着ての常盤新地芸妓による祇園囃子を行ったりする計画を相談し（八月五・二一日「北國」）、鳳至郡浦上村では村内各

寺の鐘太鼓を鳴らし、夜に提灯行列・打ち上げ花火を催す計画を話し合った（八月一六日「北國」）。

提灯行列実施に向け多くの町が準備をすすめ、また一部の町は実施に踏み切ったが、七月末には連勝報道に慣れ、興奮も徐々に落ち着きをみせていった。結果、市内ではしだいに「國旗を見ることも稀」となり、「旅順口陥落をのみ待ち詫ぶる」心理状態となった（七月二九日「北國」）。

一方、陥落の公報が一向に出ないことから流言が出回るようになる。八月七日頃には一週間以内に陥落の公表がされるという情報が流れ、各地で戦勝の準備がすすめられた（八月七日「北國」）。号外配布用にと、金沢の興行王たる福助座の座主・梅若は法被・手ぬぐい七〇人分を北國新聞社に寄贈して、勝利を心待ちにした（八月一日「北國」）。また北國新聞社は一日に市街地中心の香林坊に旅順陥落記念塔を建設し、公報発表を受け点灯すると告知した（八月一日「北國」）。待ちきれず提灯行列を実施した地域もあった。能美郡吉田村では八月一日に各字一五〇人の青壮年が海・陸軍隊を装い、花火を合図に練りまわった（八月一六日「北國」）。

八月末、県愛国議会は旅順陥落の発表後の三日目に、半鐘・釣鐘・太鼓・金盞・三味線などを全県下で打ち鳴らすことを決め、また第四高等学校（以下「四高」）や県立学校は提灯行列実施に向け学校スケジュールの調整をすすめた（八月二四日「北國」）。

金沢における打ち鳴らしの催しは明治二八年（一八九五）七月の日

清戦争祝賀の際、東廓が様々な音を打ち鳴らし練り歩いたのをさきかけとするが、公的機関が主導したのは初めてとなった。後日の新聞記事にはこの計画について「是れ大阪博覧會に於ける全市鳴を擬したる者にて縣下に在りては一寸眼新しく否な耳新らしく感ずべし」（八月三〇日「北國」とみえ、これから、当事業は明治三十六年（一九〇三）に大阪で開催された第五回内国勸業博覧會をモデルとしたこと、そしてこのときはじめて「県下鳴」という言葉が周知されたとわかる（八月三〇日「北國」）。

九月に入ると、県愛国議会は「県下鳴」の実施にむけ、寺院・家々・廓・劇場など各関係方面で具体的な準備が進めさせ、気分の高揚を促した（九月七日「北國」）。しかし、このような長期にわたり浮き足だった動きに眉をひそめる意見が少なくなかった。

さかのぼって六月下旬、金沢税務署長は新聞で「戦捷祝賀と勤儉論」なるコメントを新聞に発表し、提灯行列や祝宴は「無益の時間と費用」の消費と否定し、その労力は日常業務に向けるべきと論じた（六月二三日「北國」）。

また八月下旬には、県内務部長は各郡市長に対し祝賀の動きに対し、「虚飾に流れ贅費を要するが如きは助めて之を省き町村若くは學校の基本財産其他有益なる事業に寄附し其發展を謀る」べきと釘をさした（八月二五日「北國」）。

しかし、この無益・虚飾とする批判を受け止めた人々がどれだけいたのか。数日後には石川郡倉山村は征露軍歌をうたいながら行進する

とともに各種造り物をこしらえる計画をすすめた。このとき歌われる軍歌は「祝へや祝へいざ祝へ」と最後に繰り返される、実質、祝い歌であった（八月三十一日「北國」）。

旅順陥落を待ちつづける県民にとって、知らせが届かない鬱憤を晴らす絶好の機会となったのが遼陽占領だった。九月六日、占領の公報を受け、「県下鳴」が行われた（九月七日「北國」）。商店ではこのときを商機とみ、市内片町の石川屋が「紀念菓子遼陽」、また坂尾菓子店は「露艦しるこ」を販売した。露艦を描いた菓子を茶碗に入れ熱湯を注げば菓子が沈没溶解して汁粉となり中から日章旗が出るしかけを凝らしたものだ（九月六日「北國」）。

六日、堰を切ったように県下各地で提灯行列が繰り出した。河北郡坂井村福久では一二歳以下五歳以上の少年一二〇人が小国旗で飾る帽子、白いシャツに白い袴下を身に着け、背囊を背負い、氏神社で万歳を三唱し、区内出征者を廻り万歳を唱えた（九月一〇日「北國」）。また、江沼郡大聖寺町では各町がロシア打囃子、劍舞踊、楽隊囃子、絵行灯、曳山獅子、カンテラ行列、曳山囃子、獅子舞、曳山神楽囃子、大勝踊などを繰り出し、また大仕掛け火花を焚き、もはや祭礼とかわらぬ盛り上がりを見せた（九月六日「北國」）。

郡部では県が示した規範指示を遵守する姿勢はほとんどなかったが、金沢では対照的に児童・生徒が率先して規範的な行列を行い衆目を集めた。七日には上胡桃町は、袴を穿き帽子をかぶった少年、揃いの海老茶袴をはいた少女、総勢一五〇人で提灯行列を行った。「久振

り」のことだったため「非常に多くの」見物人が集まった（九月九日「北國」）。

八日には県立学校（第一第二中学校、師範学校、工業学校）の合同提灯行列が初めて行われた（九月一〇日「北國」）。行列形態は事前に取り決めがされ、各学校は徽章を染めた赤提灯を掲げ軍歌を合唱しながら四列で行進した。行列の様は「肅々として」「歩調を整えつつ」と評価されるように規範性を強くみせるものだった。

この合同行列の参加人数は定かでないが、金沢における最初の大規模行列となった。街路を紅提灯が埋め尽くすその威容を新聞は「香林坊高より片町通りを臨めば先隊は犀川大橋を渡れるも後續隊は尚ほ片町に溢れ宛然火の帯の如く其の壯觀や譬ふるに物なく斯る大提灯行列は金澤市ありて以来の事なるべし」と報じた（九月一〇日「北國」）。

人々も「火の帯」と称えられた未曾有の行列を一目見ようと、大通りの要所要所へ走って向い、押し合いへし合いし行進を待ち望んだという（九月一〇日「北國」）。この光景は、提灯行列は群衆規模の参加によつてスペクタクル性を帯びることを人々に強く感受させることとなったのだろう。後述のとおり、のちにメディアは提灯行列をスペクタクルショーとして喧伝し、見物を扇動するようになる。

県立学校の行列は人々の興奮を昇華させる役割になったのだろう。その後、しばらく行列はみられない。そして、さらに興奮から覚めるきっかけとなったのが戦争の悲惨さを物語る周囲の変化にあった。九月以降、新聞紙面を連日のように戦死者の葬儀の案内・報道や、葬儀

社や義足義手販売の広告が飾った⁸⁾。とうぜん、街路を練り歩く行列の主役は戦死者の野辺送りの葬列となっていたのである。

③旅順陥落から日本海海戦勝利へ…明治三十八年一月

ふたたび戦勝祝賀の盛り上がりを見せるのは翌三十八年（一九〇五）正月以降である。同年一月二日、待ちに待った旅順陥落の知らせが届いた。北國新聞社は、二日、前年八月に香林坊高に設置した記念電気灯に漸く点火した（一月三日「北國」）。また同社社員は梅若が寄贈した法被をまとい万歳を連呼し鈴を鳴らしながら号外を配り、また北陸軍楽隊が演奏しながら市中を練りまわった（一月三日「北國」）。

県の指示以降、金沢では俄的な行列がほとんどなされず盛り上がりには欠けたことに批判があつたのだろう。県は提灯行列の参加拡大のため、三日付で、俄的趣向を制限する前年五月の県令について、参加意欲をそぐものとして撤廃した（一月四日「北國」）。

三日、小立野一帯や泉寺町が提灯行列を繰り出し、絹糸会社は模造軍艦を曳いて練った（一月五日「北國」）。同日、前年八月末に県愛国議会が実施を予告していた県下鳴の実施に向け、新聞に特別広告を掲載し、以下のとおり県下全域に行動手順をしめた。

「二月四日正午時ヲ期シ各市町村同時ニ祝捷ヲ爲スコト」「各戸国旗ヲ掲ゲ屋外ニ出テ五分間警鐘及梵鐘又ハ太鼓等總テノ鳴物ヲ鳴ラシ男女老若一齊ニ大元帥陛下万歳 帝国陸海軍萬歳ヲ三唱スルコト」「団体又ハ組合等多人数集合スルモノハ一定ノ場所ニ於テ萬歳ヲ三唱スルコト」（一月三日「北國」）。

ちなみに新聞一面を飾ったのが「旅順陥落祝賀賣」と掲げた殿町の森忠商店の広告であった。同店は五日から一〇日まで「景品」として「萬歳伏露」（福袋）を呈上すると宣伝した（一月四日「北國」）。日清戦争以来、戦勝祝賀は格好の商機となったが、今回の場合は、戦勝に加え、買い初め（初市）が重なり、人々はかつてない高揚感をもって買い物を楽しんだと想像できる^⑨。

四日、予定通り県下鳴が実施される。金沢では三味線、石油缶、延べ金、金盥などの打音が二〇分間にわたり鳴り響いた（一月五日「北國」）。同日午後、東廓芸妓三、四〇人が思い思いの紛争で旗行列を行い、途中、祝捷踊を催し、また夜には高岡町、卯辰一帯の提灯行列が行われた（一月五日「北國」）。

同日、金沢商業会議所は翌五日に実業団体関係者五〇〇人程度の参加を見込み提灯行列を実施することを決定し、新聞に、参加者は、兼六公園内前田侯爵家所持地内に事前に立てた団体名を記した高提灯を目印に集合すること、提灯は会議所が準備し、蠟燭及び高提灯人夫は参加団体の負担とすること、兵営内中庭で整列し万歳を唱えることなどの取り決めで発表し、また行列歌の統一のために、「難攻不落の堅塞と」から始まる「提灯行列の歌」の歌詞を掲載した（一月四日「北國」）。

学校団体以外での大規模合同行列はこれが最初の機会となった。行列の一团が営内に入り万歳を唱えるのも今回が初めてとなったため、司令部はこのとき限り、事前に員数を届け出ることを条件に出入りを

容認した（一月六日「北國」）。

行列は法螺貝を合図に集合場所の公園を出発し、知事邸前、石川門、営内各連隊の営内を一周し、中央連隊記念の松樹の下に一端集まり、兵士とともに万歳を唱え、その後自由行動となり営内各部隊で万歳を叫びながら、引き揚げた（一月七日「北國」）。

五日、尾張町橋場町合同、堀川口一〇か町合同、大衆免一八か町及び主計町、犀川神社氏子合同一〇〇〇人など、方面地域や氏子圏など、地縁性にもとづく広域にわたる大規模合同行列があいつぎ催された（一月五、六日「北國」）。

五日以後も自発的な参加が続いた。たとえば、同月七日には新豎町二〇〇人、大工町河原町合同、泉町一帯五〇〇人（一月八・九日「北國」）、九日には象眼町・荒町・鍛冶町などの町単位のほかに、上堤町の山下商店が、楽隊で囃しながら幻灯器械を持ち回り要所で東郷大将や瓜生中将の肖像、海戦ボンチ絵を投影する余興を行い、一〇日には五日に参加した堀川がふたたび行列を催した（一月一二日「北國」）。

四日の開始から五日もたつと、規範性をもった行列は減少し、俄的行列が目立つようになる。一〇日には川上地区が四七士の扮装で練り、また一二〇〇名からなる上金石町の大行列のなかには、看護婦、二〇〇名の海軍水兵、露西亜払いと称える道化などが混じった（一月一二日「北國」）。露西亜払いは、俄の一種である悪魔払（弥彦婆）をもどいたものだろう。趣向の競合をもって祝賀する伝統的な行列様式の発露を人々は抑えることはできなかったのである。

県はいったん俄的趣向を黙認したものの、行列が催されると、警察は、新塲町の一团には女装の男が参加したため衣装を取り換えさせたり、また酔って歩く参加者も多かったようで、騎兵の服装で参加し竹で道を叩きながら歩く泥酔参加者に注意を与えたりするなど、こまかな指導を与えた（一月一日「北國」）。

旅順陥落祝賀は、参加団体の群衆化をすすめる初の機会となったが、ほかに小学生の動員を促す契機となった。六日、市内尋常高等小学校児童一万八千余りが兼六公園の明治記念碑前にいったん集まり、万歳を三唱したあと、各校長の引率のもと、小国旗を箆挿しにして隊列をなして営内に入り、万歳を三唱した。その姿を新聞は「規律ある」と絶賛した（一月七日「北國」）。なお、同月一日には師範学校付属小学校生が日章旗を携え石川門より営内に入り万歳と唱えており（一月一二日「北國」）、児童の旗行列はこのときから定番化していったとわかる。

また前年九月に県立学校合同でとどまっていた提灯行列は一月一〇日には官立学校の四高・医学専門学校が加わり、兼六公園を出発地とし、楽隊を伴い、軍歌を唱え、「足並み」そろえて行進した（一月一日「北國」）。その姿について見物人が讃えたのが師範学校で、評判が悪かったのは四高だった（一月一二日「北國」）。

児童・学生が行う行列に対し、大人たちは、行政機関やメディアが理想とする「整然秩序」性を有すべきという視線を向け、その実施を国民としての主体性を獲得するための教育活動の一環として評価する

ようになったといえる。宮地正人は日露戦後、小学校が国家と人々をむすびつける「主要なルート」となったと指摘したが、提灯行列こそが具体的なルートであったといえる⁹⁰。

三月一〇日、日本軍は奉天を占領する。日露戦争のなかでも指折りの激戦での成果に、旅順陥落と同じように人々は歓喜すると思いきや、反応はにぶかった。同月一二日付けで県愛国議会は一日正午から各市町で鳴物や国旗掲揚、万歳三唱で祝捷をなすことを公告した（一月一四日「北國」）。

金沢市では消防組に半鐘・虫送り太鼓・お祭り太鼓などを準備させ、午前に各組を広坂通へ集め、正午をもつて一斉に乱打させた。鳴らす時間は五分間の予定だったが、各消防組は地元への帰路も鳴り響かせ、万歳を唱えながら練った（三月一五「北國」）。消防組は明治期に入り祝祭行列の母体としてしばしば動員されたが、その流れは日露戦争にも続いたのである。

三月一九日、兼六公園で奉天・撫順大戦捷祝賀会が催され、多くの人々で賑わったが、提灯行列は一七日に四高・材木町天神町有志・市内銀行会社合同が繰り出した程度であつたために（三月一九日「北國」）、市内の提灯屋はこの空前の大勝利に提灯行列の少ないのは理解できないと零したという（三月一六日「北國」）。

奉天占領の祝賀が盛り上がりになかったのは旅順陥落からわずか二か月しか経っていないためと、戦死者の葬式の増大によって提灯行列を盛大に繰り出す雰囲気がかげ間になかったことが原因となったと想像で

きる。

そのころの世間の雰囲気は明治三八年（一九〇五）五月二〇、二一日の招魂祭にも及び「戦争中の事とて市民の多くは多少控目」で、各町の飾り付けは少なく、行列などの催し物が出ることもなかったという記事から察せられる（五月二一・二二日「北國」）。

招魂祭から一〇日後、沈鬱な空気は一掃される。五月末、日本海海戦の勝利を受け、ふたたび金沢は沸騰を見せた。その第一報が伝わった五月三十一夜から祝賀行列が繰り出し、翌六月一日には午砲を合図に市中各戸で太鼓、金盃、石油缶などを打ち鳴らし祝意を表した。奉天占領の際を踏襲し、ふたたび消防組が旗を押して、纏を振り、種々の鳴り物をならし、国旗を肩にのせ、勇ましく旗行列をなした（六月二日「北國」）。

同日夜から行列の自発的な参加が増え、一日夜には川上有志連他二、三の団体が楽隊を先導に練り歩き、翌二日昼に小学校合同の旗行列が繰り出し、夜には野町一丁目から六丁目が合同で、さらに三日夜は各銀行会社や金沢医学専門学校が提灯行列を行った（六月三日「北國」）。

④凱旋…明治三八年一〇月

明治三八年一〇月二三日、九師団の凱旋を控え、金沢市の臨時議会において歓迎委員組織設置や歓迎費一万円支出の議題が可決された（一〇月二四日「北國」）。県愛国議会でも市当局とは別途、歓迎準備にむけて準備をすすめ、下士卒五万人へ一名あたり金一〇銭、また県

出身下士卒二万人に一名あたり二五銭のそれぞれ割符をもって物品を呈することに決定した（一〇月二八日「北國」）。

市では停車場より師団司令部に至る順路に道路両側の屋上から蜘蛛の巣のごとく線を張り国旗や万国旗を吊り下げ、また各町に屋根を国旗で葺くなどの装飾をほどこす計画をたて、町ごとに一五〇〇円の設置費用を交付し委託した（一〇月二八日「北國」）。凱旋門建設も市予算で行うこととなり、その経費として一〇〇〇円が計上された。材料には野田山の松樹が用いられた（一〇月二八日「北國」）。

凱旋の前日の一〇月二九日、北國新聞社は論説「出征軍隊の凱旋」を掲載し、満艦飾をもつてだけでなく、「各人家は宜しく先づ進んで種々の歓迎優待法を案出」するように促した（一〇月二九日「北國」）。誠意・礼節をもつて凱旋を祝うよう人々に諭したのである。

三〇日午前、関係委員会は沿道の一九か町の総代五〇人を招集し、満艦飾にかかわる旗や飾り方の基準を説明した（一〇月三一日）。同日午後八時、第一陣となる補助輸卒隊が金沢駅に帰着する。午前中に満艦飾の説明会が行われたことからうかがえるように凱旋門はまだ建設されず、また満艦飾の準備も整わないままだった（一〇月三一日「北國」）。

ちなみに凱旋門が建設されるのは凱旋兵が増大する直前の明治三八年一二月初め頃と思われる。一二月六日付記事には停車場前をはじめ、停車場新道・下堤町・安江町・尾張町・上堤町・南町・片町に設けられた凱旋門の図が掲載された（一二月六日「北國」）。建設の主導

は停車場新道が陸軍用達商業団体、下堤町が金沢絹糸業団体、ほかは各町であった（一二月六日「北國」）。

明治三十九年正月を迎える。元日の新聞には「凱旋之新年」という見出しが躍り、「謹賀新年 第九師団歓迎」などと掲げた有力店舗の全面広告が複数掲載され（一月一日「北國」）、歓迎気分を盛り立てた。

三日以降、後備第一師団司令部をさがげに次々と凱旋する（一月三日「北國」）。沿道核町は満艦飾に彩られ、また学校生徒や一般歡迎者などが連日出迎え、万歳を連呼した（一月四・六日「北國」）。

興味深いのは軍歌の役割の変化である。新聞には師団幹部が作詞した「第九師団凱旋軍歌」がつつぎと掲載された（一月三日「北國」）。軍歌は九師団の戦地での活躍を時系列にそって顕彰した内容であった。軍歌は戦意高揚にかわり戦功顕彰の役割をになうようになったのである。

一月一三日午前一時、大吹雪の金沢に第九師団大島師団長以下幕僚が凱旋する。荒天ながらも市中は熱気に包まれ、新聞は歓迎の様子を「何等壮絶の光景」と報じた（一月一四日「北國」）。新聞はその後「明日の凱旋軍隊」なる号外を出し、各隊の帰着予定を知らせ、人々の出迎えを要請した（一月一六・一九日「北國」）。

沿道には「陸軍送迎式」によって各隊がそれぞれ参列し、一隊が通過するたびに捧銃の敬礼を行った。また各学校生徒は沿線に整列し、ほか一般歡迎者が人垣を築き、一隊が通過するや帽子を振り、傘をかざして万歳を連呼した（一月四日「北國」）。將軍・幕僚が万歳の声に

応じ挙手答礼をしたことに見物人は歓喜の反応を示したことから、新聞は「各軍隊も是に倣ふを要す」と対応をもとめた（一月四日「北國」）。

なお、人々はみな誠意と礼節をもって歓迎したわけではない。万歳の声に驚き馬が暴れるのが面白いと、野次馬連がしきりに馬を驚かし、またそれを止めようと押し倒す乱闘がみられた（一月四日「北國」）。兵隊をからかう連中もいたのである。

凱旋から一か月余り後の二月九日、北陸・岐阜四県合同の九師団将校歓迎会が兼六公園旧長谷川邸跡で開催された。歓迎当日は「県下鳴」が行われ、それが終わらぬうちに市内各消防団が纏を先頭に国旗を携え、鳴り物を打ち鳴らしながら旗行列を催し（二月一〇日「北國」）、翌一〇日夜には各県立学校合同の提灯行列が兼六公園より繰り出した。この時提灯の準備が間に合わず、紅提灯や日の丸をペンキで描いた白提灯などを携帯したという。参加者の規模がかつてないものだったとわかる（二月一日「北國」）。

以上、日露戦争にかかわる行列の様相をみてきた。経過を小括すると、当初、各団体が小規模な自発的・散発的な提灯行列を行ったが、行列の実態は仮装や造り物の趣向の披露を愉悅とする俄の様式を前面化したものだった。このような俄的形態は提灯行列の趣旨から逸脱するものとしてメディア・行政当局は抑制するよう指示をしたが、その後、俄的趣向の禁止は行列参加の意欲を削ぐものとして容認へと立

場を変えた。

提灯行列の群衆化をもたらしたのが旅順陥落祝賀であった。当初、学校団体が規範性をもった提灯行列を催したが、徐々に俄的行列が増大した。一方、児童・生徒による秩序だった行進は、提灯行列のあるべき姿、国民として一体性を人々に示す役割をもった。この結果、大人は俄的様式、若年層以下は規範的様式をそれぞれ基軸とする二種類の提灯行列が定着することとなった。

(二) 凱旋門の系譜と変質…二見浦・華表から緑門へ

日露戦争をめぐる人々の祝賀の様子をみてきたが、行列をもちたてた造形物としてあらためて注目したいのがアーチである。日清戦争の際は敦賀より徒歩で金沢へ凱旋したために、市街地と郡部との境界となる都市南端の泉新町・野町を始め市内各所に緑門や俵の積み物式アーチなどが設けられた。

日露戦争の場合、軍隊は金沢駅に降り立ち中心市街地を通り城内へと行進したために、既述のとおり、停車場にメインとなる巨大な凱旋門を構え、ほか営舎までの市街地各所におかれた。日清戦争の際の規模は不明だが、日露戦争の凱旋門は絵葉書などから（金沢の絵葉書集「金沢市図書館web」、周囲の建物を圧倒する巨大さをうかがえ、人々に与えたインパクトはきわめて大きかったと想像できる。各所におかれる凱旋門は祝祭空間としての都市の全体性と街路がもつ広場性を意識させる役目をもった。

ただし、留意したいのは、人々にとって凱旋門は決して新規の造形だったわけではないことである。それを受け入れる慣れ親しんだ様式があれば、文政七年（一八二四）に堤町は道路片側に「高さ十間計之二見の浦作り物」を、もう一方道路片側に「日」（太陽）をこしらえ^⑩、また安政三年（一八五六）には安江町が北野社造り物の関連で巨大な鳥居を町の出入り口にかざり（「造り物細工物幟幕提灯杯見聞噺の種」石川県立歴史博物館蔵）、さらに慶応二年（一八六六）には南町が上堤町からの入り口などに箇所に「大門」を構えた^⑪。

明治に入ると、藩政期の鳥居・華表の形態を踏襲した造形のほかの形態が目につくようになる。たとえば、明治二四年（一八九二）の金沢開始三〇〇年祭では、「華表」を池田町が、「緑門」を百姓町・南町・橋場町が、「鳥居」を笠市町・木倉町が建てた。橋場町の「緑門」を新聞挿絵でみると、形状は鳥居形で注連縄を張り御幣を垂らしたものであった（図一／一〇月一五日「北



図1 金沢開始300年祭の緑門
明治24年10月15日「北陸新報」

陸新報)。つまり、国民的祝祭普及以前に街路にそびえたつ巨大なアーチ状の造り物をかざる文化が根付いていたのである。

国民的祝祭での設置が認められるのは明治二十七年（一八九四）三月の大婚式奉祝からである。このとき北廓入り口に花門がおかれた（三月一日「北國」）。凱旋門なる表現が登場するのは同年の日清開戦後である。同年一二月に兼六公園内の祝捷大会会場入り口に「凱旋門」を模した、高さ四間半幅七間の「緑門」が建てられた（一二月二日「北國」）。また翌二十八年（一八九五）五月の戦勝祝賀を祝う御用祝賀会には出羽町練兵場入口に花で作った高さ七間幅九間余の「凱旋門」が建てられた（五月二十六日「北國」）。

明治二十八年（一八九五）七月の第六旅団・第七連隊の凱旋時には籠や俵など各種素材でこしらえた「花門・緑門・凱旋門」が、郊外・袋町・石浦町・香林坊・殿町・連隊門前・泉新町・野町一丁目個人商店・公園内・長町・上伝馬町・宝船路町、富本町・上石引町・中石引町・御小人町・材木町二丁目に設置されており、かつてないアーチのひろがりをもてた（七月一日〜二日「北國」）。

このときの形態を新聞挿絵で見ると、鳥居形が多いものの、前年よりも凱旋門に形状が近くなったとわかる（七月八・九日「北國」）。気になるのは建設コストである。連隊門前に建てられた「凱旋門」には「能久治寄附」と大きく表札が飾っており、当時は一豪商がその建設資金を負担があったと認められる（七月九日「北國」）。

アーチ型の巨大造形はその後、地元主催の都市祝祭でも各所でみら

れるようになる。明治三十五年（一九〇二）の尾山神社昇格慶賀祭では犀川・浅野川両橋に橋の欄干を含めすべてを杉葉で飾りたてた大がかりなアーチが造られ、また南町、千日町、西廓、北廓など町レベルでも出入り口にアーチが建てられた。ほか元五枚町は華門を、上伝馬町は杉葉の鳥居を、橋場町では橋詰めに二本の支柱に小屋根をわたし長提灯を吊るし、町内の曲がり角に大鳥居をそれぞれ建てた（七月四日・五日「北國」）。

橋をアーチ型造り物の装飾場所としたことに注意したい。かつてこのような通行拠点に設置されたことはなかった点、アーチ形造り物に対する認識が変わったことを示唆していないだろうか。つまり、日清戦争凱旋を契機に、人々はアーチを空間を立体的に華美化する装置から、通過／行進を荘厳化する装置へと読み替えたのである。

（三）臨時大招魂祭と戦争娯楽の発展

日露戦争以降、西洋発の灯火だけを参加アイテムとする提灯行列が定着していったわけだが、旧来からの祝祭行列はどのような経過をたどったのだろうか。明治三十五年（一九〇二）の尾山神社昇格慶賀祭以来、ひさびさに多種多様な行列が繰り出す機会となったのが同三十九年（一九〇六）四月一八・一九日開催の臨時大招魂祭であった。

日露戦争終了翌年に催された同祭は勝利祝賀と戦死者鎮魂を総括する意味をもち、かつてない規模となった。「祭典中最も衆目を惹き最も驚嘆の聲を高らしめ」たのは工兵大尉木尾久雄の設計で偕行社庭園

内に造られた旅順要塞の模型で、いかに陥落に苦心惨憺したかを感じ取れたという（一〇月三日「北國」）。木尾は大正四年（一九一五）に石川鉄道を創設したことで知られる人物である。

ちなみに歩兵第七連隊の兵士の日記『日露戦役日誌』明治三十八年（一九〇五）九月二日条（石川県立歴史博物館蔵）には、工兵第九大隊があつた清国・四家子に旅順要塞の一〇〇分の一模型がおかれていたため、同隊祝捷会の際に参観者が非常に多かったとみえ、大招魂祭の造り物は戦地に置かれていた軍事用模型の製作経験を活かしたものと考えられる。

人々はどんな思いで模型を見たのか。能川泰治は旅順要塞模型などの余興について人々にとつて日露戦争の記憶は旅順陥落の記憶として残ったことを意味すると指摘するが^⑬、旅順陥落が話題の中心となつた前提には、それらを一目見ようとする人々の根底に戦場の壮大な風景や兵士たちが勇敢に活躍する世界を芝居を眺めるかのように楽しもうとする欲望が潜在し、その欲望の充足に旅順がもつともふさわしかったためと考えられる。

つとに報告したとおり、金沢の人々が祝祭において戦争を視覚的な娯楽文化として享受するようになるのは、明治二十六年（一八九三）の招魂祭以降、戦場惨状の再現（追憶）と戦死者慰霊のために花火興行を大規模化してからである^⑭。

戦場を主題とする造り物が目立つようになるのは明治二十七年（一八九四）一二月の官民共同大祝捷会以降である。材木町が酒造道具で原

田重吉の玄武門破りを、また兼六公園内では臥竜山を舞台に北京城陥落、霞が池で松島と清艦の鎮遠・定遠との海上激戦の様子を表した（二月一日「北國」）。

その後も同二十八年（一八九五）、二十九年（一八九六）の招魂祭で牛莊市街戦の造り物が飾られ（明治二十八年一月一日、同二十九年七月一日「北國」）、同三十八年（一九〇五）一月八日の旅順陥落を祝う偕行社の大祝捷会では盤龍山・二龍山の炎上を見立て、またロシア戦艦セヴァストポール撃沈の様子を演出した（一月九日「北國」）。

往時、戦争が娯楽消費対象となつていたことを直裁に物語るのがパノラマ興行である。明治二十七年（一八九四）六月には香林坊大神宮境内に南北戦争を主題とするパノラマ館が（四月二三日「北國」）、同二十八年（一八九五）八月には尾山神社境内で日清戦争平壤激戦を表したパノラマが（七月三十一日「北國」）、同三十二年（一八九九）四月には同地で日清戦争旅順口陥落を表した周囲六〇間の「金澤大パノラマ館」が（四月二一日「北國」）、日露戦争時には同三十七年（一九〇四）八月には犀川市場興行場に日露戦争の旅順口陥落、南山金州得利寺の激戦などを主題とするパノラマ館がそれぞれ興行された（八月三日「北國」）。

見物客はこれら造り物やパノラマを通しリアルな戦場体験として消費していたことは明治二十七年（一八九四）一二月の官民共同大祝捷会会場の兼六公園の造り物に対し、見物人が「正に是れ黄海の激戦を目の当たり見るが如し」と語つたという報道から理解できる（一二月一

日「北國」。兵器や兵士を主題とする造り物はその後、祝祭行列の定番となっていくが、その趣向の選択背景には戦争が娯楽文化の主題として人気を集め続けた事情があったと想像できよう。

臨時大招魂祭の催し物に視点をもどす。その実施経過をみると、四月二日に金沢市担当局は各町総代を招集し、桜花の軒飾り・幔幕・提灯をもつての街路装飾、生花・盆石・造り物の陳列、町・家ごとの緑門・飾り物の設置、各廓での手踊り実施、そして「母衣獅子祇園囃子其他催し物は精誠之を奨励する事」を求めた（三月三十一日「北國」）。

市の指示を受け、当初、堀川一〇か町（七ツ屋町・淵上町・西堀川町・中堀川町・間ノ町・古餌指町・東堀川町・角馬丁・笠市町・巴町）の五〇〇余名からなる大名行列、小立野の一二か月、卯辰の「大仁輪加」、ほか各町から獅子舞・祇園囃子などが繰り出す予定だったが（四月一八日「北國」）、降雨のため、参加したのは堀川（大名行列）、並木町（俄）、野田寺町（俄）、天神町（獅子舞）などにとどまった（四月二〇日、二一日「北國」）。

行列のなかで人気を集めたのが堀川の大名行列で、「ソレヤこそ堀川の大名行列だと老若男女は沿道の要所々に駆け集りて忽ち人垣を造」った（四月一九日「北國」）。その行列は雲助歌をうたいながら、荷物を担ぐお手古が先頭で、衣装は友禅縮緬の襦袢を着て、青竹・播り粉末で太刀を表した。

荷物に張り付けた「加賀中納言」の木札四、五枚のうち二枚は旧藩時代の行列に実際に使われたものだった。ほか鉄砲はツイサメで、槍

は竹の先に豆稈を結びつけ、弓は稲担ぎ棒に大小の鋸鎌をつけ、矢は黍稈で、二頭の馬は籠でそれぞれこしらえるという具合にすべて農具の造り物だった。観客は「滑稽の中にも坐ろに懷舊の念の情」を感じざるをえなかったという（四月一九日「北國」）。

大掛かりな俄が繰り出した臨時大招魂祭の余波は同年一〇月二・三日の招魂祭にも及ぶ。悪天候のため取りやめとなったが、当初は弥彦婆（中島町、七ツ屋町）、獅子（上中島町）、祇園囃子（木ノ新保四番丁）など複数の催し物が練る予定だった（一〇月二日「北國」）。

ただし、都市祝祭の中核だった招魂祭はこのころから人気に陰りがみえてくる。明治四一年（一九〇八）一〇月の同祭について「市内大通りにては各戸國旗を掲出せる位にて概して景気も引立たず」（一〇月二日「北國」）、同四三年（一九一〇）五月の同祭について「各町に何等の催し物もなく只餘興として相撲のみなる招魂祭は年を逐ふて寂れ行く」「郡部より見物のため出澤するものは稀なれ」（五月一四日「北國」）と報じられたように、人気の衰退を見せ始めた。

その原因は資金難にあった。明治四二年（一九〇九）三月の記事「招魂祭の規模縮小」によれば、義援金を募集して費用にあてていたが、当局者の煩雑さや一般人民への負担のそれぞれ軽減のために毎年の例祭を儀式のみにとどめ、三、五年おきに大祭を催す方向を関係者が協議したとみえ（三月一二日「北國」）、事業規模を縮小させる方向となったとわかる。

(四) 開かれた営庭内と学校

都市祝祭は出羽町練兵場・兼六公園を主要な会場としてきたが、日露戦争頃より、普段一般人が出入りできない二つの空間が加わるようになる。ひとつが金沢城址におかれた九師団営内で、既述のとおり旅順陥落祝賀あたりを最初にし、以降、師団主催の陸軍記念日、歩兵連隊主催の軍旗祭、火砲祭などの祝祭の際には開放され、多くの市民が見物に訪れるようになった。兵士の家族にとっては貴重な面会機会となった(明治四三年九月一日「北國」)。

見物客を楽しませようと兵士が力を注いだのが造り物と仮装行列だった。軍隊の造り物に関しては以前、報告したため^⑧、ここでは行列の様子を概観する。陸軍記念日の様子をみると、明治四一年(一九〇八)三月には第二中隊が紙製の帽子を被った楽隊を先頭に巡查・古武士・虚無僧などに仮装し営庭内を一巡し(三月一日「北國」)、同四三年(一九一〇)三月には、工兵隊が桃太郎、神功皇后、大江山鬼退治、日清・日露戦争凱旋などの歴史凱旋行列を練った。携帯道具はいずれも軍隊での日用器具のみでこしらえたもので、「頗る滑稽」と喝采を集めた(三月一日「北國」)。

軍旗祭の様子をみると、明治四三年(一九一〇)三月には、狐の嫁入り、贈り物揃いなどの仮装行列が行われた。武骨な兵士が島田髻に友禅の帯をしめる女装姿に見物客は腹を抱えて笑った。また持ち合わせの物でつくった頭で獅子舞を演じ感嘆を呼んだ(三月二五日「北國」)。同四四年(一九一一)九月には九中隊が仮装行列、五中隊が獅

子舞、一一中隊が天狗行列、六中隊が弥彦婆、一二中隊が達磨行列・獅子舞を練った(九月一日「北國」)。

さらに火砲祭の様子をみると、明治四四年(一九一一)六月には滑稽なる仮装行列が繰り出し(六月一九日「北國」)、また翌四五年(一九一二)五月には外国軍人に扮した馬上仮装行列が拍手を集めた(五月四日「北國」)。

ちなみに戦地でも祝祭行列は兵隊たちの余興にかかせない催し物であった。歩兵第七連隊兵士の日記『日露戦役日誌』(石川県立歴史博物館蔵)の明治三八年(一九〇五)九月九日条には日露戦争中、長春南部の陶家邸での軍旗祭で、弥彦婆(第九中隊)、壮士躍(第二中隊)、軍楽隊・茶番狂言(第一〇隊)を催したとみえる。金沢出身の兵士は弥彦婆を通し郷土へ思いをはせたのである。

近代特有の祝祭として営庭を会場とした軍隊行事を紹介したが、このような普段は入れない場所を開放し人気を集めたほかの近代祝祭に学校行事がある。人々が楽しみたひとつが寄宿舎を会場にした造り物装飾である。

明治三五年(一九〇二)の第一中学校寄宿舎一〇周年記念会には寝室ごとに書籍・器械などを用い「噫々八甲田山」「厳島神社」などの造り物を飾った(二月六日「北國」)。四高では翌三六年(一九〇三)から運動会にあわせての寄宿舎各室内に造り物を飾りひろく観覧させた(二月四日「北國」)。

人々が楽しみたもうひとつが運動会の仮装行列だった。管見の

かぎり運動会での仮装行列の初見は明治三五年（一九〇二）十一月の四高陸上運動会である。文化行列といい、音楽隊を先頭に、土木、王、応用化学、火薬、造船、建築など二二科を、肥桶・蒸気船、雷公、砲丸などをもって軽妙に表わし練り廻った（十一月五日「北國」）。

明治三十六年（一九〇三）の同校秋季運動会では、大達磨を先頭に、大木達磨、器械達磨、建築達磨、教学達磨など各学科などからなる達磨行列が行われ（十一月四日「北國」）、同三十八年（一九〇五）には寄宿舎生の一寸法師行列などが喝采を博した（十一月四日「北國」）。この年の運動会でもっとも観客を喜ばしたのは社会競争で、古武士、商人、看護婦、紳士などあらゆる懐旧の服装をならべておき、号令に応じてこれを着用して競争するものであった（十一月六日「北國」）。

なお、右に見える達磨行列は、のちに運動会の定番となる達磨競争へと変化していったと想定できるが、理由は不明だが、昭和一〇年（一九三五）には芳斉町小学校で催された運動会の競技について保護者から達磨競争の実施について絶対に賛成できないという意見がでたという（六月一四日「北國」）。

明治四二年（一九〇九）の四高運動会で自習寮二四室それぞれの造り物の出来栄が詳しく報じられたように（二〇月二七日「北國」）、以降、同校の運動会余興の評判は造り物に集中した。

一方、仮装行列を運動会の目玉としたのは四高から独立した金沢医学専門学校だった。明治四〇年（一九〇七）五月の運動会では、各時

代風俗行列や、「コレラは軍の総大将」などという行列歌を歌いながらの伝染病撲滅仮装行列を催した（五月八日「北國」）。

明治四三年（一九一〇）一〇月の運動会では楽隊で囃子し、全身を煤で塗ったインド人、毛皮を着たエスキモー人など世界人種行列と、電信柱・郵便箱・電車などの造り物をかぶった交通通信機関行列が練った（一〇月二七日「北國」）。

このような俄的行列への風当たりが強くなったのが大正一〇年（一九二一）五月の運動会からである。新聞は「元来、同校の運動競技は運動よりも餘興の假装行列的な卑俗な催しを主眼として居るやうな慣習」があるため、今回も余興に力がそがれ、桃太郎・坂田金時などの御伽行列、万引き女の拘引・大根引き・車挽きなどの引き尽くし、乞食やハイカラ婦人、囚人が銃を担ぐ挙国皆兵などを行い、女子供に面白がられるのを職員は不快な思いでみつめたと報じた（五月一二日「北陸」）。

このような仮装行列批判の声の高まりは宮庭内の祝祭でも同時期にみられた。後述のとおり大正五年（一九一六）九月の軍旗祭では仮装行列が「俗悪なる」ものとして否定されることとなる（九月八日「北陸」）。俄的行列は兵士や学生の身分としては不適切だという意見が強まったわけである。

運動会に仮装行列が導入されたのは地元の祝祭で俄が定番の催し物であった事情を要因として想像できるが、別の学校の影響下で成立したと伝えられるのが県立工業学校の行列である。同校の歴史をたどる

昭和五十六年（一九八一）の記事「百工の門」によれば、東京美術学校へ進んだ先輩たちが母校で仮装行列を始めたのがきっかけで、明治期まで亜細亜、亜米利加などと書いた看板を先頭にした外国の風俗行列や時代行列が運動会を盛り上げたという。

同校らしさがうかがえるのは以下の逸話である。風俗の参考資料は図案絵画科や染色科にありあまるほどあったので、外国の衣装も忠実で、当時、工業学校の仮装行列を見に行くと言えば、娘の外出に厳しかった親も許したほどだったという（八月二二日「北國」）。

（五）景気回復策としての消防慰労大園遊会

深刻な恐慌状態に陥っていた明治四〇年（一九〇七）代には大掛かりな祝祭が二度催された。最初が同四一年（一九〇八）七月に北國新聞社が創刊一五周年を記念し催した消防慰労大園遊会である。趣旨は金沢市が他府県のような大火災の被害がないのはひとえに消防組の功労に帰することからその慰労をはかるというものだった。会には金沢消防組全員と県下消防団組頭が招待された。目玉の催し物として企画されたのが消防組による手古舞行列であった。既述のとおり、手古舞は堀川方面が得意とした定番の俄である。

市内消防組を二〇にわけ、一組ごとに三斗俵を担い、その後ろを組員一同列をなし行進するもので、衣装は揃いのシャツに亀ツタツ（胸当て）をかけ、赤木綿と虱絞りの手拭を振じて鉢巻とし、三度笠をかぶり、白足袋の上に縄をくくった。

三斗俵には俵ごとに福女面・扇子・青紅の芋を装飾し、前棒二人、後棒一人で担ぎ、歩き方は江戸参勤の作法にもとき国入りの際は横に四足、参勤の際にはまっすぐに歩む型を踏襲したもので、音頭取りにあわせ「目出た目出た若松様よ」と囃した（七月二二日「北國」）。順路は御歩町から尾張町・博労町・十間町へ出て目抜き通りをすすみ、広坂通りから公園に入るもので、最後に米俵を積み上げ、明治記念碑前で梯子登りの曲技を演じた（七月二二日「北國」）。

事業の内容をみると、あきらかに慰労宴の開催目的は消防組によるお手古行列の実施にあったと思われる。市内各消防組は明治二四年（一八九二）の金沢開始三〇〇年祭の備押（武装行軍行列）に九〇〇余りが参画したのをきっかけに同二八年（一八九五）まで、祝祭をもりたてる行列集団として関わりつづけた。

明治三十一年（一八九八）の規則改正により活動範囲が行政区分たる連区単位となりその活動の合理化がすすめられるものの、同三二年（一八九九）の旧藩祖三〇〇年祭の際には消防組に備押の再現を仕切らせようとし（四月一九日「北國」）、日露戦争の終了頃には消防組が全市鳴や提灯行列の中心となった。また、後述のとおり、大正期には獅子舞の実施主体として関わるように、節目ごとに消防団が都市活性化に寄与してきたことを鑑みれば、今回も消防組によって景気上昇をはかろうとする思惑があったと思われる。

(六) 台覧された行列

明治四〇年（一九〇七）代におけるもうひとつの大規模な祝祭が同四二年（一九〇九）九月の皇太子行啓祝賀である。同月二三日、皇太子到着の夜に高等小学校男児及び小学校五、六年男児総勢二三八六人が小将町小学校運動場を出発点とし提灯行列を実施した。児童による祝賀行列は旅順陥落時の旗行列をさきがけとするが、提灯行列は行啓が最初の機会となった。

行列は楽隊を先頭に、児童は校帽・筒袖・袴・草履の扮装で「兼六公園の歌」を合唱しながら四列左翼先頭で行進し、皇太子宿泊所前で各学校の主導で万歳を一唱した（九月二四日「北國」）。二五日には官県立学校生徒三五六九人が四高運動場を出発点にし紅提灯をもち「提灯行列の歌」を合唱しながら歩いた（九月二六日「北國」）。

ちなみに後者の歌「提灯行列の歌」の歌詞・楽譜は明治四四年（一九一）・四高北辰会音楽部編『四高歌集』（堀田金沢支店出版）に掲載されており、四高の持ち歌であったと想定できる。作詞はいずれも四高教授で作詞家の八波則吉によるものだった。既述のとおり、明治三七年（一九〇四）二月に販売された「征露軍歌」（敬文館発行）は石川県師範学校教諭の新清次郎が作曲しており（二月一四日「北國」）、学校単位の祝祭行列に関しては、その軍歌制作に教員たちが積極的にかかわったとわかる。

留意すべきは四年前の日露戦争の際は町や組合など各種民間団体の提灯行列の自発的な参加が絶えなかったのに対し、行啓時には学校以

外の積極的な参加が認められないことである。行政当局が俄的趣向に流れることを危惧し制限したと判断できる。

ただし、伝統的な催し物がまったくなかったわけではなく、ひとつは主催団体の度重なる要望により、そしてもうひとつは主催者側からの要請により参加した。前者のケースが金沢市北部の河北郡集落合同の虫送りである。虫送りが近代祝祭で行われた例は既述の通り、日露戦争時に戦勝を祝い野々市村が実施しているが、その際はあくまで提灯行列という馴染みの薄い催し物の代行的な措置として行われた面があった。今回の場合は、皇太子に郷土独自の文化を観覧してもらうことを趣旨とした。

準備は明治四二年（一九〇九）八月頃より始まった。河北郡の浅川村鈴見・若松、小坂村卯辰・山上・談議所など一〇か村が「本縣獨特の虫送り」と稱する「松明行列」を行い、殿下の旅情を慰めようと計画し、まず警察に認可をもとめた。

警察は火災予防上の問題から許可を与えなかったために、主催者は数十回に及ぶ嘆願をし、九月二日ようやく許可を得られたことで、同月一〇日には皇太子の宿泊先の旅館からの眺めを確認しながら事前稽古を行った（九月三日「北陸」）。

注目すべきは実施にあたり主催者は警察へ「本縣獨特の」文化であると説いたことである。その説明内容と想像できるのが実施前に新聞に掲載された「松明行列の沿革」と題する記事である。

内容は、虫送りは藩政期においては藩主が奨励し、実施の際は村役

人が郡奉行に届け出て、藩主に許可を受けたもので、石川河北両郡の場合、城に近い藩主はこれを展望したと記し、現今においては誘蛾灯を用いるため虫送りの壮観を見ることはできなくなった現状を伝えたものだった(九月二二日「北國」)。

九月二五日、一〇か村総勢一五〇〇人が卯辰山一帯で太鼓・笛で囃し松明をもって虫送り行列を行った。山麓は見物客でにぎわい、それを目当てにした記念絵葉書屋・雑具屋・玩具屋が出店した(九月二六日「北陸」)。無数の松明が卯辰山を練る風景を皇太子は旅館より眺め喜んだという(九月二六日「北國」)。

(七) 名物化する獅子舞

後者の主催者側の要請によつて実現したケースが獅子舞である。こちらは金沢市が早くに実施を想定し、明治四一年(一九〇八)一〇月の招魂祭で、大衆免中牧町の弥彦婆、中島町および川上新町の獅子舞などを、来年の台覧候補として祭場で知事などを前に演技させていた。この時点では弥彦婆も台覧の候補だったとわかる。結局、満場の一致の参加候補となる催し物はなく、「川上新町の獅子舞のみは聊か望みあり」とい消極的な評価にとどまった(一〇月三日「北國」)。

その後も、催し物の選択は順調にいかなかったのか、急遽、九月二六日当日になって獅子舞の世話方の消防夫などを招き台覧のために披露を命じる流れとなった。あまりに急な依頼のために、世話方は「餘りの急に一時は答ふる言葉も知らず唯だ顔見合して太息吐く有様」で

あったという(一〇月一日「北國」)。

九月二六日、皇太子は兼六公園・根上がり松付近で、堀川広見の拝領金獅子、西堀川の黒立耳獅子、矢口の大獅子、小立野の黒獅子、泉新町の白獅子、泉出町の赤獅子、川上の皮獅子、淵上町の熊獅子、愛宕町の愛宕獅子の計九組を観覧した(九月二七日「北國」)。この九組が急遽の依頼ながら参加できたのはなぜか。

昭和二七年(一九五二)「獅子頭由来記」によれば、淵上町が参加を決断した経緯について、当時堀川町に住んでいた侠客の中山虎次郎の指揮のもと参加したという(一〇月七日「北國」)。つまり、豪腕をもって地域をまとめる顔役がいたかどうかが出演の決め手となったとわかる。参加団体の出身をみると、堀川(西堀川・淵上)、矢口といった勇み肌・男気の気風で知られる地域が認められ^⑧、顔役の頼みを聞き一肌脱こうとする住人が多かったと想像できる。

急遽の依頼に対応できたもう一因として披露に堪え得るだけの芸能水準を維持していたことも指摘できる。そもそも金沢の獅子は氏神祭礼のたびに催されていたわけではなく、多くの町は臨時の都市祝祭を主要な参加機会とし途絶と再興を繰り返す状況にあり、芸の連綿性はなかった^⑨。この点、柔軟・迅速な対応ができたのは他町に比べ途絶期間が短く、また専門的指導が必要な棒振り役の師匠が存在し芸が劣化していなかったことを想像できる。

皇太子が獅子舞を称賛したことを受け、市長は獅子舞の披露に参加団体に謝状と金五〇円を贈り、台覧の日の九月二六日を今後、記念日

とし毎年獅子舞を行うことに決定した（一〇月一・一四日「北國」
「北陸」）。

注目すべきは、行啓が人々の獅子観に与えた影響である。それまでの獅子の評価は、明治三五年（一九〇二）の昇格慶賀祭の際、伝馬町の獅子舞について「昔よりこの獅子が出れば雨が降るなどと傳へて有名なる獅子」（七月七日「政教」）、また大衆免の獅子について「獅子舞ひの名人坂本常吉が一個にて演出したるもの」（七月六日「政教」と、個別の逸話を伝える程度であったが、行啓を機にその歴史的评价が強まったことに留意したい。

その意識変化を物語るのが「北陸新聞」の「獅子舞の事」なる記事である。同地の獅子を「金沢名物」としてその形態などの特質を、文献史上、初めて詳しく紹介し、そしてその歴史を「百餘年前」からとした（九月二十七日「北國」）。

翌四三年（一九一〇）九月二十六日には市長の獅子記念日設定の指示どおり、兼六公園で県知事・市長などを前に泉出町・泉新町・堀川・淵上町・矢口・東廓が獅子舞を演じ、その後、市役所・金沢警察署・横山男爵邸宅・市内新聞社などで披露した（九月二五・二六日「北陸」）。兼六公園の会場は数千の観衆を集める、「神武依頼の人物」となった（九月二十七日「北陸」¹⁰）。「北國」）。獅子舞は各種行列のなかで特権的な価値を見出されたのである。

行啓行事への獅子舞参加は地域の祭りの活性化にもつながった。行啓から間を置かず、明治四二年（一九〇九）一〇月に前田利常・綱紀

の位階追陞恩典授与を記念し、尾山神社で贈位祝賀祭が催された際には高儀町・材木町七丁目・天神町・東廓が獅子舞を、また東廓が祇園囃子を練った（一〇月一日「北國」）。行啓には未出演の獅子であるが、獅子舞伝承に励む町があいつぎ出てきたことを想像させる。

また、獅子を披露した矢口地域は台覧の翌年、氏神社の平岡野神社の秋季祭がかつて山王祭と呼び盛大であったことを顧み、その復旧をはかろうと意気込んだ（明治四三年一〇月七日「北國」）。

さらに明治期最後の大祭となった、明治四四年（一九一〇）の小立野・上野八幡社の式年祭では、長大な渡御が催されたほか、余興として、上野町は東宮殿下の台覧の獅子舞と「同町に古来より傳はれる十二ヶ月の一たる餅搗き」、小立野新町は獅子・祇園囃子、上石引町は祇園囃子、鶴間町は祇園囃子を練った（一〇月二一日「北陸」）。

なお、この記事から、現在、上野町に伝わる金沢市指定無形民俗文化財の餅搗き踊りは実質、当該祭がきっかけとなり、一二ヶ月俄から独立し単体の催し物として実施されるようになったと判断できる。

行啓の影響は招魂祭にも及ぶ。同祭は明治末には資金不足から衰退傾向にあったが、大正二年（一九一三）開催の際には後述の通り、獅子が一六組繰り出し、総祭的な盛り上がりを見せた。獅子の複数出演の背景が行啓だったことは以下の記事から明確に理解できる。

「昔は獅子の棒振とて一流極めたる師匠ありて土地の青年は何れも秋祭りの賑に資せんため習ひ覺えたるものが近年は餘り獅子の流行も見ざるより自然他町より雇はざるべからず、獅子を出すに際し最も苦

痛を感じしも、今上陛下の東宮にましませし折、台覧の榮を辱うしてより尾山の獅子として世に知られ保存の途を講ぜられしため各町何れも棒振りの養成に努め不便を感じざるにぞ、今回招魂祭に對し競ふて出すこととなりし」(九月二十九日「北國」)。

つまり、獅子舞は台覧前まで衰退傾向にあり、ほかから演じ手を雇わなければならぬほど状況だったが、行啓後、獅子舞の演じ手は芸能者としての自意識を持つことで、その養成に力がそがれるようになり、その披露の格好の機会として招魂祭が選ばれたと理解できる。

大正に入ると、獅子舞をめぐる美辞が増大・多様化していく。大正四年(一九一五)六月の利長公三〇〇年祭出演の際は、「お國名物」(六月二十九日「北陸」)、また同八年(一九一九)の金沢市祭では「古來金澤特有」(六月十五日「北陸毎日」)と、地域を代表する資源とする言説が目立つようになる。

また、各町は歴史的価値の固有性を積極的に発信するようになっていく。大正四年(一九一五)利長公三〇〇年祭では野町連中は「舊藩主前田公拝領の獅子」と記した札を真先に押し立て練り歩いた(六月二十九日「北陸」)。また、同年の御大典報道には、泉新町・白獅子と泉出町・赤獅子について「獅子舞の元祖とも稱すべきもので廻り獅子と云へる由緒附の獅子舞」(十一月一日「北陸」、西町下松原町・獅子について「往古徳川家より拝領したる獅子舞」(十一月六日「北陸」)と、その唯一性を称える説明が新聞に目立つようになる。

これら歴史的資源としての価値の高まりに加え、住民の獅子舞への

向き合い方に影響を及ぼしたと想定できるのが、大正四年(一九一五)の内務省・文部省の青年団訓令である。団の設置拡大とその修養機関としての機能強化がもたられたことにより、獅子舞は修養対象として練習姿勢のさらなる強化がすすんだ。

大正一〇年(一九二一)一〇月一八日の記事には、「市内大衆免の獅子舞は舊藩時代より金澤名物の一」であったが、「近年に至つて古老の精神を失つて職業的に墮落し、風儀」が乱れたことを遺憾とし、同地青年団三〇名は師匠を招き数週間の猛練習を遂げ、春日神社の祭礼で披露し成功を試みたとあり(一〇月一八日「北國」、獅子舞は厳しい錬磨によって体得されるものと意識されるようになったとわかる。

三 群衆化する「仮装提灯行列」

(一) 人気復活する招魂祭

明治の最後を飾った祝祭行列が明治四三年(一九一〇)八月の朝鮮併合を祝う提灯行列であった。参加団体は安江町有志の三〇〇名にとどまったが、行啓以来ということで、多くの見物人が集まった(八月三十一日「北國」)。

明治四〇年代に入ると、招魂祭は資金不足から人気に陰りがみえたが、行啓をきっかけにその活性化が試みられるようになる。大正二年(一九一三)九月の招魂祭では、以前の同祭が例年、競馬・相撲・花

火・撃剣銃槍などの催し物のほか人気を集めるものがなく、また諒闇の幕が開けたにもかかわらず市中の景気が沈みがちだったことから、市当局は祭典を利用し市の殷賑を期そうと企図した（九月二十八日「北國」）。後述の金沢市祭成立に到る発端をここに見出すことができる。

既述の通り、事業の目玉となったのが獅子舞であった。複数の獅子舞が参加した直接の背景は、市当局が各連区に三〇円の補助金を与え、獅子などの催し物を奨励したことにある。それを受け、各区有志は協議をし、一区あたり二、三組の獅子を出すこととした（九月二十八日「北國」）。

もうひとつの目玉として期待されたのが芸妓の踊りだった。例年、招魂祭は三廓芸妓の踊りがもつとも人気を集めたが、近年、神聖を犯すという苦情がおこり出演が見送られてから、同祭が火の消えたように寂しくなったため、今年は活性化のために三廓と主計町から祇園囃子を出すこととなった（九月二十八日「北國」）。

結果、以下の通り一六組の獅子舞、仮装行列、芸妓の祇園囃子、弥彦婆が繰り出すこととなり（九月二十九日・三〇日「北國」）、久々の盛況となった。催し物の内容（所属連区・参加町「趣向主題・参加人数」）は以下のとおりである。

【獅子舞】 1 有松町、1 泉新町、1 泉町・蘆中町、2 川上新町、2 百姓町、3 小立野新町、3 上野町、4 材木町三丁目、4 材木町七丁目、4 天神町二三四丁目、5 高儀町、5 三社、6 矢口、6 鍛

冶町下丁、6 淵上町、6 堀川広見、7 上下大樋町、7 中島町、7 大衆免平折町

【仮装行列（俄）】 1 蘆中町「牛」、1 有松町、1 泉出町「狐踊」、1

泉町「大名行列」、3 上野町「餅搗」、6 柳町

【祇園囃子】 1 西廓「30」、5 北廓「20」、6 主計町「50」、7 東廓

〔80〕

【弥彦婆】 4 天神町二三四丁目・材木町一二丁目・柿木町合同

【曳山】 7 木町一番丁

参加地域をみると、市内全域に分布するものの、一連区がやや目立つのは、同区の泉町の獅子が行啓以降、注目を集めた影響からだろう。催し物の種類をみると、もつとも多いのは獅子舞である。新聞は「近年は氏神の祭禮と雖も減多に出でざりし獅子」多数を「一時に觀るは未曾有のことなるより見物人周圍を取り巻きて」（九月二十九日「北陸新聞」）と報じており、久々にまとまって獅子を見る機会となった。

新聞記事では獅子舞参加は町単位となっているが、金沢の象嵌師の日記『米澤弘安日記』には第三蒸気、第五消防などの獅子をみたところ（九月二十九日条）、実質消防組が深くかわつたとわかる。なお、獅子舞は単独で繰り出すほかに泉出町の場合、「赤獅子の前列」に「狐踊の行列」が出ており（九月三〇日「北國」）、明治三〇年代において一般化した獅子と俄の複合化の影響が大正期に入っても続いたこ

とがわかる。

獅子舞と同じく久々の登場となったのが東西北及び主計町四廓の祇園囃子である。行列の構成は、主計町は屋台・囃子・素戔鳴尊造り物、東廓は四季草花屋台二台・紋服に蝙蝠傘の芸妓、西は岐阜提灯屋台・囃子・タツケ姿の踊り子、北は踊り子・松を立てた屋台・芸妓からなった（九月二十九日「北國」）。四廓がそろって参加するのは「近年にないこと」だったので、囃子の音が聞こえると、祇園囃子が来たと市中いたるところから見物客がおしよせたという（九月二十九日「北陸」）。

記事の説明用語で留意したいのは「仮装行列」なる言葉が目立つようになったことである。その実態は、「材木町一二丁目、天神町二三四丁目、柿木町若連中の大仕掛けの仮装、柳町若連中の仮装は、鎧武者あり、女學生あり、思ひ思ひの扮装にて行列を正し市中を練り歩きたるが、之れは市民が豫期せざりし餘興として大に歓迎せられたり。尚ほこの仮装隊は所要所に於て二輪加を演じ、数千の見物の頸を外させて喝采を博せり」（九月三〇日「北陸」）とあり、また芦中町泉町青年の仮装行列は「大黒天、ひょっとこ、おかめ、其他異様の仮装にて「妾権妻」と記せる旗を真先に押し立て鳴物囃しにて大なる黒牛を牽きたる」（九月二十九日「北陸」）とあり、いわゆる俄とわかる。あえて改称したのは、全国的に仮装行列が汎用的な祝賀様式として知られるようになり、民俗語彙をあえて用いる必要がなくなったからだろう。

招魂祭の盛況はその後も続く。大正四年（一九一五）六月五、六日

の招魂祭では獅子舞（消防組一一組、柿木町、材木町二丁目、春日町一丁目、梅沢町、巴町、英町）、藁獅子（大樋町）、祇園囃子（四廓、五寶町）、稻荷踊（材木町三丁目）、住吉踊（中牧町）、願念坊（大衆免）が出演した。願念坊は約一〇〇名からなる大団体であったが（六月四日「北國」）、これ以降の金沢の祝祭での登場は認められない。なお、稻荷踊とは若連中二、三〇名が白狐に扮し紀伊の國を舞ったものである（六月六日「北陸」）。

注目すべきは大正二年（一九一三）の招魂祭以降、獅子舞に消防組がかかわるようになり、同四年（一九一五）には全面的な協力体制となったことである。同年の関与の実態をみると、「川上新町及第一蒸氣消防組合合同」、「上山之上町第二蒸氣組合合同」などとみえ（六月六日「北國」）、獅子舞を得意とする町を地元の消防組が支える体制をとったとわかる。

大正四年（一九一五）に消防組が全面的に関わったのは、当初、同組は一二か月俄を催す予定にであったのが、それがとりやめとなり、かわりに獅子舞に参画することとなったため（六月五日「北國」）、一二カ月の分担構成を踏襲させたためと判断できる。

（二）青島陥落祝祭…強制終了となった仮装行列

日露戦争凱旋以後、提灯行列は一時的に減少したが、大正に入ると、再び大規模な行列を頻繁に目にするようになる。大正三年（一九一四）三月一〇日の第九師団陸軍記念日には金沢在郷軍人分会の会員

一二〇〇名余が出羽町練兵場に集合し紅提灯をもち在郷軍人歌をうた
いながら市街地を練り歩いた(三月一日「北陸」、一二日「北國」)。
久々の提灯行列の見物を多くの人々が楽しもうとしたことは、金沢
の職人の日記『米澤弘安日記』三月一日条に「市内の人出ハ非常に
多」く、「見物も押合へし合」いの状態となり、深夜一二時過ぎまで
夢中となったとみえることからうかがえる^⑧。

陸軍記念日から五日後、朝鮮守備隊として第九師団が派遣されるこ
ととなり出羽町練兵場で閲兵分列式が催され、式後に告別のために
五〇〇〇人の兵士が進軍ラッパに合わせ市中を行軍し帰營した(三月
一六日「北陸」)。

式の際中は管内が市民に開放されたため、多くの人々が見物に訪れ
た。また、軍隊の市街地行軍は初の試みであり、その見物のため十間
町・石浦町・堤町・南町には十重二十重の人垣ができた。見物人も深
く感動したようで、『米澤弘安日記』三月一五日条には「長蛇の列、
延々たり」「武歩堂々、勇ましい事だ」と感嘆の言葉がみえる。一方、
観客の中に涙を流す老婆もいた。

記者が理由を尋ねると、「御國のお為とやら致し方も御座りますま
いが、何で飲んで是が見送られませう、春が来て花が咲こふが、何樂
しみもありませぬ。御國の爲とは云ふ事はつらい事です。随分御無事
で、御達者でと申して送りませうが決して悦んで送りは致しませぬ」
と答えたという(三月一六日「北陸」)。人々は軍隊の行進を歓喜と悲
憤が入り交じった複雑な思いで見つめたのである。

それから数か月後、再び夜の市街地が提灯行列で埋め尽くされる。
大正三年(一九一四)八月三十一日の天長節に毎夕新聞社主催の提灯行
列が練った(『米澤弘安日記』八月三一日条)。

さらに三か月後、過去に例をみない規模での行列行進となったの
が、同年一月の第二次世界大戦の青島陥落時である。同月八日、青
島陥落の号外が届く。各町や企業・団体は夜から自発的に提灯行列を
催した。

九日昼に「全市鳴」が行われ、その後、木の花幼稚園園児の旗行列
が練り、また国旗等で装飾を凝らし滑稽な仮装をした二百数十両の自
転車行列が行われた。同日夜には、県・市・商業会議所主催の提灯行
列が実施された。行列の参加者は官立学校、各種同業者組合など約
六〇余団で総計一万五〇〇〇人を数え、初めて万を越える規模となっ
た。

行列は出羽町練兵場に集合し、六時に出発した。行進経路は練兵場
より兵器廠(現歴史博物館)前通りを下り県庁前、次いで市役所前で
万歳三唱し、厩橋に出て河原町間は狭隘なため臨機に二列三列とな
り、犀川大橋に出て、さらに片町、香林坊、南町、堤町、市姫通り、
枯木橋、味噌蔵町、九人橋、裁判所前より石川門に入り、司令部にて
万歳合唱し、甚右衛門坂を下り、商工会議所前で三唱した。行列の長
さは二里に及び、その様子を見物しようとする沿道には約七、八万人の群
集が集まった。新聞は行列の規模を「前代未聞」、そのときの街路の
風景を「火の海 人の波」と伝えた(一一月一〇・一一日「北國」)。

明治三十七年（一九〇四）九月の遼陽占領の際は「火の帯」として群衆が生み出す光景が表現されたが、「火の海」はそれを超える修辭としての魅力を持ち、その後、人々を扇動し興奮させていく語彙となっていた。『米澤弘安日記』ではその後も頻繁に「火の海」という表現を用い、提灯行列を書き留めている。敷衍すれば、第一次大戦をきっかけに、人々は「火の海」という美的光景を構成する喜びを味わうために提灯行列に積極的に関わるようになったのである。

最大規模となった群衆行列はどのように統御されたのか。集合場所は県・市などの係員が出張して伝え、そこには各団体の集合地点とわかるように杭を打ち、札を張りだし、また各団体の集合目印として大提灯大行灯を押立て、隊列を組んだ。数組の楽隊の演奏を合図に四列縦列となり、師範学校を先頭に各学校、続いて、新聞社、各組合・各会社の順で行進した。つまり群衆レベルの提灯行列は都市の広場での集合と隊列編成、そして楽隊演奏と大提灯という耳目を介しての行動管理が行われたのである。広場での統御は行進中の野次馬飛び入り参加による群衆の膨張を抑制する意図もあつたのであろう。

このときの成功体験はその後の大提灯行列にも生かされる。翌年の御大典で催された金沢市青年団体の計約三〇団・一三〇〇名の行列では、出羽町練兵場での挨拶・万歳三唱のあと、約三〇団体を行進順序にしたがい整列させ、先頭と一五団体に前に楽隊をそれぞれおいた。楽隊の演奏にあわせ行進を始め、要所所で団体ごとに万歳を唱え、また奉祝歌を合唱しながら進んだ（十一月一二日「北國」）。音楽・万歳

三唱・歌合唱は日露戦争時から行われていたが、広場での集団の整理下に加え、さまざまな音の営みが団体の秩序化を促したとわかる。

また群衆の統御にあたり警察がはたした役割も看過できない。新聞は青島陥落祝賀の行列が成功裡に終わったのは、ひとえに沿道の群衆八万人の警戒にあたった警官・憲兵の労苦によるものと慰めた（大正三年一月一日「北國」）。昭和御大典でも状況は同じで、数百名の巡査が声をからして街路の雑踏の整理にあたった（昭和三年一月一日「北國」）。

青島陥落祝賀に関し注目すべきは行列の規範のゆるみである。初日九日の提灯行列は規範性を基本的にもつたが、参加者の趣向への欲望を抑えることはできなかった。行列の後尾には映画館・第二菊水倶楽部と主計町芸妓の囃子隊がしたが各所で踊ったため、後に続く行列が止まり、本隊と離れてしまった（十一月一日「北國」）。

二日目となる一〇日、廓の一行を先頭とし、そのあとに前日に提灯が足りず参加を見送った四高一〇〇〇人の提灯行列、小將町小学校を出発地とする市内小学校児童の合同行列が行われた。目をひいたのが先頭の芸妓だった。西廓の芸妓連は、祇園囃子を先頭に陸海軍兵士・手古舞姿・書生・紳士・女学生などに扮し、北廓の一流連をのせた囃子屋台を真つ先に、小妓連が四七士に扮し練り歩いた（十一月二日「北國」）。また中島町青年団は白煙を煙突より吐く大軍艦の造り物を曳き、竜王青年團は各自変装し、軒提灯を竿玉に吊るし高くかかげ練った。行列は俄と変わらぬ様相をみせたのである（十一月一二日

「北國」。

俄的趣向はその後も続く。一日日中には、東廓が、童女が引く桜の造花飾りの屋台、黒紋付き姿の老妓連・花形連八〇人を含め計一三〇人の旗行列、大三方に紅白の鏡餅の造り物屋台、若づくり・黒メガネ・看護婦の仮装をした女将連中三〇人の一隊が練り（一月一二日「北國」、ほか愛宕遊郭の芸妓連や複数町の合同仮装行列が参加した（一月一三日「北國」）。『米澤弘安日記』に東廓の旗行列について「見物二行くもの多かりき」とあり、人々の見物目的はもはや戦勝の歓喜の共有ではなく、芸妓の姿にあった。

五日目となる一二日には俄的行列の規模がさらに拡大する。その状況を新聞は「各自思ひ思ひの奇抜なる假装いに宛然百鬼夜行の様」と伝えた（一月一三日「北陸」）。注目すべきは同日の仮装提灯行列の規模である。

一団体あたりの人員数は、犀川神社氏子連一〇〇〇名、旧一連区の二〇〇〇名、堀川一〇か町の連合隊約一五〇〇名、春日町・山ノ上町談議所など合同八〇〇名、大衆免の有志及び青年団四〇〇名、袋町・桶町・彦三町の有志七〇〇名で、地縁集団として過去にない規模となった（一三、一四日「北陸」「北國」）。最大の二〇〇〇名を集めた一連区については同区選出の市会議員の発起によるものだったとあり（一月二三日「北國」）、ほかの大規模動員もまた議員の先導によるものだった可能性を想像できる。

一二日には小立野からは地元四七町に加え付近の村落の参加からな

る約五〇〇人以上の集団が練り、変装の趣向を競い合った。いずれもその内容を秘匿し当日に披露したために衣装が重なったことが「却て面白く」と評された（一月一四日「北國」）。

仮装の内容をみると、旧一連区団体の場合、緑門造り物（千日町）を先頭に、大砲造り物（野町三丁目・五丁目）、祇園囃子（野町一丁目）、大酒樽・大盃造り物（下野田寺町）、四七士仮装行列（城南正義団体）などからなり、町・丁単位に独自に趣向を凝らしたものであった。

趣向が統一されていたのが一五〇〇人からなる堀川一〇か町で、戦利品輸送のお手古舞を行なった。これについて新聞は「堀川の専賣物とも云ふべく音調と云ひ歩調と云ひ今更らながら其昔を偲ばしむ」と絶賛した（一三日「北陸」）。つまり、得意の大名行列の趣向を活かしたとわかる。かかる大正期における堀川の参加姿勢と周囲の評判が、後述の市祭の目玉催し物の「大名行列」開催につながったのだろう。

一四日にも味噌蔵町・上下新町などの一〇〇〇人に余る大団体が繰り出したが（一六日「北國」）、各団体が趣向を競いあう様子は、見物人さへ疲れるほどであり、また業務にも支障がでることから、警察の指示により一兩日をもつて禁止とすることとなった（一月一四日「北國」）。一五日には雨天の影響からようやく終息を迎えるかにみえたが、九人橋付近の町々の団体が造り物を曳行し、一〇〇〇余りの紅燈を掲げ練り歩いた（一月一六日「北國」）。

一連の過程をみると、初日に提灯行列の規範性を守りつつも、三日

には西廓の俄と各団体の提灯行列の前後構成となり、さらに五目目以降は、提灯行列の規範性はくずれ、実質、夜の仮装パレードの様相をみせたと整理できる。

警察の禁止判断について一五日の新聞には「今では寧ろ提灯行列と云ふ趣意を脱線して種々雑多な變装に浮身を窺し面白半分に全く巫山戯散らしてゐる、中には風俗壞乱の嫌ひある」とみなし、「十五日限り許可せぬ事」としたとあり（十一月十五日「北陸」、強制終了がなされた」と判明する。国民的祝祭とは期日の定まった祭礼と異なり、際限なき行列参加状況に陥るリスクを主催関係者は学んだと想像できる。

尾山神社主催の祝祭で明治三五年（一九〇二）の昇格慶賀祭以来となる盛況をみせたのが大正四年（一九一五）六月二八日の富山県高岡の前田利長公三〇〇年祭である。これにあわせ、尾山神社内金谷神社で祭典が催され、大正二年（一九一三）の招魂祭以来の多数の伝統的な催し物が繰り出した（六月二八、二九日「北陸」。催し物の内容（所属連区・参加町「催し物名」）は以下のとおりである。

【獅子】第二蒸気消防組（1泉出町）「赤獅子」、第四消防組（2川上）「皮獅子」、第五消防組（6矢口）「大獅子」、第六消防組（6堀川）「金獅子」、第七消防組（7愛宕町）「赤獅子」、1野町一丁目「拝領獅子」、3百々女木町「皮獅子」、6田丸町、6英町、7上下大樋町、7八幡町・木綿町、7山ノ上町、7大樋町有志「藁獅子」

【俄】7卯辰、第四区有志

【弥彦婆】7木町

【万歳】4天神町・材木町

【祇園囃子】6柳町、7馬場六番町、7上田町

【踊】6柳町「子供」、7上田町「剣舞」

参加地域をみると、獅子に関しては市内全域に広がるものの、ほかの催し物は七連区が目立ち、明治後期にみられた傾向がふたたびみられるようになったといえる。注目すべきは卯辰の俄で、明治三五年（一九〇二）の尾山神社昇格祭以来、久々の登場となった。記述のとおり、大正二年（一九一三）頃より俄は「仮装行列」として紹介されるようになったが、ここでは卯辰に関しては「大仁輪加」と紹介しており、あきらかに金沢における俄は卯辰特有の催し物へと狭義化されるようになったと理解できる。

（三）大正御大典…仮装の禁止から容認へ

大正三年（一九一四）十一月の青島陥落祝賀、同四年（一九一五）六月の招魂祭・前田利長公三〇〇年祭と大規模な祝祭が続いたが、さらに五か月後に御大典祝賀が催され、都市はふたたび殷賑を極めた。御大典の儀式は同四年（一九一五）十一月一日の即位式から同月一日未明の大嘗祭を中軸とする。市民の祝賀の催しは提灯・行灯・国旗・幕・造り物などによる町内の飾り付けと提灯・旗行列、獅子舞・

祇園囃子・俄などからなった。

緑門・奉祝門は、十間町、南町、石浦町、堤町、安江町、近江町、材木町二丁目、西廓、北廓他各所に建てられ、さらに堤町・安江町では夜には奉祝門にイルミネーションを点灯させる趣向をこらした（一月一三日「北陸」）。

行列の各団体の日にちごとの参加状況をまとめたのが表一である。参加の流れを概観すると、一〇日の即位式にあわせての旗・提灯行列をもって始まり、大嘗祭の前後に各種行列が多く繰り出し殷賑を極めたとわかる。なかには連日参加予定の町もあり、卯辰下町有志は一〇日から一五日まで祇園囃子を、また岩根町は一〇日より二〇日まで獅子舞を出すなどの入れ込み様であった（十一月一〇日「北陸」）。

本来なら祝祭開始から一週間後の一七日に北國新聞社主催の合同提灯行列を行いクライマックスを迎えるはずだったが、雨天の影響から一八日に順延する（十一月一八・二一日「北陸」）。

提灯合同行列終了後も興奮は冷めず、一九、二〇日も単発的に行列が繰り出し、最終的に雨天順延となった「金沢毎日新聞社」（石川毎日新聞社）主催の太鼓行列が二〇日に催されることで（十一月二一日「北陸」）、祝祭は終息を迎えた。太鼓行列は、当初一時に連区の順に出発予定だったが、苦情がおき、午後四時の出発となった（十一月二一日「北陸」）。太鼓行列という体裁だったが、実態は「各町思ひ思ひの趣向にて装飾と扮装に贅を盡した」（十一月二一日「北陸」）俄的行列となった（図二）。

表 1 大正御大典の行列参加団体名・各人数 大正4年11月10日～21日「北國」「北陸」をもとに作成

	旗行列	提灯行列	催し物（獅子舞・俄・祇園囃子・造り物）	その他
10日	魚商組合590	官公立学校3940、金沢郵便局250、金沢専売支局350、小間物化粧品組合650、塩屋町250	卯辰下町、岩根町	
11日		青年団・金沢少年義勇団	卯辰下町、岩根町、安江町、鉄道職員1000	連合大運動会
12月		小学校4年以上男児4323	卯辰下町、岩根町、材木町三丁目、九人橋・味噌蔵町	
13日			卯辰下町（川又遊芸部）、岩根町、堀川口、五寶町、観音町、泉新町・泉出町、柳町、六斗林、笠市町、荒町	
14日			卯辰下町、笠市町100、岩根町、主計町、石坂、袋町、梅沢町、芦中町、六斗林、川上新町、柳町	
15日	女子師範学校付属小学校	金沢絹糸団体450、洋服裁縫組合150、金沢駅鉄道職員1000、硬質陶器会社1000	袋町50、卯辰下町、岩根町、森山町、観音町他、大衆免、中越両派郷友会、西町下松原町、塩屋町、上野町、百姓町、五寶町、義太夫連、中島町、主計町、六斗林、堀川、巴町、松本町、卯辰	
16日			袋町50、岩根町、森山町、観音町他、中越両派郷友会、矢口、材木町三丁、材木町六丁目、近江町、笠市町、川上新町有志、備中町、旭波会、金沢落語会	
17日			中越両派郷友会、木ノ新保・玉丸町、石屋小路、高儀町他、筑前琵琶音頭派北陸海、ニュー商会	
18日		片町400、北國新聞社主催（17日夜開催予定）	北陸タイムス社8	
19日		下春日町（行灯行列）		
20日		尻垂坂有志	金沢毎日（石川毎日？）	

祭典期間中の行列は日中の旗行列と趣向を凝らした催し物、夜の提灯行列からなつた。青島陥落祝賀のときのように俄と提灯行列が一体化せずに、分離・すみ分け傾向にあったのが特質といえる。まず日中の催し物（所属連区・参加町「趣向主題・参加人数」を詳しくみる。

【獅子舞】 1泉町、1六斗林立志青年会、1蘆中町、1泉新町、

1泉出町、1石坂若連中、2百

姓町、2川上有志、2松本町、4西町・下松原町、5高儀町・元車町・谷町・大豆田町他合同、6巴町、6岩根町、6五寶町、6安江町、6荒町、7森山町、7観音町、7梅沢町、7大衆免、中越両派
郷友会

【模擬行列・仮装行列（俄）】 3上野町「餅搗き」、4近江町「恵比寿行列」、4材木町三丁目「兎踊」、5袋町青年会「兎行列50」、6堀川「土農工商行列」、6笠市町「土農工商業行列」、6岩根町「御手古・桃太郎」、6矢口「時代行列」、6主計町「仕丁行列70」、6木の新保一く六丁目・田丸町「木遣り行列」、6岩根町女性「いもち



図2 絵葉書 太鼓行列光景 個人蔵

やけ踊4」、6塩屋町共和会「いもちやけ踊14」、7御歩町・豊國町・観音町「彰義隊50」、7卯辰、7中島町「豊年祭（農事行列）」
【祇園囃子】 4材木町三丁目「50」、6柳町、6笠市町、7卯辰下町川又遊芸俱樂部社中・主計町芸「7」、金沢落語会
【芸能】 1六斗林「麦屋踊」、4備中町有志「万歳9」、5石屋小路「屋台大鼓」、義太夫連「義太夫」、筑前琵琶音頭派北陸会「琵琶」、旭波会婦人連「琵琶」、北陸タイムス社「麦屋踊8」
【屋台・神輿】 2川上新町有志「造り物御輿行列」、4九人橋・味噌蔵町「獅子頭屋台」、6笠市若連中・子供「鳳凰100」

参加地域をみると、やはり六・七連区が目立つ。注目すべきは参加団体の変質である。卯辰下町の川又遊芸俱樂部社中の祇園囃子について「俄仕込の素人藝とは違ひ孰れも日頃腕に覚えのあることとて差す手引く手も綺麗に揃ひ」（一月一日「北陸」）とあり、また「芸能」については義太夫連、筑前琵琶音頭派北陸会、旭波会婦人連などがみえ、平素より稽古にいそむ半玄人や玄人の参加が今まで以上にめだつ。

芸能文化が深く人々の暮らしに溶け込み平素より稽古にはげむ人々が増加したことを示すとともに、都市祝祭参画の目的が非日常性への解放から芸能者としての主体化・可視化へ変質していったことを物語る。後述のとおり、この参画意義の変質は大正末頃から催し物の内容自体を更新させていくことにつながっていく。

芸能ごとに参加団体を整理したが、実際には、明治三二年（一八九九）の旧藩祖三〇〇年祭以降の流れである催し物の複合化がこのときも目立ち、たとえば、笠市町の場合、祇園囃子＋仮装行列＋花笠に羽衣の少女隊＋尉姥人形飾り山車の構成からなった（十一月一七日「北陸」）。

ジャンルごとの数をみると、もつとも多くの町が参加したのが「獅子舞」である。観音町の場合、「三十五年目振り」（十一月一四日「北陸」）に繰り出しており、行啓以後の獅子舞再興の動きを看取できる。獅子舞に関して注目できるのは越中砺波郡の獅子が参加したことである。演じたのは富山県出身の金沢在住者をもって組織された中越両派郷友会である（十一月一四日「北陸」）。大正末より富山県や能登の獅子が金沢の祝祭の盛り立て役となっていくが、そのさきがけとなった。『米澤弘安日記』十一月一五日条には「四五人の笛吹の囃子二連れ舞人と獅子と共に踊り狂ふさま、中々面白い 金沢のとは変つて一寸珍しい」とみえ、金沢の人々の印象に強く残ったとわかる。

つぎに「模擬行列・仮装行列」をみる。五か月前の前田利長公三〇〇年祭でも唯一卯辰の催し物が俄として紹介されたが、八幡町・下小川町・卯辰高町・同下町からなった今回も同様の記載がされており（十一月二日「北陸」）、さらなる卯辰と俄の固定化を読み取れる。

趣向の主題をみると、土農工商行列、豊年祭、御手古・桃太郎、時代行列、恵比寿行列、彰義隊、兎行列、兎踊り、仕丁行列、餅搗き、木遣り行列、いもちやけ踊などがあり、明治期以来の定番の趣向が大

半をしめる。

大掛かりだったのが堀川の土農工商行列、中島町の豊年祭行列、岩根町のお手古・桃太郎行列、矢口の時代行列、近江町の恵比寿行列、笠市の土農工商行列、卯辰の大俄などである。その趣向を概観すると、堀川町の土農工商行列の場合、御幣や国旗で飾った「献上御荷物」を担ぎ歌いながら練り歩くお手古、武士、赤垣源藏、加藤清正、桃太郎、つぎに蓑笠に鋤鍬をかついだ百姓、早乙女、大根お化け、恵比寿、飴屋、肴屋、八百屋、柳組板屋、氷屋がしたが、さらに国旗をかざした少年少女の一団などが続いた（十一月一四日「北陸」）。得意の大名行列俄の一部取り入れながら、ほか別系統の主題を組み合わせる傾向は既述のとおり、青島陥落の際からみられるものである。

中島町の豊年祭行列は大三方に米を盛り、これを上下姿の氏が神にささげる格好をして、そのあとに、畑打ちに種まき、藁でつくった馬耕の造り物、花笠をかぶり赤の襷での田の草取り、虫送りの大太鼓、松明、案山子、稲架、糲摺臼に唐箕、取入れにいたる動作を扮装し、最後に豊年祭といひ鳥居の前に米俵を積み上げた造り物を曳き、子供に扮した大人がカツポレ踊りで続いた（十一月一六日「北陸」）。

岩根町の御手古・桃太郎行列は五彩眩き揃いの羽織に花笠の献上お荷物を担ぎ音節面白くそろえて進み、そのあとには桃太郎の誕生を表す大屋台、鎧武者、熨斗目袴姿の諸侍、爺と婆の音頭にあわせての日本一黍団子の餅搗き屋台が続き、最後に桃太郎凱旋の屋台が練った（十一月一六日「北陸」）。地元に残存する祝祭行列写真はこのときの



図3-1 岩根町のお手古行列 藤村進氏蔵

行列の歴史のなかで初見となるのは「いもちやけ踊」であるが、その内容は岩根町に關し「四名の女」が「各々頭巾に角型の冠を戴き珍しき踊り」をし（二月一〇日「北陸」、また塩屋町に關し、天然木

趣向を固定化させていったとわかる。

近江町は奴胤と子供に扮した若者の後に祇園囃子が続き各所で踊り、その後ろに恵比寿の張り子面を被った一隊、笹に紅鯛をさげた娘連中、そして最後に長さ三間の洪団扇でつくった大鯛が練った（二月一七日「北陸」。奴胤・恵比寿・大鯛は明治期より近江町の定番の趣向であり、卯辰の俄や堀川の大名行列とあわせ、地域の名物として趣向を固定化させていったとわかる。

あり、明治期に見られた寸劇形式のスタイルを踏襲したとわかる。

士、鎧武者、武士、俠客、町人・百姓、洋装の文武官などからなつた（二月一七日「北陸」。卯辰の俄に關しては「道に仁輪加は卯辰の十八番だけありて取々の扮装頗る上出来にて太鼓と笛に合せて踊り出し、陽氣に浮かれそめたるが、暫らくありて一斉に總踊りとなり」とあり、明治期に見られた寸劇形式のスタイルを踏襲したとわかる。

奴、少年組による赤穂四七



図3-2 お手古衣装での記念写真 藤村進氏蔵

様子を写したものである（図三）。意匠や造り物の出来映えから各町が相当の力を注いだことがうかがえる。

矢口の時代行列は挟み

箱・鳥毛・槍などをもつ

でつくった獅子頭を前後に黄白の捻りはちまきに揃いの衣装の着た若い衆が「滑稽極まる踊」をしたとある（十一月一日「北陸」）。

いもちやけとはカマキリの加賀地方の方言で、カマキリを真似た踊りは宴会の場を盛りあげる定番芸であったことは金沢の俳人杉原竹女の懷古録『思い出の歳時記』（あらうみ会・一九六〇）の以下の記載から理解できる。内容は金沢の大店連中が催した節分行事の酒宴の場の様子である。

「大人達は面白そうにのんだり唄ったりしている。其の内にさつきのおつさんが、顔にむぎのこメリケン粉をぶちつけて、頬に赤く紅をぬり、頭にあわぬかつらをかぶり、赤い女の着物を着てしなしなと踊りをおどり出した。踊りがすんだと思つたらぺたつと座つて、前をちよつと捻ると白のおまわしがちらと見えた。おつさんは首を一寸ちぢめて舌を出して、飛ぶ様にして襖の奥に消えた。大人達はどつと笑つて、なかなか笑いがとまらなかつた。おつさんは次に寒いのに裸になつて、いもちやけを踊つた。此の余興をしてみなを楽しませようと、おつさんは手ぐすね引いて待つていたものであらう」

明治三年（一九〇〇）生まれの杉原の七、八歳頃の思い出となることから明治四〇年（一九〇七）頃の出来事である。いもちやけ踊が当時の人気隠し芸であったとわかり、祝祭行列と宴会芸との連続性を見て取れる。

警察はかかる俄的趣向の盛り上がりを黙認したわけではない。「如何はしき女装をなす者は其筋にて嚴重に取締り一人たりとも列中に加

はらしめず。現に市内卯辰下町の二輪加の如きは昨日市内を練り歩く筈なりしとも其筋にて一々服装を点検したる結果女装□他卑猥なる變装なしたる者二十餘名を出し爲めに右行列の練り歩きは中止するの已む無きに至れり」（十一月五日「北陸」）と、見せしめの意味もあつたのか、卯辰の大俄の一部を中止させる厳しい処分を行った。

つぎに「旗・提灯行列」をみる。旗行列は一〇日に近江町魚商組合が実施したのが最初である。青島陥落時は東廓が俄的趣向を交えた旗行列を行い人気を博しており、旗行列も提灯行列と同様に規範的様式にとどまらない楽しみ方がされたとわかる。その後、一日に師範学校付属生徒一同が市中を「整然として足並みを揃へ」行進した（十一月一日「北陸」）。このときほかの市内小学生が旗行列を実施しなかつたのは、舞台を替えたからである。

祭典期間中の一日、出羽町練兵場で市内小学校の御大典記念連合大運動会が催された。プログラムは二二種目のうち、一学年の旗行列、三学年女子の旗体操、二学年女子の旗行進、三学年男子の旗取、四学年女子の行進遊戯など、低学年は旗と行進を中心とする催し物でしめられた。内容は基本、北陸軍楽隊の吹奏にあわせ唱歌を歌いつつ国旗をかざし四人横隊を組んで歩行し万歳をするものであった。当該運動会は祝祭における行列を集団体操へと転換させる初の試みとなつたと位置付けられる（十一月二日「北陸」）。

提灯行列は、青島祝賀の際に提灯が足りなくなるといふトラブルがあつたため、各団体は事前に大量に仕入れ準備した（十一月四日

「北國」。提灯行列は、一〇日の即位式と一五日の大嘗祭にあわせ自発的に繰り出す段階と、一八日の北國新聞社主催の合同イベントに参加する段階、一九日以降に余韻を楽しみ繰り出す段階を経た。

自発的に参加した団体は、官県立学校の生徒四〇〇〇人を最多とし、ついで金沢駅鉄道職員、硬質陶器会社各一〇〇〇人が多かった。町団体や同業者組合に参加がとどまった今までと異なり企業や工場の増加は、多くの地方出身者が祝祭に関与する時代となったことを物語る。

最大規模となった官県立学校の行列は七町に及ぶ長さで、八波則吉の作詞、四高の大西教諭の曲付けによる奉祝歌を唱えつつ、市街地を練り、出発地点の四高運動場にもどり、君が代の楽隊演奏を脱帽して聞いた（一一月一〇日「北國」）。

自発的な提灯行列の多くは規範性を維持し、趣向性の表現は、金沢絹糸団体が久米舞・五節舞の等身大人形を飾った高さ二間長さ二間半の山車を曳いたり（一一月一〇日「北陸」）、鉄道関係の団体の最後に寄席の一九席出演の雷門助六一座の囃子屋台が従ったり（一一月一六日「北國」）、洋服裁縫組合が軍楽隊を先頭に金光燦燦たる模擬大礼服に白袴をはき雪白鵝毛の制帽をかぶったりする程度にとどまった（一一月一六日「北陸」）。

注目すべきは北國新聞社の提灯行列への関与である。各種団体を束ねる数千人規模の動員型の行列はこれまで旅順陥落の際の金沢商工会議所をさきがけにし、青島陥落祝賀では県・市・商業会議所が主導し

てきたが、ここに来て初めて地元メディアが主催することとなった。参加要員は青島陥落の際は学生と企業・同業者組合の成員にとどまったが、今回はそのような制限を廃し、地縁集団など一般の人々に門戸をひろげた。

メディアが主催した背景には、青島陥落祝賀の際、徐々に提灯行列の規範性が失なわれ、最後には俄的趣向を競いあう際限なき世界となり、警察によって強制的に終了を下す措置がとられたことがなかるうか。つまり、かかる無秩序な状態の再発を恐れ、行政当局はメディアに委託し、その情報伝達力をもって人々を統御し、かつ祝賀開始から一週間後に大提灯行列を設定することによって祝祭の終息をはかるうとした可能性がある。

そのことを示唆するのが募集規定である。大正四年（一九一五）一〇月一日時点の新聞掲載の規定には「服装は成るべく洋服又は羽織袴を歓迎し異様の服装を拒絶す 提灯蠟燭等は各自持参の事」とみえ、俄的趣向を厳しく制限したものであった（一一月一日「北國」）。

メディアの影響は大きかった。あきらかに人々の参加意欲は萎え、翌日時点での応募はわずか五団体にとどまった（一二日「北國」）。寂しい参加状況に危機感をもったのか、一三日に新聞広告では「大々的に祝意を表するも差支なき折ならば假装等の滑稽に流るる服装は避けられたきも見苦しからざる服装なれば差支なきこと」（一三日「北國」）、さらに実施前日には「服装は見苦しからざるを要す」「先頭の山車類は滑稽化せざる事」（一一月一六日「北國」）と伝え、漸次、規

制を緩和していった。

そして、実施当日一七日の朝刊には各方面から「市民の赤誠を表示するため假装變装を許されたしとの注文頻々たるを以て」多少の異装を許すこととし、また行列の先頭に立つ山車についても随意に許すとした（一七日「北國」）。つまり、実質、規制はなし崩しとなったのである。

結局、実施日は雨天により一日延期し一八日となった。延期により追加の参加もあり、行列規模は三五組約六〇〇〇人に増大した。各団体の顔ぶれは、野町三五〇人、長土堀組合四〇〇人など、中心市街地の町連合一七団体で大半をしめたが、ほかに金沢薬業組合二〇〇人、漆器同業組合二五〇人といった同業者組合、明治印刷会社一一〇人など会社の参加があった。新聞社は参加者が手軽に歌えるように大典奉祝提灯大行列唄の短い歌詞を即製し印刷・配布した。楽隊は先頭以下、適所にスメル館・大手館・第一菊水俱樂部など映画館にサイレント映像の伴奏役として所属していた楽隊が配置された。

午後五時、出羽町練兵場に申し込み順に並び、各団体は山車を目印に行進した。このときの提灯行列で注目すべきは、主催者の新聞社が見物人が眺め「火光天を焦す」壮観なる場所をルートとして最初から意識したことである。

実施日の朝刊には、野町坂、香林坊坂、十間町の爪先上り、浅野川大橋などを見物ポイントとしてすすめ、とくに「先頭が櫻橋を渡り蛤坂新町を行進するとき」、対岸の中川除町から臨むと、「一帯の火城」

が眼前に表れ、それが川面に逆さまに映る場面を最大の見どころとし、その際、あわせて仕掛け花火を焚くと伝えた（一月一七日「北國」）。繁華街の坂が提灯行列の壮観さを生み出す様子が日露戦争の際の遼陽占領祝賀の報道で伝えられたが、大正御大典になると、明確にスペクタクル・ショーとして喧伝されたのである。

提灯行列の参加者も見物人の熱い視線を意識したのだろう。行列の構成は趣向が凝らされたものとなった。電気仕掛け両頭の兎の山車（白銀町）、土農工商仮装行列・色電気をつけた鶴亀の山車・祇園囃子・変装行列（野町一〜六丁目）、牡丹の花を飾った花笠と月の造形（古寺町）、神主姿（橋場町友田呉服店）、麦屋踊（北陸タイムス支局）、稚児行列（本馬町石坂角場共同）など、電気照明付きの造り物や仮装が練り、ほか祭太鼓、虫送り太鼓が囃子ながら歩いた（一月二〇・二一日「北國」）。

なお、金沢最大の繁華街である片町からは、北國新聞社主催イベントと同日に、別途、同町の鍋屋呉服店店員二〇名が神田祭手古舞姿に扮し、つぎに囃子屋台にしたがい数十名の若者が白い木綿を纏い鶴の真似をして練り歩くなど、四〇〇名の住人が練り出し、最後に、各戸に飾っていた榊を氏神社の石浦神社に植樹する独自の試みを行った（一月一九日「北陸」）。北國新聞社主催の提灯行列が終えたあとも、人々の興奮は収まることはなく、そのやり直しをもとめる声があがったり、また二〇日には尻垂坂の有志が練りまわったりした（二一日「北國」）。

ちなみに都市祝祭の華として盛り上げにかけなかった東西北の三大廓は皇室行事であることを鑑み、参加を見送った。一方、独自路線をとったのが主計町で、淡紅色熨斗目の着付けに白の指貫をまとった芸妓七〇名が囃子にあわせ仕丁行列を練った（二月一日「北陸」）。見物人は主計町に刺激を受け、「尻込して」参加しなかった三廓の登場を待ち望んだが（二月一日「北陸」）、結局、参加することとはなかった。

御大典に関して、三廓の芸妓が唯一、参加を許されたのは一六日に出羽町練兵場で催された祝宴の大典奉祝会で、芸妓も「国民の一人、市民の一人という資格」という判断からだった（二月一日「北陸」）。つとに芸妓の祝祭参加をめぐる批判が娼妓差別の高まりから明治三〇年代以降大きくなったことを検討したが^⑩、主計町のみが積極的に参加したのは、経営主体が三大廓のように貸座席ではなく料理屋を基本とする半公認地であったためだろうか。

（四）日記資料にみる提灯行列準備の現場

大正初めにあいづぎ大規模な提灯行列が催されたわけだが、金沢の住人は当日、どのように関わったのだろうか。見物と参加の両面を克明に記すのが、金沢の象嵌師の日記『米澤弘安日記』である。ここでは大正三年（一九一四）の青島陥落祝賀と大正四年（一九一五）の御大典の様子を紹介する。

①大正三年一月・青島陥落祝賀

九日、自分（弘安）を含め家族四人で官民合同の「一萬餘の大行列」を見物する。「工夫をこらしたダシ」と変装は「見ても盡きない」。一日、提灯行列に父が連れをともなうて見物に出かけ、そのあと、自分も見物に出る。「百鬼夜行の出立」で、「大砲、軍艦の造物」が多く、なかでも「中嶋町の軍艦はセメントの空樽を煙筒として煙を吐かせしは上出来」であった。夜八時の帰宅を受け、母親が見物に出かけた。

一日午後、東廓の旗行列が登場する。人気を集め、母親が見物にいった。夜、賑やかな太鼓の音に誘われ、夜の仕事をやめ、提灯行列を見に出かけた。一二日、提灯行列はもう出ないと思ったが、袋町・彦三町等三町合同、堀川の行列が出るというので、夕食後、見物に出た。「変装は益々面白くなった。兎の餅搗などもあった。軍艦模造も氣的を鳴し、サーチライトもつける」ようになった。帰宅し、夜業にとりかかったが、太鼓の音に誘われ、再び見物に出た。その後、香林坊の寄席にいくと、客が数えるほどしかない。皆行列見物にとられてしまったようである。夜一時、散髪屋に寄ると、若連中が集まって相談中で、明晩、玉川町から提灯行列を出すから、一緒にでないかと誘ってきた。返答に困り、一二時に帰宅した。

一三日、午前九時、町内一〇数名で提灯行列について相談する。長町川岸ほか五か町合同で催すこと、大行灯・大砲などを造ることに決まった。提灯は中小商店に問い合わせたとこ幸いに在庫があったの

で一五〇個を注文した。午前中、近隣へ実施の案内をしてまわり、昼食後、町内の個人納屋に七人ほど集まり、大砲模型の制作にとりかかった。長さ二間余、太さ最大四尺の木材を組立て、上に板を張ったもので、夕方四時に完成する。

その後、提灯を各戸に配り、各々、変装の準備にとりかかった。自分は町内の世話で忙しいので、母に頼んで洋服各所に菊花をつけてもらい、父にはシルクハットを造ってもらう。弟は知り合いに女装用の衣装を借りに行った。夕方、日が暮れ、行列用の行灯の字を書くなどの手伝いをし、その後、散髪店に行くと、「変装者の宿」状態であり、大混雑であった。

出発直前となり、弟は飯も食べないで、女装にとりかかった。自分も服を着て鬚をつけて飛び出した。仮装した連中が集まると、だれかわからない、よく見るとわかって、大爆笑がおきた。夜、市街地を練りまわり、九時に地元へ帰り、料理屋で酒宴を開くと、若連中の踊りや隠し芸もあり大騒ぎとなった。

一四日、納屋で大砲の山車を解体する。二〇分もかからなかった。散髪店へ行くと、昨夜の話で大笑いとなった。弟は午前中、衣装を返却にいった。午後、提灯行列費用の計算をする。総計二五円余で、大家は五〇銭、小家は一〇銭で、一戸二五銭平均で募集することとなった。一五日、提灯行列の費用を徴収し、その後、関係者で提灯行列の際に残った酒をみなで飲んだ。一七日、慰労会を兼ねて、各町共同の会を結ぶ相談をしたいから来てくれといわれ、二〇数名が集まり、共

進会規約が配られ、その後、酒宴でもりあがった（十一月九〜一七日程）。

②大正四年一月・御大典

御即位式の一〇日夜、広坂に行き官県立学校合同の提灯行列を見物する。「火の海の如し」であった。翌一日から一六日にかけて各町の飾りつけや行列など日中の催し物を家族全員が個々に時間をみつけ見物にでかける。一五日、昼と夜の行列を見物したいが仕事で見られず困った。

一六日、高岡町下藪ノ内など近隣三町と合同で北國新聞社主催の提灯行列に加わるようになったと知らせをうける。一七日、提灯行列参加のため、町内の世話役は提灯配布係、ダシ制作係にわかれ、加えて自分は毎日新聞社主催の太鼓行列参加のための太鼓飾り付けで「大忙」を極めた。午後、太鼓行列の世話を頼まれ子供を連れて集合場所の出羽町練兵場に出かけた。強雨となり、中止となり、また夜の提灯行列も中止となったため、夜は料理屋で仲間と飲み大酔した。

一八日、昨夜中止となった提灯行列を再実施することとなったために、若連中が「何か変装せよ」と言い出す。朝からみな仕事を休み、相談したが決まらず、午後になり、布のりで上下を造り、シルクハットをかぶる相談をしていたところ、午後二時半になってしまった。皆と改めて相談したいが、用にかこつけて参加する者が少なく、どうしようかと困っていると、雨が降りだした。中止となると判断し散会したところ、午後四時に新聞社から決行の電話があり、夕食を早

くに済ませ雨具にかため出羽町練兵場に集まった(図四)。練兵場内の様子はまるで「火の海」だった。行列は一時まで続いた(図二)。

終了後、子供たちに蜜柑をあげて解散させ、世話方一〇人で料理屋で慰労宴をした。変装の出来について我が団で一番上手だったのは「千田親父の天狗」で、長土堀は全部変装で大張り込みをしたと批評しあった。一九日、料理屋に世話役が集まり費用を計算する。

二〇日、太鼓行列のやり直しがあり、子供主催のはずが、若連中が張り込み、「見事」であった(十一月一〇(二〇日条))。

以上、行列の見物・参加の様子を簡単にまとめた。まず提灯行列の見物の様子をみると、家族それぞれが都合をつけて出かけており老若男女を超えた関心事であったこと、そして、その印象について弘安は「美麗」などと記すのみで、皇室への敬意や国民としての自負の表出がみられないことがわかる。同様の感覚は下って大正一〇年(一九二一)九月の行啓時の提灯行列に対しても「頗る美しい」と記すだけであ



図4 絵葉書 練兵場に集合した太鼓行列参加者 個人蔵

り、当時の人は提灯行列を壮観な美的世界として享受していただけだったとわかる。

次に行列参加の過程をみると、青島陥落も御大典も慌ただしいものであったとわかる。興味深いのは仮装や造り物の準備が自明のように着手され、かつその着手は参加当日になって急遽すめられていたことである。

青島陥落の場合は、家族単位で趣向を相談し、総出で衣装の制作や借用に奔走しており、町内住人同志であって相談せず、むしろ仲間を驚かせることが楽しみとなっていたとわかる。一方、御大典の際は、若連中から仮装の話が出され、町として趣向を話し合うが、なかなかまとまらず、積極的にかかわる者もいなくなり、最終的に個々の判断にまかせてしまった。俄的趣向は義務付けられたものでも、地域の威信をかけたものでもなく、できる範囲で楽しむという緩い参加姿勢だったのは、行列に数多く参加し、その規模を群衆化することを優先していたためであろうか。

できる範囲という点で注目したいのは、仮装参加者によって散髪屋が繁昌したという記載である。単に髪を整えるためだけでなく、散切りとは、明治三五年(一九〇二)の尾山神社昇格慶賀祭の際に、散切りに鬘を残し頭を剃った者や「慶賀祭」の字形に剃った者が多かったり(七月七日「北國」)、大正二年(一九一三)九月の招魂祭で頭髪を刈ってちょん髷にした人がいたりしたことから想像できる(九月三〇日「北國」)。つまり、剃髪はもつとも簡便な仮装手段となっていたの

である。

いずれにせよ、日記から読み取れる提灯行列と人々のかかわりには、時間の合間をみつけ、また家族そろって、さらに顔見知りの人々が集まって、その機会を楽しみ、盛り立て、そしてその作業に困惑・疲弊する姿しかみいだせないことに留意したい。国民としての主体性をあえて見出すなら、祝祭参加を通じて得られる愉悦と疲労という体感として現出したといえる。

四 金沢市祭の成立と神職層との対立

(一) 最後の氏神社大祭…宇多須神社二二〇〇年祭

大正に入ると、青島陥落祝賀、招魂祭・利長公三〇〇年祭、御大典と、半年おきに大規模な祝祭が催されたが、国民的祝祭は大正五年（一九一六）一月三日の立太子の礼をもつていったん落ち着きをめせる。同祝賀では昼に市内小学校生徒一万二〇〇〇人や木花幼稚園八〇人の旗行列が、また夜に学生連合四〇〇〇人や青年団・少年義勇団など五〇〇〇人などの参加がみられ、ほかに千日町が獅子舞、小柳町が弥彦婆を繰り出した（一一月四日「北陸」）。

氏神祭礼をみると、大正六年（一九一七）に久々に大掛かりな祭礼が催される。八幡町の宇多須神社二二〇〇年祭では、豊国町釜谷の工場から職工全部が揃いの扮装で寄進の米を木遣を歌いながら曳き出し（六月二二日「北國」）、森下町は主計町の芸妓二〇名の祇園囃子を出

し、卯辰一帯の稼業者はお手古の姿にて昔の風俗を示し、木町及び東馬場は住吉踊を、八幡町・木綿町は獅子を練った（六月八日「北國」）。興味深いのは新聞報道には見えないが、『米澤弘安日記』六月一二日条には東廓・小川町・馬場町・木町等連合の提灯行列・太鼓行列があつたとみえることで、提灯・旗行列が国民的祝祭の様式ではなく、祭礼を彩る「風流」の一種として定着したことを理解できる。この定着が後述する市祭の子供提灯行列成立の一因となつたと判断できる。

軍隊関連の祝祭の動向を見渡すと、まず招魂祭に関しては、大正二年（一九一三）以降の再活性化の流れが続き、都市祝祭としてもっとも盛り上がりを見せていた。催し物は獅子舞が大半をしめ、たとえば、同九年（一九二〇）には、泉新町、川上新町、中石引町、天神町、富本町、淵上町、大衆免、長町七番丁（二〇月一九日「北國」）、同一〇年（一九二二）には象眼町・川除町枝町連合、小立野上野町、天神町、材木町七丁目、伝馬町、淵上町、上大樋町、梅沢町、ほか石川郡潟津村大河端（二〇月一六日「北國」）、同一年（一九二二）には荒町、長田町、大衆免立町、英町、塩屋町、百姓町、千日町、材木町、新堅町二丁目、谷町、ほか羽咋郡羽咋町が参加した（二〇月二二日「北國」）。

一方、自肅傾向となつたのが軍旗祭である。大正五年（一九一六）九月の軍旗祭では「従来例では兵士等の主催で種々雑多の餘興を行つたが、本念は俗悪なる假装行列や手踊のやうな空ら騒ぎの催ふし

は「廃止し「軍隊に對する尊嚴を失はぬ」ように挙行した。仮装行列が「俗悪なる」もの、「尊嚴」を失うものとして否定された結果、造り物・相撲や獅子舞を催すことにとどまった（九月八日「北陸」。既述のとおり、このような仮装批判は学校運動会でも同時期にみられ、青島陥落そして御大典での仮装提灯行列の取り締まりが否定意識を高めたと判断できる。

この年がきっかけとなり、以降、営庭内で催される軍旗祭・火砲祭は造り物が集客の目玉となっていた（大正七年六月二日「北國」・九月一日「北國」、同一年一〇月一〇日「北國」、同一年九月八日「北國」、昭和三年九月一〇日「北國」、同五年八月二三日「北國」）。

国民的祝祭でふたたび大規模な行列が繰出すのは大正八年（一九一九）である。同年五月七日夜、皇太子成年式を祝い、森山町大北青年団が提灯行列を実施し、その見物に多くの人が出がかった『米澤弘安日記』。また同一〇年（一九二一）九月三日の欧州からの皇太子帰国を祝う奉祝遙迎式には小学生旗行列、校下青年団・専売局の提灯行列が催された（『米澤弘安日記』）。

（二）総祭復活運動と封國祭

注視すべきは大正八年（一九一九）五月に金沢市の祭礼の在り方を根本的に問い直すいままでない動きがみられたことである。問い直しの端緒となったのが同年五月に「北陸毎日新聞」に寄せられた匿名

市会議員からの投稿である（五月一七日）。内容は要約すれば以下のとおりとなる。

「元來神社の祭日は住民の安逸日としてあるから、日ごろ大いに稼いで祭日には十分慰安するのが人間生活上最も必要なことである。しかし、金沢市の場合、各氏神の祭日が異なるため、ある町は楽しく暮らす一方、ほかの町は平常どおりに稼ぐという対照をしめす。このようないろいろに、各神社の祭日を全町そろって一定にし、ともに祭礼に對し余興として意匠を凝らし、曳山あるいは金沢名物の獅子舞のほか屋台などを出し盛大に行うべきである。たとえば尾山神社三〇〇年祭のような企てに改めれば、これから金沢名物の祭日となつて県下各地より入り込む人も多くなり、市の繁榮につながる。一時は招魂祭も非常に盛大に行われたが、年々熱氣が失せて今日では申し訳的に行われているだけであり、招魂祭の如きも市内春祭と同時にに行い盛大にしたらどうだろうか」

祭日の統合により市内全域を祭気分で満たせば、市の繁榮につながるというわけである。一見、大正八年（一九一九）三月に発せられた民力涵養運動にもとづく事業の合理化主張のようにみえるが、その趣旨は右記事から三週間後に明確となる。六月七日付「北陸毎日新聞」に同じ市会議員の意見をもとにした「尾山神社の封國祭を全市中の總祭にするため」なる記事が掲載された。

「市内の祭禮を統一にして敬神の念を旺にすると共に市民一般の安息日と爲し祭禮を極めて盛大に行ひ一口市の繁榮を圖るべしとの意見

は過日の本紙上に述べて置いたが、一般市民も愈よその実行が種々の點に於て利便多きを看取し愈々第一の着手として来る十四日は別格官幣社尾山神社の封國祭に市中總祭的に盛に執行することとした。同社の封國祭は藩祖前田利家公の居城を定められた記念祭で、然るに別格社に昇格以來祭典が逐年衰微して昨今市民から忘れられし如き觀があるので、此際全市挙つて最も盛大に執行すべき企劃を立て、先般來尾山舊誼會の千田登文氏發起の下に本年から毎年同祭を全市の大祭日とすべく、祭礼の餘興の催しものに就ても協議の上、古來催し來つた固有の獅子舞や彌彦婆、祇園囃等の全部を繰り出して以前の藩祖三百年祭の如き賑かな祭典を執行することに決した」

つまり、尾山神社祭礼を盛大化し金沢の繁栄をはかるべきだといふわけである。「先般來尾山舊誼會の千田登文氏發起の下に本年から」、毎年、封國祭を「全市の大祭日とすべく祭礼の餘興の催しものに就ても協議」とあり、はやくから尾山旧誼會によつて準備がすすめられていたと想定でき、市會議員の五月投稿は同会の意向を代弁したものだつたと認められる。

尾山旧誼會とは明治二十四年（一八九一）の金沢開始三〇〇年祭を契機とし同二七年（一八九四）に結成された尾山神社の支援団体である。当初は旧加賀藩士を會員資格としたが、日露戦争後に會員数は數百から一一〇〇余に急増したことを受け、明治四二年（一八九九）に會員資格を、藩祖への報恩謝徳などを趣旨とする精神的な同意によるものに広げ、活動の拡張がすすめられた。再編後の同会の会長には明

治期石川の政財界の頂点にいた横山隆興が就任していた⁹⁰。

封國祭拡大案の發起人となった千田登文の経歴（弘化四年～昭和四年）は明治三六年（一九〇三）『北国人物志 初編』（北光社）ほかに詳しくみえるため詳述はさけるが、西南戦争の際に奮戦し、西郷隆盛の首を掘り起こした逸話で知られた名物男であつた。

旧誼會がこの段階にいたり総祭復活をもとめたのは、全国的な動きとして、明治三九年（一九〇六）に官幣社への国庫支援や神社合祀が決まり、官幣社の経済的基盤が固まり、かつ地方自治における神社の重要性・中心性が高まつたこと、そして、大正以降において明治神宮創建、御大典、第一世界大戦により神社の存在意義が強まり、敬神崇祖の觀念が普及したことがある⁹¹。旧誼會會員はその觀念をもつとも具現化した神社として尾山神社を位置づけたのだろう。

さらに地元の動向として、大正初期の各種国民的祝祭の地元での盛り上がりや、また大正二年（一九一三）よりの招魂祭の再活発化、同六年（一九一七）に催された宇多須神社一二〇〇年祭の成功に総祭復活の可能性を見いだしたと思われる。とりわけ、市祭の事業内容を鑑みると、国民的祝祭に参加がとどまっていた旗・提灯行列を、その文脈から切り離し導入した宇多須神社の大祭の影響は小さくなかつたと思われる。

これら総祭復活の動きを受け大正八年（一九一九）の封國祭は催し物の盛大化がはかられた。六月一五日の同祭開催の一週間前には、一連区から泉町、二連区から百姓町、三連区から石引町或は上野町、四

連区から新町、五連区から宝船路町、六連区から長田町、七連区から大衆免が獅子を一組ずつ出し、さらに各区から俄または弥彦婆を出し、また廓も参加することに向け、準備をすすめた（六月八日「北國」）。

祭りの当日、祭式会場では「尾山舊誼会の会員が嬉し涙に老の眼を曇らせつつ畏こみ居れる」という反応をみせており、同会会員が並々ならぬ思いをもって臨んだとわかる（六月十五日「北國」）。

『米澤弘安日記』には祭り当日、境内を訪れたところ「人二押され苦しくて」逃げ出すほどで、また「南町ハ蟻が如き」人出であつたのみえ（六月一四日条）、その殷賑ぶりが察せられる。

結局、当日、催されたのは第四区有志、川上新町、上野町、淵上町、高儀町、大樋町、石坂町等の獅子、矢口の俄、廓芸妓の手古舞、北國劇場出方連の一二か月・弥彦婆だった（六月十五日「北國」）。

翌九年（一九二〇）の報国祭開催前、北國新聞は、同祭の実施日は利家公尾山入城記念日にあたり、祭りは「金沢開始記念祭」、あるいは「金沢總祭」の意義をもつと報じ（六月一日「北國」）、また開催翌日には「金沢の總祭が追々實現される」（六月十五日「北國」）と見出しに掲げ、祝祭が前田家と金沢市の歴史的顕彰と総祭復活を趣旨とすることを明確化し伝えた。催し物は矢口、泉町、小立野新町、大衆免、新町、百姓町、高儀町などの獅子、大衆免の祇園囃子・万歳が繰り出した（六月十五日「北國」）。

しかし、このような封国祭の総祭化運動は市民の全面的賛同を得たわけではなかった。市祭終了後、「封國と總祭に就て」と題する、石川郡の某神職からの投書記事が北國新聞に掲載された（六月二〇、二二日「北國」）。

内容は金沢の総社でない尾山神社の祭礼はあくまで同社の祭礼にすぎず、金沢の総祭と位置付けることは他社の祭典を軽んじる思潮をうむだけである、総祭とするなら、市内の神社が一斉に祭典を執行すべきというものである。

神職からの厳しい批判があつたものの、新聞は大正十一年（一九二二）の封国祭を改めて「金沢開始記念祭」と意義付け、総祭的気分を煽った。催し物は各連区の代表として野田寺町・川上新町・石引町・御小人町・高儀町・堀川・春日町が獅子舞を出した（六月一三日「北國」）。

（三）金沢市祭と敬神崇祖観念

大正十二年（一九二三）、金沢市祭が実施される。同祭の歴史的意義について山本吉次は、米騒動後の財源不足の中、金沢の「起源」と「歴史」により金沢市民の誇りを鼓舞し、「大金沢建設」に協力する市民意識を涵養するイベントであつたと指摘するが²²、かかる地方自治上の戦略としての評価は、ここまでの尾山神社の動きをみれば明らかのように、一面的にすぎない。

尾山旧誼会こそが市祭成立の中核的ステークホルダーだったこと

は、開催の一月前の大正一二年（一九二三）五月の新聞に「總祭と云ふ名稱の許に執行せられる様になつてから（中略）其五回目の今年は市が決定して非公式から公式に變つた譯で斯うなる迄には尾山舊誼會は多大の苦慮を拂つて來てゐる」とあることからうかがえる。（五月二五日「北陸毎日」）。

開催前年の大正一一年（一九二二）、「金沢市祭」実施にむけて市は予算を計上する。しかしその後の経過は順風万帆とはいかなかった。翌一二年（一九二三）一月、石川県神職会金沢支部は例会で市祭の件を諮問したところ、市祭開催は賛成だが、その期日を封国祭にあわせ、尾山神社を式場と定めることに大反対をしめした。

理由として、金沢市は「前田利家の金澤市」でも「前田侯爵家の金澤市」でもなく、また利家封国後に金沢に入った者には利家を崇敬しない者も多くいるからと示し、会場として卯辰山遊園地や出羽町連兵場、あるいは各神社と提案した（一月一四日「北國」）。つまり、氏神社を管理する一般の神職たちにとって尾山神社のみが持ち上げられることに強い違和感を示したわけである。

神職の反対は既述の通り、大正九年（一九二〇）の封国際の趣旨への反発から始まり、同一二年（一九二三）にいたり激化したわけだが、このような反発の背景には赤澤史朗が大正デモクラシーの観点から課題化させ、さらに畦上直樹が深く検証した在地神職層の全国的な活動活発化があろう²⁸。

畦上は一九一〇年代以降、在地神職層は、すべての神社が「国家の

宗祀」である以上、官社／諸社の区別なく国家的に尊重されるべきであり、これを前提にして、国民教化政策において、真の根柢なく上位におかれた官社に対して、地域的に密着する在来諸社こそがむしろ国家的重要性をもつとする主張をもとに活動を活性化させていったと指摘する。

つまり、市祭の反対の背景には官社たる尾山神社に対する諸社の神職たちの反発があつたと判断できる。では、神職層の中心にいたのはだれか。全国の在地神職からなる大正一四年（一九二五）五月成立の全国社司社掌会の幹事に香林坊大神宮・太田真一の名がみえることを鑑みると、自ずと先頭に立った人物を想像できる²⁹。ただし、太田が反対したのは「国家の宗祀」をめぐる諸社の貢献性の顕示のためだけだったとは思えない。中心市街地に尾山神社に近接して位置し、ともに氏子をもたない神社であつた点、経営上での強い競合意識があつたと想像できる³⁰。

このような反対があつたものの、金沢市は大正一二年（一九二三）四月、市祭を六月一四日に執行することに決定し、その盛況のために「国粹的で金澤特有の餘興」を選んで行うこととし、「堀川の大名列、卯辰の大仁輪加、小立野の十二箇月」を候補にあげた（四月二二日「北國」）。

明治四二年（一九〇九）の行啓以降、都市祝祭にかかせない催し物となっていた獅子舞でなく、あえて、金沢開始三〇〇年祭や尾山神社昇格慶賀祭など明治期の祝祭で人気を集めた方面地域単位の俄こそが

市祭にふさわしいという判断が下されたのである。

俄を優先化したのは、間接的には俄が人気を集めた往時を知る年配者の思いや、また獅子舞出演が常態化していた招魂祭との差別化意識、敵対する「諸社」との協調意図、さらに後述のとおり、「郷土芸術」ブームの影響による在来文化の再評価を想像できる。

春頃には市民レベルで市祭への関心がひろがっていたことは、尾山神社の封国祭の賽銭がそれまで四、五円だったのが、前年の一年（一九二二）には三〇〇円もあつたということから想像できる（大正一二年五月二五日「北陸」）。一部在地神職からの反対はあつたものの、市民の多くは尾山神社盛り立ての意欲をもつて市祭執行を期待したということである。

六月一四日当日、尾山神社では午前八時より封国祭が、一〇時より市祭の祭典がそれぞれ催された（六月一三日「北國」）。このときの祝賀会における相良市長の発言で注目したいのは以下の開催大義である。

「十數年以來一部市民間に於て尾山舊誼會なるものを組織し前田利家公に舊恩報謝の爲め敬虔なる心情を以て神饌を供へ神靈を慰むると同時に有志を語つて報恩の誠を臻たすと云ふことはその至誠必ずや神明を動かすものありと信じますが、ここに同じ目的と主旨と意見のもとに金澤市祭を催す」

尾山旧誼会の志と活動との接合をはかることに開催の意義があると説いたのである。また後日、北國新聞は市祭の意義について「敬神思

想の向上を圖る」ことにあつたと総括し成功を報じた（六月二四日「北國」）。つまり、尾山神社を核とする大祭を通し敬神崇祖觀念（以下「崇祖」省略）の普及をはかり、その普及により都市の繁栄をもたらすことが金沢市祭の当初の大義であつたわけである。

一四日の午前には北陸軍楽隊の先導で三・四年生及び五年生以上の女兒計一万余の旗行列が、夜には五年生以上男子五〇〇〇人の紅提灯を翳しての提灯行列が兼六公園長谷川邸跡を出発地として催された（六月一五日「北國」）。いずれも軍歌ではなく市歌を合唱した点に旧来の行列との違いがあつた。

市祭で児童による行列が催された背景は、宇多須神社大祭で旗・提灯行列が催されたことから明らかなように、子供独自の風流文化としての印象が定着した事情があつたと思われる。実際、見物人の反応も新聞には「才美しいこと」という賛美の声が絶えなかつたとある（同右）。

もうひとつ、重要な背景といえるのが神社崇拜の教育活動への組み込みである。児童参加は大正一二年（一九二三）五月末に市内小学校校長会で決められたが（五月三日「北國」）、それに先だち、小学校と神社との結びつきが進んでいたことに留意が必要である。その先駆的な事業といえるのが大正七年（一九一八）の石川県教育会『石川県之研究 神社編』の刊行である。同書は郷土教育の参考書として県内の神社の来歴と祭事を紹介したものであり、祭事編の資料は小学校長一〇〇人余りが提供した。

そして市祭開催の五か月前、大正十二年（一九二三）一月には市内校長会で「氏神神社の大祭には學校長も參列すること」「神職會に於て國民道德講話會等開催の場合には學校に於ても成るべく周旋を爲すこと」などと小学校側が神職會との協力体制の強化を決めている（一月一四日「北國」）。

高瀬幸恵は一九一〇年代の國民道德の再編成において、敬神觀念が國民道德の主要な構成要素として導入され、さらに地域行政当局が神職に地域社会への教化を促すようになったと指摘するように、市祭への児童による提灯行列参画の目的は神社をめぐる道德教育の一環であつたと判断できる^⑧。

実際、行列開始前には敬神觀念の涵養に関する訓話が行なわれ（五月三〇日「北陸」）、そして行進先に尾山神社参拝が組み込まれていたことから（六月一五日「北國」）、學校が提灯行列に見出した意義を理解できよう。以降、子供提灯行列は市祭の定番事業となるが、高瀬幸恵は小学校の神社参拝が學校教育の訓育の一環として本格化するの
は昭和初期の教化總動員運動を受けてと指摘する点、金沢市の活動は全国的にみても先行するものであつたといえる^⑨。

敬神觀念の普及実践として市祭は一定の成功を収めたかにみえたが、ふたたび批判の声が高まつた。終了して一〇日後、新聞は、別格官幣社は法規に定められた祭礼以外執行できないのに市祭を行ったこと、封国祭執行後に市長祭主のもと市祭を執行し、市長自ら供進料を奉獻し祭文を朗読し、さらに神前を開扉し神を冒瀆したこと、敬神の

流路から集まつた賽銭を市の所得にしようとしたことなどから、違法の廉があると報じた（六月二四日「北國」）。

市祭は「神前冒瀆」の結果に終わったというわけである。在職神職層が反対のために法令などを根拠にし反発したことを受けた記事と想定できるが、この批判からも市祭が敬神觀念普及を最大目的とした事業であつたことを改めて理解でき、かつ、後述の通り、かかる批判をかわす意図から翌年以降、「大金沢計画」「愛市」などの脱敬神的な大義が強調されるようになったと思われる。

催し物に視点をもどす。結局、催し物参加は小立野が見送られ、堀川の大名行列と卯辰の俄だけとなつたが（六月六日「北國」）、卯辰は大正四（一九一五）年六月の利長公三〇〇年祭以来、堀川は明治三九年（一九〇六）四月の臨時大招魂祭以来のそれぞれ出演となる二つの催し物への期待は大きく、見物人は「大人も子供も大名行列と大仁輪加を見んものと命を賭して混雑な人込みを縫ふて」という人気をみせた（六月一五日「北國」）。

大俄を催した卯辰は、高町・下小川町・八幡町・木棉町・木町の連合からなつた（六月二日「北國」）。新聞は「古來催しもの」で「久々の繰出しに物珍らしく到る處に拍手を以て迎へられ扮装の珍奇な處は恰も百鬼夜行の化態は大阪仁輪加と異り、入り交り差し交りて滑稽問答の落ちが頗る奇抜なものがあつて抱腹絶倒」（六月一五日「北陸毎日」）、「武士の切腹ではあるまいがお腹が引くり返る程滑稽」（六月一五日「北國」）と伝えた（図五）。

堀川の大名行列は、巴町・笠市町・堀川間ノ町・古餌指町・七ツ屋町・中堀川町・西堀川町・淵上町・堀川角場九町が参加し、その実施にあたり「昼夜兼行火」のように所作事の練習をした（六月一二日「北國」「北陸毎日」）。総勢七〇〇人からなる行列は長さ二町に及び、「市祭最大の餘興で一番の呼物」と称えられた（六月一二日「北國」）。留意すべきは衣装で、高岡市及び市内の呉服店から新調したものだった（六月一二日「北陸毎日」）。また喇叭で陣隊を整えており、楽隊の影響が及んだ（六月一五日「北陸毎日」）。

これまで堀川の大名行列は、行列の威容や勇壮さをみせつつも、手にする道具類はすべて野菜や農具などの素材をもつて仕立てた造り物であつたゆえに、その道具の出来ばえを楽しむ、かつそれが醸し出す、大名行列を茶化すおかしみを感じることに、その特質があつたが、当該祭にいたると、「見物の老媼の囁きをきけば、「昔は下座したもののやに」と整理に声を潤らす警官の同情を表し」たとあり（六月一五日「北陸毎日」）、敬意を込めた視線はなくなり、また、おかしみを



図5 絵葉書 卯辰の大仁輪加 大正12年金沢市祭 個人蔵

漂わせた俄的特性が減退したと判断できる。

このときの絵葉書を見ても、大名行列の再現に主眼をおいていたことを理解でき（図六）、記者は「先き拂の武士二人に次で派手な縮緬の襦袢に管笠冠つたお手木が松平筑前守の荷物札と書いた荷物を擔ぎ木遣の音頭の節面白繰歩」、「奴が殿様の宿入りの時に勤むる身振は音頭の聲に連れてヨイトコサ／＼コレワイサのサと飛びかはす形が奇觀を呈して現代の人の眼には異様に感じられる」などとその印象を伝えた。この記事から、現行の奴行列の見どころである道具の投げ渡しや宿入りの所作に由来することを確認できる（六月一五日「北陸毎日」）。

ただし、滑稽さが完全に消えたわけではなかった。見物人の反応について「奴の身振や眼鏡をかけた武士、腕時計のお供など笑聲する迄に起つて」とある。奴の身振りや身装品が笑いを誘ったことは、瓢箪を股間にぶらさげた奴の絵葉書から看取できる（図七）。興味深いのは絵葉書の人物が剃髪していることである。既述の通り、かつて仮装の



図6 絵葉書 堀川の大名行列 大正12年金沢市祭 個人蔵



図7 絵葉書（部分拡大）
滑稽な恰好をする大名行列の奴
大正12年金沢市祭 個人蔵

一環で頭髪を剃り上げる面々が少なくなったが、それと同じ意欲を見ることができると。

注目すべきは、大名行列の実施にあわせ、新聞紙上で明治二四年（一八九二）の金沢開始三〇〇年祭の備押が回顧され、その催し物について「大名行列の創めて」という見出しで、当時の行列図刷り物を紹介したことである（六月二二日「北陸毎日」）。このことは往時の人々にとって大名行列はあくまで以前の祝祭で催された催し物としか認識されていなかったことを物語る。後述のとおり、大名行列に加賀藩の威信や歴史的系譜を見出すのは戦後の百万石祭からである。

久々の堀川の大名行列登場の影響か、大名行列は他の市町へも伝わっていく。翌一三年（一九二四）六月の七尾開港二五年祝賀会には「大名行列、仮装行列、二輪加、祇園囃子」等が催された（六月六日

「北國」）。

大正一三年（一九二四）の市祭では神輿渡御が催された。同年の新聞は、市内の神輿渡御は明治二四年（一八九二）の金沢開始三〇〇年祭をさきがけとし、その後、旧藩祖三〇〇年祭と尾山神社昇格記念祭で行われたのみで、市祭での渡御はそれ以来ということで、「大金沢」開始の記念として最も意義あると評価した（六月一〇日「北國」）。行列の人員には校下青年団一三〇名が参加した。

昇格慶賀祭以降、約三〇年ぶりの渡御を人々はどう見つけたのか。大正一四年（一九二五）の新聞はその様子を「平安時代の繪巻物の如く蜿蜒四町に及」び、それを見ようと集まった人々も、通過の際は水を打ったように静かに迎えたと言えた（六月一五日「北國」）。

大正時代最後の大行列が大正一三年（一九二四）十一月の陸軍特別大演習実施に伴う行啓を祝しての提灯行列である。行啓の第一夜には官立学校の生徒五〇〇人が、還啓の前日一三日夜には市内小学校及び青年団五三〇〇人がそれぞれ提灯行列を行い、その様子を皇太子は宿泊所の成巽閣二階より眺望し、隊列に対し提灯を振り会釈し感謝の意を示した。また一〇日夕方には旅情を慰めるために明治四二年（一九〇九）の行啓の際と同様に、獅子舞を宿泊所の玄関先で演じた。出演したのは市内四〇組から抽選した泉町の赤獅子、春日町の茶皮獅子、材木町の白獅子だった⁸⁰。

五 変質する祝祭行列

(一) 昭和御大典と仮装のは認

金沢で多くの仮装行列（俄）が繰り出した最後は昭和三年（一九二八）の御大典である。大正の御大典時には北國新聞社が「仮装提灯行列」の統御に苦勞したが、昭和の御大典では、石川県保安課は当初、変装、示威、宣伝まがい厳禁するものの、「取締りも寛大にやる方針」とした（一〇月四日「北國」）。

ただし、結局、以下のような制限が加えられた（一〇月一三日「北國」）。行列は、男女の区別を厳にし、一隊は一〇〇人以下とし、これを四列縦隊に編成し、芸妓妓の著しい変装行列、花魁道中、男女の異性変装、警察官などの制服変装などを禁止するとともに、自動車、原動機付自転車のほか、山車・屋台・神輿・獅子・祇園囃子・弥彦婆・俄・造り物など行進の逆行禁止、左側通行、要衝での停止禁止など、道路上の各種規制が設けられた（一〇月一三日「北國」）。

異性変装の禁止は近代以降の定番だが、隊列編成、左側通行や逆行禁止など交通規制が強化されたのは、自動車の増加や市内鉄道敷設により、かつてのように道路を大人数で闊歩できる道路環境でなくなった事情による。

即位礼から大饗宴にかけての一週間におよぶ祝典の期間中参加した団体数は一一五組、参加人数は三万人に及んだ。各団体の催し物の種類と数は以下のとおりである（昭和四年『金沢大礼記念要録』）。

獅子舞16、祇園囃子12、提灯行列12、花電車8、仮装行列7、時代風俗行列5、餅搗5、弥彦婆5、御輿渡御4、前琵琶4、音曲合奏4、奉祝踊3、武者行列2、農事行列2、八百物行列2、旗行列2、花月囃子2、加賀鳶2、太鼓行列2、人形浄瑠璃2、芸妓手踊2、一二月月仮装行列1、筑稚子行列1、相撲踊1

このうち参加団体の具体名がわかる催し物（所属連区・団体名・趣向主題・参加人数）を、ジャンル別に整理すると以下ようになる（一月二〜一九日「北國」、『金沢大礼記念要録』）。

【俄】1 笹下町（加賀鳶踊23）、1 桜木七の小路（音曲合奏行列）、1 助九郎町（神輿・相撲土俵囃子75）、2 新堅町（神輿渡御行列）、3 上野町（餅搗33）、3 上鶴間町親睦青年会（奉祝踊40）、4 上胡桃町（餅搗屋台踊53）、4 中町（今世十二か月行列120）、4 下近江町（桃太郎鬼ヶ島征伐行列154）、5 木倉町（模型神輿行列55）、5 上伝馬町（桶公父子造り物行列50）、5 青草辻市場（八百物仮装行列64）、5 宝船路町（時代風俗太鼓行列）、5 長町（相撲テンテコ踊行列40）、5 長町五番丁（鳴物入時代仮装行列30）、5 宗叔町（桃太郎仮装行列65）、5 長土塀通（樽御輿仮装行列200）、6 堀川角場（古代風俗行列70）、6 矢口（時代風俗仮装行列500）、6 折違町（時代仮装行列・500）、6 西堀川町（屋台曳稚子行列・達磨行列130）、7 上中島町（百

姓行列³⁸⁸）、7馬場三番丁青少年団（武者行列¹⁰⁰）、北安江町（鬼餅搗²²）、河北郡浅川村（太鼓鬼餅搗行列）、河北郡森本村弥勒縄手（仮装提灯行列¹⁰⁰）、河北郡田上村山上青年団（大名行列）、石川郡二塚村（明治維新御遷都行列）、石川郡額村（神輿行列）、倉庫精練（羽二重踊）

【獅子舞】1千日町（¹²³）、2百姓町（60）、4中町、6英町、6淵上町（65）、6中堀川町（50）、6七ツ屋親交会（26）、6五寶町（80）、6象眼町（60）、6巴町（62）、6鍛冶町（50）、7梅沢町（60）、7山ノ上町（41）、7大衆免（38）、羽咋郡今浜（40）

【祇園囃子】1千日町（51）、2枝町（花月囃子30）、5下伝馬町（12）、5青草辻市場、6七ツ屋町、7東馬場（24）、7東廓（太平御代神楽囃子30）、三口町青年会（41）、倉庫精練会社（40）

【弥彦婆】5川岸町奉祝壽会（24）、5石浦新町金城奉祝会（35）、7浅野町（50）

【太鼓】5長町七番町（大太鼓曳曲打²⁸）、石川郡犀川村末（太鼓打）、北國夕刊新聞社（小太鼓行列^{40組}⁹¹⁰）

【山車】3上鶴間町、7東廓（素囃子山車）、大阪朝日新聞社（30）

【そのほか】1桜木三、七の小路（三曲合奏各5）、2新豎町校下青年団（奉祝神輿³⁰）、4殿町（筑前琵琶⁷）、7高道新町（人形浄瑠璃²⁰）、花電車、金沢新報社（奉祝飛行）、北陸毎日新聞社（郷土芸術歌踊大会）

獅子舞の参加地域をみると、六・七連区に集中しており、昭和に入ると中心市街地での伝承が途絶傾向となったと判断できる。ほかの催し物は市域全体に分散しており、また郡部の参加が今まで以上に多い。郡部参加の背景は、行政的には大正一四年（一九二五）以降に進む周辺郡部の市域編入の動きを想定できるが、それ以上に地方からの労働者が金沢の経済産業をささえるようになった事情がある。

催し物の新たな特質としては、花電車が運行したり、東廓が市街鉄道に乗り込み素囃子を行ったりするなど、鉄道が活用されたり、また太鼓行列が大幅に増えたりしたことをあげられる。ちなみに花電車はこれ以前に、大正八年（一九一九）二月の市街鉄道開業時、同年七月の対独講和条約調印を祝う平和祭（大正八年七月一日「北國」）、また同一〇年（一九二一）一〇月一〇日夜の電気市営祝賀デーにそれぞれ三台を走らせている（一〇月一二日「北國」）。

行列の種類数で多かったのは獅子舞と祇園囃子であるが、実際には仮装行列（俄）に相当する催し物を一括すると約三〇団体で最多となる（図八）。大正期より軍隊や学校の祝祭行事で仮装行事が批判され、また国民的祝賀でも統御の対象となりつつあったが、昭和に入っても人々は俄的趣向こそが祝祭を盛り立てると意識したのである。

仮装の主題は、百姓（農事）、武者、加賀鳶、餅搗、時代風俗（三町）、稚子行列羽二重踊、達磨、仮装提灯行列、神輿渡御、今世一二か月、楠公父子造り物、桃太郎鬼ヶ島征伐、古代風俗、大名、手古舞、相撲テンテコ、八百物、音曲合奏、太鼓鬼餅搗、明治維新御遷都

などであり、多くが明治期以来の定番であった。

参考までにその内容を紹介すると、百姓行列は播種から始まる稲作作業一連を、武者行列は加藤清正、桃太郎、岩見重太郎他武将を、時代風俗行列は神代・奈良・平安・鎌倉・足利・戦国・徳川・元禄（子供の忠臣蔵四七義士）、明治（白虎隊）をそれぞれ仮装し、上野町の餅搗行列は笛・太鼓・歌にあわせて手取足取面白く調子よく搗いてまわったものだった（十一月一二・一三日「北國」）。

各種行列のうちとくに人気を集めたのが、折違町・古道・中橋町・深川町・醒ヶ井町・長田町・長田弓ノ町からなる矢口方面地域の時代行列であった。新聞は最前列にたった奴舞について「矢口独特」、ま



図8-1 絵葉書 下近江町の桃太郎鬼ヶ島征伐行列
154人参加 個人蔵



図8-2 絵葉書 矢口の時代風俗仮装行列
500人参加 個人蔵



図8-3 絵葉書 仮装行列（詳細不明） 個人蔵



図8-3 絵葉書 仮装行列（詳細不明） 個人蔵

た出し物全体を「北陸第一の代表的な奉祝催し物」（十一月一二日「北國」と絶賛した。矢口は藩政期より祝祭行列を牽引してきた地域であるが、その姿勢は昭和に入っても続いたことがわかる。つぎに旗・提灯行列の参加状況（団体名・参加人数）をみると以下のとおりとなる（前掲資料）。

【旗行列】小学校（1470）、新堅小（750）、魚商組合（580）
【提灯行列】小学校（5760）、男子中等学校（6300）、官立県立市立学校（6200）、青年訓練所等（1600）、洋服組合（700）、履物組合（400）、金沢絹糸業団体（402）、津田製作所（100）、片町（仮装30）、地黄煎町

(仮装150)、野田寺町(108)、野町一丁目(600)、天神町(500)、材木町一丁目(200)、北國新聞社(600)

提灯行列の動きをみると、規範性をもつ行列は、一〇日夜に官県立学校合同、洋服小組合、一三日に中等学校、一四日に小学校合同、一六日に青年訓練所合同などが行なわれた。また仮装提灯行列は一日に片町が催しており、はやくから祝祭を楽しもうとする空気があったとわかる。

提灯行列のクライマックスを飾ったのが、一六日の北國新聞社主催事業であった。開催当日の新聞朝刊は各町の様子を「各極秘に準備を進めある斬新奇抜な趣味は必ずや感嘆と驚異をもたらすであらう」と、大正御大典の際の正装を命じた方針とは異なり、俄的趣向の披露を煽る記載が並んだ(十一月一日「北國」)。

一六日夜、四〇余団体六〇〇人が出羽町練兵場を起点に行進した(十一月一日「北國」)。団体内訳をみると、同業者関係(洋家具商組合・自転車組合・傘提灯組合)、会社・店舗関係(明治印刷会社・石川屋・倉庫精練・錦華紡績・森八・十二番館・北陸漁網会社・へぐら煮製造工場)、町単位(一連区/泉寺町・泉芳交会・泉親交会・泉交友会・六斗林・三間道芦中町・地黄煎町、二連区/堅町・早道町、四連区/上胡桃町・尻垂坂町・材木町七丁目、五連区/茶ノ木町・三構青年会、六連区/東別院門前通・堀川間ノ町、七連区/下春日町青年団・大樋町・森山町校下青年団、石川郡潟津村須崎・石川郡忍野村

丸木・石川郡寺地・河北郡川北村磯部青年会他)などからなり、催し物と同じく近郊郡部からの参加が目立った。

行列は、主催者・北國新聞社による電灯装飾を施した大照明自動車を先導にし、団体のシンボルとして鳳凰や竜宮城などをかざった山車や大行灯を曳行し、ブリキ太鼓、太鼓・三味線、虫送り太鼓などで賑々しく囃子ながら、徳利お化け、烏天狗、忠臣蔵、石川五右衛門、白波五人男などに扮し練り歩いた。

注目すべき提灯行列の団体目印である。歴史をさかのぼれば大提灯・大行灯が一般的で、その後、照明付き山車へと発展したが、今回初めて自動車が入入された。四角い巨大照明を積んだ自動車に娘たちは「見事だね」「綺麗だわ」、年寄りには「なんちゅう美しい事やら」「ほんまに明るい」と見とれたという(十一月一日「北國」)。

ちなみに自動車が連なる行列は(表二)、昭和六年(一九三一)六月に日本フォード自動車移動博覧会の自動車キャラバン隊が全国を巡回する途中、市祭の日にデモンストレーションを行ったのが最初で(六月一日「北國」)、ついで同年八月に金沢市水道局は自動車ポンプを積んだ自動車が連ねて水道利用を宣伝した(八月一日「北國」)。

クライマックスは仮装提灯行列が飾ったわけだが、留意すべきは俄的趣向の統御の変化である。青島陥落祝賀の際は、警察が俄的趣向の制限なき盛り上がりを強制的に終了させ、大正御大典の際は地元メディアが主催し、実質、行政などの意向を踏まえ厳しく規制を行ったものの、盛り上がりには欠けることかなし崩的に容認の方向をしめ

表2 大正末～昭和初期の祝祭行列

開催年月	祭事名	催し物（参加地域・人数）	出典
大正10年6月	封国祭	獅子舞（川上、西堀川、下春日町、百々女木町）、祇園囃子（三舛会）	6.15「北國」
大正10年9月	皇太子奉 祝遥迎式	提灯行列（小学校4000、校下青年団）	9.4「北國」
大正11年2月	普選デー	旗行列（各団体）	2.5「北國」
大正11年6月	封国祭	獅子舞（野田寺町、川上新町、石引町、御小人町、高儀町、堀川、春日町）	6.13「北國」
大正11年10月	招魂祭	獅子舞（荒町、長田町、大衆免立町、英町、塩屋町、百姓町、千日町、材木町、新堅町二丁目、谷町、羽咋郡羽咋町）、俄（上胡桃町）、弥彦婆（森山町、岩根町、石川郡弓取村下安江）、剣舞（象眼町）、祇園囃子（堀川角場、新堅町三丁目）、太鼓曲打（栄町）	10.22「北國」
大正12年6月	市祭	旗行列（尋常3、4年、5年以上女児10000）、提灯行列（尋常5年以上5000）、大名行列（堀川一団）、大ニ輪加（卯辰一団）	6.15「北陸毎日」
大正13年6月	市祭	提灯行列（小学校15000）、獅子舞（寺町、英町）、越中獅子舞（120）、祇園囃子（東馬場町）、京都金箔獅子舞、弥彦婆（高岡町娯楽会、仁随寺前）、祇園囃子手踊（幫間連義士）、義士行列（此花町青年団）、剣舞（山上町連中）	6.15「北陸毎日」 「北國」
大正13年9月	軍旗祭	仮装行列、安来節・小原節踊、芝居（兵卒出演新派喜悲團）	9.8「北國」
大正14年6月	市祭	提灯行列（小学校5000）、弥彦婆（石坂町、裏金屋町）、獅子舞（泉新町、助九郎町）、兼六囃子・桃太郎踊（主計町幫間連）、達磨行列（鍛冶片原町）、曲芸太鼓（上小川町）	6.15「北國」
大正15年6月	市祭	提灯行列（小学校5000）、四七士行列（新堅町校下青年団）、小原節踊（北安江町青年団）、弥彦婆（柳町、大衆免馬場町若連中）、悪魔弘（大野少年団）、獅子舞・剣舞（山ノ上町二丁目）、俄（宗叔町三番丁、大衆免片原町・下大樋町、大衆免馬場町）、剣舞（金城青年剣舞会）、山車（木町）	6.10、15「北國」
昭和2年6月	市祭	山車（木町一番丁）、祇園囃子（愛宕町）	6.15「北國」
昭和3年4月	招魂祭	獅子舞（百姓町）、元禄義士舞（上田町）、弥彦婆（古道木場場、大隅町青年会、河北郡若松青年団）、福の神（木ノ新保）、白波五人男（金沢素人歌舞伎連）、剣舞（三社青年団）、祇園囃子（新北栄楽会）、虫送り太鼓（近郷八か村）	4.19・20・21 「北國」
昭和3年6月	市祭	提灯行列（小学校6000）、山車（木町）、七福神（駅前若連中）、義士行列（新堅町校下青年団60）、山車（木町一番丁）、獅子舞（泉町交友会、淵上町、島田町、上山ノ上町）、剣舞（三社青年有志40）、弥彦婆（陸誠会・堀川角場・堀川間町、石浦新町金沢奉祝会）、祇園囃子（英町二丁目、下中島町娯楽会、大衆免片原町）、悪魔弘（北安江町青年会）、樽御輿（北安江町30）、屋台踊（木ノ新保四番丁）、万歳（金沢娯楽会20）、落語（娯楽研究会20、於兼六会館）、浪花節（石坂角場北都浪研会）、人形芝居（金沢文楽会）、芝居（金沢試演会、金沢素人歌舞伎連）、新内流（鶴賀新内同志会）、吹寄（木ノ新保北都娯楽会）	6.16「北陸毎日」
昭和3年11月	御大典	（詳細本文参照）	
昭和4年6月	市祭	提灯行列（小学校5000）、時代行列（矢口700）、樽御輿（三社青年同志会）、祇園囃子（淵上町笑楽会、五寶町、桜木町桜友会）、太鼓行列（北安江町）、野外劇（六斗林三丁目）、人形浄瑠璃（立川町）、移動野外劇・剣舞（大衆免青年会）、剣舞（裏安江町）、獅子舞（野田寺町昭和会、泉町、象嵌町）、吹寄（娯楽研究会）	6.7・15・16「北國」
昭和4年10月	招魂祭	獅子舞（宝船寺町）、虫送り太鼓（近郷七か村）	10.20「北國」
昭和5年4月	広告祭	広告行列（金沢広告協会）	4.21「北國」
昭和5年6月	市祭	提灯行列（小学校）、桃太郎歌舞伎（川上一帯）、樽御輿（長土堀）、弥彦婆（卯辰、大衆免、馬場一帯）、太鼓曲打（高道新町）、大俄（岩根町）、祇園囃子（若葉会、中橋町、西廓）、太鼓（中島町）、小原節・越中獅子（古道町）、獅子舞（大衆免、浅野町）	6.15「北國」
昭和5年7月	全国高等専門学校野球大会優勝凱旋祝賀	提灯行列（市民ファン）	7.30「北國」
昭和5年10月	招魂祭	獅子舞（象眼町）、渋川流剣舞（堀川）、祇園囃子（金沢笑楽会、浅野笑楽会）、おはら踊（越中八尾連）	10.20「北國」
昭和6年6月	片町道路舗装完成	祇園囃子、越中踊獅子	6.6「北國」
昭和6年6月	市祭	提灯行列（小学校）、越後獅子（岩根町）、獅子舞（山ノ上町、泉町、平折町）、歌舞伎（犀川菊香連）、七福神行列（平野町）、歌舞伎行列（上小川町）、八尾小原節（淵上町）、祇園囃子（英町）、踊獅子（川上新町）	6.9・11・15「北國」
昭和6年6月	自動車移動博覧会	新府フォードキャラバン隊（20台）	6.14「北國」
昭和6年10月	金澤水道局通水式	獅子舞（西堀川町、中橋町、中牧町、鍛冶町、英町、巴町）、祇園囃子（英町、岩根町、淵ノ上町）、弥彦婆（岩根町）、御輿行列（堀川角場）、移動歌舞伎（大衆免片原町、上小川町）、七福神踊（枝町）、小原節（春日町）	10.11「北國」
昭和6年12月	国防強固デー（北國新聞社主催）	国防大行進（各団体）	12.7「北國」
昭和7年4月	東京オセロ流行 石川南民健康運動	ロボット行列	4.19「北國」
昭和7年6月	歩兵第七連隊凱旋	提灯行列（北國新聞社主催）、旗行列自動車大行進	6.8・9「北國」

開催年月	祭事名	催し物（参加地域・人数）	出典
昭和7年6月	市祭	提灯行列（小学校6000）、太鼓曲打（長町七番丁昭和会）、獅子舞（材木町三昭会、上山ノ上町、象眼町、七区有志、大衆免）、軍神渡来踊（才川青年親睦会）、剣舞祇園囃子（十三間町若連中）、太鼓曲打（中島町竹俣会）、祇園囃子（金鎖会、栄楽会、矢口笑話会、木曾町誠美会、観音町）、加賀万歳（金沢娛樂会）、大庭悪魔弘（北安江町青年会）、弥彦舞（馬場二番丁金沢盟星会）、鞘当勢獅子（川上菊香連）、凱旋ダンス（材木町）	6.15「北國」
昭和7年10月	招魂祭	獅子舞、弥彦婆、軍国謳歌俄、剣舞、東廓・主計町踊り、能登島飯目節踊、安宅町閑所踊り、富山県城端町の麦屋節踊、福井県三国町三国節踊	10.20「北國」
昭和8年6月	市祭	提灯行列（小学校6000）観光行列（金城広告協会）、祇園囃子（古餌指町、富本町、材木町七丁目、木曾町、醒ヶ井町、春日町五丁目）、獅子舞（英町、大衆免中通、山ノ上町二丁目、象眼町、此花町）、人形浄瑠璃（山ノ上町三丁目）、弥彦婆（北安江町、木町二番丁、大衆免中通）、新歌舞伎桶狭間合戦（川上新町二丁目）、小原節（古道）、正米俵神輿・太鼓曲打（長町七番丁）、安来節踊（上田町）、小原節踊・麦屋節踊（大衆免中通）、小獅子舞（立川町）、出雲節踊（本多町川御亭）、剣舞祇園囃子（高岡町下藪ノ内）、武者囃式弥彦婆（鶯町）、演劇（上小川町）、満州行進曲舞（富本町）	6.14「北國」
昭和8年9月	招魂祭	祇園囃子（泉野町、長町六丁、富本町、英町、金沢娛樂会、上小川町、中橋町）獅子舞（木ノ新保三番丁）、子供獅子（下川除町）、小原節踊（野田寺町三丁目）、弥彦婆（上小川町、卯辰高町）	9.22「北國」
昭和8年12月	皇太子誕生	提灯行列（日本硬質陶器会社500）	12.25「北國」
昭和8年12月	皇太子命名祝賀	旗行列（金沢市主催）	12.30「北國」
昭和9年6月	市祭	提灯行列（小学校3000）、八尾獅子（八尾町）、麦屋節・小原節（古道町）、米俵御輿（長町七番町）、歌舞伎（川上新町）、人形浄瑠璃（立川町）、獅子舞（山ノ上町二丁目、上春日町、材木町七丁目）、祇園囃子（高岡町下藪ノ内、上田町、下小川町、御仲間町、古餌指町、谷町、富本町、小橋町）、弥彦婆（上田町、馬場五番丁）	6.10「北國」
昭和9年9月	軍旗祭	珍仮装行列（全連隊）	9.10「北國」
昭和10年6月	市祭	提灯行列（小学校）、獅子舞（山ノ上町、折達町、中牧町）、龍神輿（春日町）、樽神輿（長土堀）、祇園囃子（長町川岸、御仲間町、古餌差町、桜木ノ小路）、麦屋節踊（宗叔町二番丁）、新曲所作事（八坂町）、弥彦婆（堀川間ノ町、下浅野町、古道）	6.13「北國」
昭和10年4月	招魂祭	千代尼踊、輪島獅子舞、御祖獅子舞	10.15「北國」
昭和11年4月	商工祭	広告行列（金沢広告協会）	4.18「北國」
昭和11年6月	市祭	提灯行列（小学校5000）、祇園囃子（味噌蔵町中町）、獅子舞（折達町）、悪魔弘（大野町）、新所作事囃子（裏五十人町）、都踊（八坂町）、人形浄瑠璃（古道新町）、大獅子舞（富山県石動町青年団）、子供奴行列（五郎島町）	6.11「北國」
昭和12年4月	商工祭	広告行列（金沢広告協会）	4.17「北國」
昭和12年5月	蓮沼番部隊凱旋祝賀	大提灯行列（北國新聞社主催360団体30000）	5.28「北國」
昭和12年6月	市祭	提灯行列（小学校6000）、喇叭鼓隊（野町小学校青年学校）、獅子舞（山ノ上町、白菊町、戸水町、御所町）、祇園囃子・剣舞（柳町、田丸町、馬場二番丁、象眼町、馬場六番丁、裏安江町）、豊年踊（長田町）、都踊（備中町）、太鼓行列（大野町）、音楽隊（粟ヶ崎遊園）、宝船行列（粟崎町）	6.15「北國」
昭和12年12月	江湾鎮陥落	大提灯行列（小学校13000、北國新聞社主催160団体）	12.30「北國」
昭和13年6月	市祭	市中音楽大行進（北國新聞社主催）	6.16「北國」
昭和13年10月	武漢三鎮陥落祝賀	提灯行列（金沢市・北陸毎日・北國新聞社共同主催、男子中等学校、金沢運輸事務所）、旗行列（小学校9000、女子中等学校）	10.28「北國」
昭和14年6月	市祭	提灯行列（小学校7000）、	6.15「北國」
昭和15年6月	市祭	提灯行列（小学校4000）、獅子舞（大衆免）	6.15「北國」
昭和15年11月	二千六百年奉祝	北陸吹奏楽団連盟街頭行進、旗行列（小学校、中等学校）、獅子舞（淵上町）、尾山神社神輿（片町）、祇園囃子、仮装行列	11.11・12「北國毎日」
昭和16年6月	市祭	旗行列（小学校7000）、獅子舞（材木町青年団、小松郷交友会）	6.10・15「北國毎日」
昭和18年6月	市祭	旗行列（国民学校6000）	

した。そして昭和御大典では基本的には俄的趣向を是認したのである。

(二) くすぶりつつける市祭批判

大正一二年(一九二三)に始まった市祭であったが、既述のとおり、当初は敬神崇祖を大義の中核としていたが、在地神職層の批判の影響からか、翌年以降、金沢市の説明に変化が出てくる。

同一三年(一九二四)の市祭祀賀会では、相良市長は市制発布当時の上諭を読みあげ、また市祭の意義について「吾等は唯消極的に逝ける藩祖や父祖に對して微衷を捧げるためにのみ市祭を執行するのではない。(中略)積極的に隣保團體の實力を養ひ地方自治の情操を濃かにして都市計画の實施に善處し大金澤を建設することをお互に自ら心に誓つて其實現を期待せんことを欲するため」であると言明した(六月一日「北陸毎日」)。大金沢計画の実現へ向けた事業の一環として位置づけたのである。

大正一三年(一九二四)の市祭は金沢別院の上棟式が重なったこともあり市内は盛況をみせ、『米澤弘安日記』六月一日(五)条、さらに集客拡大のために同一五年(一九二六)には宣伝ポスターを市内外はいうにおよばず京都・大阪にも配布した(六月一日「北陸」)。

昭和三年(一九二八)の金沢市祭は、諒闇明けと五周年記念のために大々的に行うこととし、各方面に交渉をすすめた。目玉の催し物としてあがったのが金沢開始三〇〇年祭以後、途絶していた小立野十二

か月であった。大正一二年(一九二三)の堀川・卯辰の成功を受け、残る俄の名物の復活に向け地方有志や市会議員のなかで協議をすすめていたのである。市当局はこの催し物の意義について以下のようにコメントした。

「小立野の十二ヶ月は古く舊藩時代からの金澤名物でその頃における一ヶ年間の行事を扮装したもので、市としてはなるべくかうした物は永久に傳へたく、殊に古老の漸次少なくなり古實に通ずるものがないとなつた今日、これが再興を希望するので、毎年市祭毎に交渉してゐたが、何分多大の経費を要する關係上實現しなかつた」(昭和三年四月五日「北國」)

これから一二か月俄が金沢の名物として広く知られ、その途絶が危惧されていたこと、また毎年のように出演交渉をすすめていたが、経費の關係から実現にいたらなかつたことがわかる。

市と地元との交渉の結果、衣装代だけで七、八〇〇〇円を要するため地元だけの負担では実現困難との結論になり市から相当の補助を与えることとなつた(四月一日「北國」)。しかし、さらなる試算の結果、一日だけで二万円以上を要することから取りやめを決定した(五月二九日「北國」)。ちなみに県内で大規模な一二か月俄が催されたのは、昭和一〇年(一九三五)に、小松町で大火後の復興祭で同町青年団二六各支部が催したのが最後である(六月八日「北國」)。

一二か月俄の代案として急遽企画されたのが、卯辰山豊国神社境内を舞台に想定した桶狭間合戦の野外劇であった。演じたのは粟ヶ崎遊

園地大衆座の川上一郎一派であった（五月二十九日「北陸毎日」）。野外合戦劇導入の背景は、全国的な動向は把握できていないが、地元の情報としては大正一三年（一九二四）の陸軍特別大演習、同一四年（一九二五）以降の模擬戦など市街地などでの戦闘訓練の日常風景化の影響を想定できる^⑧。

野外劇の脚本は、粟ヶ崎大衆座文芸部の中井惣一が手掛けた。依頼をうけたものの、既存の桶狭間合戦記録は利家の基本情報が欠落していたために、巖谷小波、笹川臨風に指導を仰ぎ、また古老訪問や古書閲読を経て、史実を積み重ね、劇的脚色を加え完成させた（昭和三年六月一三・一四日「北國」）。

公演にさきだち、出演者が武者行列姿で練り歩いた。俳優は大衆座およびエキストラ七、八〇人をあわせた約一五〇人からなり、観客は数千人を数えた。午後一時から前座として粟ヶ崎少女歌劇一座の童話劇猿蟹合戦が催され、ついで午後二時から合戦が行われた（六月八日「北陸毎日」）。観客の評判は上々だったことから、粟ヶ崎遊園でも急遽追加公演されることとなった（六月一五、一七日「北國」）。

市祭が行列に与えた影響として注目できるのが祝儀集めの禁止である。昭和三年（一九二八）の市祭開催直前に玉川署は管轄内から出る一三の催し物に關し、「往々家々から祝儀を強請したりまたは祝儀を得んがため詐欺的手段を用いること」がある場合、詐欺罪などで処罰するとした（六月一三日「北國」）。同様の対処は同年一〇月の御大典でも（二〇月二六日「北國」）、さらに同七年（一九三二）の招魂祭で

も厳しくなされた（二〇月一九日「北國」）。再三の指導は祝儀集めの習慣が以前から続き、それゆえ途絶が困難であったことを物語る。

昭和四年（一九二九）以降の市祭の動向を追う。同年、市当局は、ひろく客を集め、経済を活性化させようと、獅子頭の図案を用いた宣伝ポスターを作り京都・大阪で広報を展開した（六月二日「北國」）。祭り当日は矢口が七〇〇人の大規模な俄（風俗時代行列）を繰り出し、また大衆免片原町青年会が移動劇を行った（六月一五日「北國」）。

不況が深刻化した昭和五年（一九三〇）には市祭によって「市中の景氣を復活」させようと、北海道・朝鮮・関東・関西を初め全国各地にポスターを掲げ宣伝したが（六月七日「北國」）、「人足浮かぬ市祭」「寂しい今日の人出」と見出しがかかげられるように盛り上がることはなかった（六月一五日「北國」）。

昭和初め、関係者は市祭の盛り上げに苦勞した様子が見て取れるが、その要因は不況だけにとどまらない。なぜなら、招魂祭の方は賑わいをみせていたからである。招魂祭の経過をみると、大正の末頃には町の参画がなかったが諒闇明けの昭和三年（一九二八）春には獅子舞（百姓町）、元祿義士舞（上田町）、弥彦婆（古道木揚場、大隅町青年会、河北郡若松青年団）、福の神（木ノ新保、白波五人男（金沢素人歌舞伎連）、剣舞（三社青年団）、祇園囃子（新北栄楽会）が繰り出し、花見シーズンと重なったこともあり、公園付近は大いに賑わった。

目玉となったのは、虫送り太鼓を打ち鳴らす太鼓行列で、泉町のほか、崎浦・戸板・浅川・三馬・富樫・川北・米丸・小坂の近郷八か村ほかがあわせて大太鼓四〇個を屋台に載せて、赤櫛・豆絞り・揃いの衣装でたたきながら大通りを練り歩いた。とくに諸江・浅野・田上などの各村の踊り狂って打ち鳴らす様は衆目を集めた。(四月二〇、二一日「北陸毎日」「北國」)。昭和四年(一九二九)一〇月招魂祭でも米丸・三馬・小坂・崎浦・浅川・川北・米丸各村二〇個の虫送り太鼓が市街地を練った(一〇月二〇日「北國」)。

このような盛況を鑑みると、市祭が低調気味であった要因は、人々の愉悦エネルギーの配分の問題にあったように思われる。市祭と招魂祭との統合意見が既述のとおり大正八年(一九一九)にもみられたように(五月一七日「北陸毎日」)、四月の招魂祭からわずか二か月後に催される市祭に力をそそぐ余裕がなかったと想像できる。

そして、もうひとつの要因は市祭批判の声の高まりである。昭和三年(一九二八)五月には一般市民の間では「全市民の祭禮とせず、あたかも尾山神社のみのお祭り、または市役所のお祭りのごとく考へてゐるもの多く、その結果、市祭廃止の聲さへあげ」られる状況であったという(五月一六日「北國」)。

このような動きに対し、同月、市当局は、市祭は「市民全体の祭禮で、昔の盆正月や豊年のやうなもので」あり、「老若男女文字通り總祭りの氣分を巷に満たしたい」とし、「全市の繁榮と發展を祈る」ために、「市民が和衷親睦」し、行樂をとにもすることが重要だと、藩

政期の祝祭を持ち出して、その意義を公式発表し(五月一六日「北國」)、さらに開催九日前の六月五日、市祭の盛り上げのために市当局は各町の総代を呼び出し、各戸全部に注連縄を張ることを指示した(六月一〇日「北國」)。

市の発表があつたものの、批判が収まることはなかった。昭和四年(一九二九)六月五日付「北國新聞」に「金沢市祭り 全然意味をなさず」なる厳しい論説が掲載され、「前田利家という人が金沢にとつてどんな功績があつた人であるかさへ甚だ疑問である。今日の金沢市民の大多数は金沢市今日の繁榮を利家の力であるとして有難がつて居る者は殆どないといつてよい」と、前田家に特化した敬神実践を否定した。

さらに昭和五年(一九三〇)六月の論説「金沢市祭と社會相」では当該祭は「相良市長の製造にかかる」もので、「社會生活の必然が此の市祭を生み出したのでもなんでもなく、反對に此の市祭によつて金沢市民の社會生活を緊密に結び付けうやうと目論んだ一つの事業であるらしい。その目的が達せられて居るか居ないかは知らないが、察するに成功だとは思はれない」とし、各町には氏神が鎮座しその祭りが氏子によつて長い歴史をもつて営まれてゐるのに対し、当該祭の場合、「金沢市民の生活とは、直接には何等の交渉をも持たない市長が、尾山神社に参詣して祝詞を朗讀したところで、市民の胸にひんと來る筈がない」と否定した(六月一五日「北國」)。また、市祭に対し、市民の間には尾山神社の祭礼または市役所の祭として他人事視するもの

があり、本当の総祭化のためには市内の神社を統一合祀すべきだという一部の唱道もあったという（六月一日「北國」）。

これらの動きは大正八年（一九一九）から表面化した在地神職層の批判が巷間の一定数の賛同を得ていたことを物語る。しかし、昭和六年（一九三一）以降になると、これら批判の声を新聞紙上で認めることはできない。あきらかに同年の満州事変を境に神職たちは声を封印したと思われる。事変後は、戦勝祈願が盛んとなり、敬神観念の浸透がさらに進んだとされる^⑧。石川県内の場合、祈願祭を行った県内神社が一四五件を数えた^⑨。その後、戦意高揚の手段として神社参拝が義務化されていくなか、市祭批判は体制批判につながるとみなさられるようになったのである。

（三）不況脱出と九師団凱旋

市祭がようやく盛り上がりを見せるのは昭和七年（一九三二）である。表二から明らかのように各町の催し物数が急増する。参加意欲の高揚をもたらした背景は、不況から抜け出ようとする意識が強まったとともに、身近な状況として、同七年（一九三二）春季開催の産業と観光の博覧会に向けて、同六年（一九三一）には競って幹線道路の舗装がすすみ（八月一日「北國」）、また一〇月に上水道が完備されるなど都市インフラが急激に整備された事情もあろう。

そしてもうひとつは満州事変・上海事変の勃発である。日々の生活の中で戦争を強く意識するようになった。国防意識高揚の扇動を率先

して行つたのが新聞社である。昭和六年（一九三一）一二月六日、北國新聞社は国防強調デーを企画し、「国防大行進」を実施した。行列は音楽隊と騎兵隊の先導のあとに在郷軍人会・青年訓練所・青年団・学校など各種団体からなつた。各団体は喇叭を鳴らし戦友歌とうたい、また飛行機・タンク、桃太郎などの軍国主義的な造り物を曳行した（一二月七日「北國」）。

翌七年（一九三二）六月八日夜、金沢は昭和御大典以来の沸騰をみせる。上海事変で激闘した九師団凱旋祝賀のため北國新聞社が提灯行列を主催し、また翌九日には西洋料理同業組合が旗行列・自動車行進を行つた。話題を呼んだのがカフェーの女給三〇〇人による行進だった（六月八日「北國」）。女給の参加は最初で最後となつた。

新聞社主催の提灯行列に参加したのは一五〇団体・三万五〇〇〇人で、最初に野村練兵場に集合し、その後、市街地を練つた。各団体は造り物・大行灯を目印とし、高張提灯を掲げ、屋台を曳き、仮装を凝らし練つた。

造り物はタンク・飛行機・軍艦・巨砲など兵器や軍人姿などをトラックなどに載せたものが多く、軍国主義の色合いが強かった一方、仮装は、たとえば尾張町の場合、大達磨・モダンガール・武士・女学生などを装い、また岐阜提灯に彩られた山車の上に主計町の芸妓数十人が乗り祇園囃子を奏で、さらに同芸妓が万歳、節分の豆撒きなど一二か月俄の趣向を凝らした扮装で練り（六月一〇日「北國」）、また下山ノ上町は藁獅子・花傘・黒ん坊・福助などに扮し歩いた。山ノ上町

の行列を見た人々は「抱腹絶倒」したという（六月一日「北國」）。

つまり、九師団の凱旋祝賀は、人々に軍国主義への同調を強くうながした以上に、笑いをもって不況からの脱出をはかろうとする、かつてない高揚感を人々に与える機会となったのである。

第一次大戦以来の久々の九師団の出兵・凱旋がもたらした高揚感の大きさを物語るのが子供たちの遊びである。戦争ごっこや肉弾三勇士遊びが流行し、さらに凱旋大提灯行列をまね、提灯行列が流行し、提灯の代用品として板に釘を打ち蝋燭をさして練り歩く子供まで出現し、各学校が防火上の観点から指導を行った（六月十八日「北國」）。

凱旋の興奮はその後もさめることはなかった。昭和七年（一九三二）六月の市祭は「快晴と凱旋気分で大賑ひ」となり（六月十五日「北國」）、同年一〇月の招魂祭は「満州國承認、上海事變の興奮」により「例年に見ぬ高潮を示し」、祇園囃子・獅子舞・弥彦婆のほか、軍国謳歌の俄や剣舞など今まで以上に多くの行列が繰り出した（一月二〇日「北國」）。

（四）〈郷土〉を取り込む都市祝祭

一九二〇年代以降の祝祭状況をみてきたが、行列に焦点をしぼり、あらためてその様相を整理すると、従来と比べ大きく変質したことがわかる。

変化の特質の第一は、提灯行列の恒例化である。既述の通り、提灯行列はあくまで戦勝祝賀や皇室行事などの国民的祝祭に催される臨時

的形式であったが、敬神観念教育という目的から小学生の合同提灯行列が市祭に組み込まれ恒例化した。

第二は俄の仮装提灯行列への吸収である。市祭での催し物の実施状況をみると、獅子舞や祇園囃子が多く、俄に関しては、大正一三年（一九二四）の義士行列（校下青年団）、同一四年（一九二五）の兼六囃子・桃太郎踊（主計町幫間連）、達磨行列（鍛冶片原町）、昭和五年（一九三〇）の大二輪加（岩根町）という具合に各一団体程度しか参加しなくなった。対して、新聞社主催の提灯大行列は実質夜の俄というべき様相をみせるようになった。昼の俄は提灯行列へと吸収されてしまったと理解できる。

第三に従来、行列の趣向は明治期、さらに藩政期にさかのぼる内容を踏襲することが一般的だったが、大正期に入ると、演劇・太鼓芸・民謡舞踊・越中獅子など新規の催し物がつぎつぎと導入されたことをあげられる。

新規の内容をみると、まずは演劇である。昭和三年（一九二八）の野外劇を契機に、同四年（一九二九）に野外劇（六斗林三丁目）、移動野外劇（大衆免青年会）、同五年（一九三〇）の桃太郎歌舞伎（川上一帯）・歌舞伎（犀川菊香連）、同六年（一九三二）の移動歌舞伎（大衆免片原町、上小川町）、同八年（一九三三）の新歌舞伎桶狭間合戦（川上新町二丁目）、同九年（一九三四）の歌舞伎（川上新町）など、屋外での移動演劇が盛んに催されるようになった。

つぎに太鼓芸である。太鼓に特化した大掛かりな催し物は、明治四

二年（一九〇九）の行啓での近郊集落の虫送り参加を、市街地での披露は大正四年（一九一五）の御大典の際に金沢毎日新聞社主催の太鼓行列を催したのをそれぞれさがけとする（一月二一日「北國」）。

これらが刺激となったのだろう。その後、大正十一年（一九二二）の招魂祭で栄町が、同一四年（一九二五）の市祭で上小川町が曲打ちをそれぞれ行う。さらに昭和三年、四年（一九二八、九）の招魂祭で大掛かりな虫送り太鼓行列が久々に繰り出し、また市祭では同四年（一九二九）以降、太鼓芸が盛んに催されるようになった。戦後の百万石祭における児童の太鼓行列の系譜はこの流れに位置付けられる。ちなみに能登の羽咋郡では同六年（一九三一）から太鼓打ち競技が祭礼余興として人気を集め、さらに県内各所で太鼓芸が隆盛していったが^⑧、そのきっかけは金沢における太鼓芸の出演増大にあったと想定できる。

つぎに民謡舞踊である。民謡舞踊とは民謡にあわせて新作の振り付けで踊る芸能である。以前、検討したように金沢では芸妓が大正一〇年（一九二一）頃から盛んに演目に取り入れた^⑨。当初、人気を集めたのが小原節と安来節である。安来節は大正一〇年（一九二一）三月に金沢の寄席の一九席で男装・女装をして躍ったことから人気に火がついた。また小原節は大正二年（一九一三）の富山の共進会での出演以降、各地に人気ひろがった。昭和七年（一九三二）の招魂祭ではほかに石川県から能登島鰻目節踊、安宅町関所踊、富山県城端町から表屋節踊、福井県三国町から三国節踊が繰り出しており、民謡舞踊が

祝祭の主役といえるほどの人気ぶりをみせた。

つぎに越中・能登など金沢以外からの獅子の出演である。加賀獅子以外の獅子舞を金沢の人々が目にするのは大正御大典で中越両派郷友会が越中獅子を舞ったことがさがけである。見物人は「日ごろ見慣れたる當地方の獅子とは異なり衣裳綺羅美やかなる少年連が音頭に併せて手振り足並面白く踊り廻る」姿に「非常の喝采を博し」た（一月一六日「北陸」）。その後、大正十一年（一九二二）に羽咋町の能登獅子が、また同一三年（一九二四）の市祭では総勢二〇人からなる越中獅子二組、京都の金箔獅子が舞った。

日ごろ見慣れない獅子が金沢の人々に大きなインパクトを与えたことは金沢への伝播に見て取れる。市祭の状況を見ると、昭和五年（一九三〇）には古道が越中獅子を、同六年（一九三一）には川上新町が踊獅子を、同八年（一九三三）には立川町が小獅子を舞った。

最後に第四の特質として参加者の変質である。町的地縁組織にかわって、遊芸サークル的な団体が目立つようになる。その傾向は大正御大典あたりからみられるようになり、市祭では同一三年（一九二四）に、高岡町娯楽会（弥彦婆）、幫間連義士（祇園囃子手踊）、昭和三年（一九二八）に、金沢娯楽会（万歳）、娯楽研究会（落語）、石坂角場北都浪研会（浪花節）、招魂祭では、同三年（一九二八）に金沢素人歌舞伎連（白波五人男）などがみえる。大正十四年（一九二五）市祭の兼六囃・桃太郎踊の場合、「流石に幫間連の演る事だけに看る者をして抱腹絶倒せしめ」たとみえ、笑いを専門とする玄人が参加し

たとわかる。

また郡部からの参加は大正十一年（一九二二）一〇月の招魂祭での石川郡弓取村下安江（弥彦婆）をさがげに、昭和三年（一九二八）の同祭の河北郡若松青年団（弥彦婆）、近郷八か村（虫送り太鼓）など、招魂祭での参入が頻繁化する。市祭では大正十五年（一九二六）の石川郡の大野町少年団（悪魔払）を最初とし、昭和十一年（一九三六）に同郡大野町（悪魔払）・五郎島町（子供奴行列）などがあいつぎ参加した。奴行列が単独の催し物として街路を練るのは実質このときが最初であった。後述のとおり、そのインパクトが大きかったのか、戦後には定番の催し物となった。

金沢の都市祝祭はあたかも各地の郷土芸能大会の様相を呈するようになったと指摘できるが、その動向を象徴する出来事として注目したい事業が、昭和御大典にあわせて催された北陸毎日新聞社主催の奉祝郷土芸術歌踊大会である（十一月一〇、一五〜一八日「北陸毎日」）。大会の出演者は事前の投票によって決められた。その結果は表三のとおりである。金沢在来の獅子舞や弥彦婆は少なく、民謡舞踊や盆踊、新作舞踊などが全県レベルで人気を集めていたとわかる。

大会に出演したのは人気投票上位七団体である。一位は四万七〇〇〇票を集めた翁獅子で、二位は倉庫精練有志考案の羽二重踊で、後者は裾長い富士絹色の揃い衣装、薄水色紋羽二重の帯で着飾り、繭を中央に桑の葉を配し菊の花で飾った花笠をさす八人の踊り子が、二〇人の音頭にあわせ踊るものだった。

表3 奉祝郷土芸術歌踊大会向け人気投票結果 昭和3年11月10日「北陸毎日」 太字は出演団体

芸能分類	投票芸能・団体
獅子舞	翁獅子 （金沢市百姓町）、 姫獅子 （河北郡小坂村浅野）、獅子殺し舞（羽咋郡中邑知村）、熊獅子（金沢市堀川淵上町）、高島獅子舞（鹿島郡御祖村）、泉獅子舞（金沢市泉町）、黒氏獅子舞（鹿島郡鳥屋村）、黒獅子舞（金沢市鍛冶町）、石同獅子舞（松任町石同）、祖浜獅子舞（鹿島郡祖浜）
盆踊	下柏野盆踊 （石川郡柏野村）、下ノ江盆踊（能美郡根上村）、打木盆踊（石川郡安原村）、川尻盆踊（河北郡井上村）、かんこ踊（石川郡白峰村）、荒屋ジョンカラ踊（石川郡柏野村）、動橋盆踊（江沼郡動橋）、二塚盆踊（石川郡二塚村）、大野盆踊（石川郡大野村）、徳光盆踊（石川郡御手洗村）
民謡舞踊	七尾まだら節 （七尾町）、山代温泉節・踊（山代温泉）、山中節・踊（山中温泉）、能登杜氏節・踊（珠洲郡）、輪島まだら節（輪島町）
新作舞踊 他	羽二重踊 （金沢倉庫精練有志）、 鶴来踊 （鶴来町）、 渋川流剣舞 （金沢市三社町）、奉祝踊（金石町湊町）、栗ヶ崎行進曲・ダンス（栗ヶ崎遊園）、九谷庄三節・踊（能美郡寺井）、常德改良踊（河北郡倶利伽羅村）、ラジオ踊（金沢市六斗林演芸部）、長谷田踊（江沼郡河南村）、栗田音頭・踊（石川郡富奥村）、六所囃子（鳳至郡中居村）、錦紡踊（金沢市錦華紡績）、元祖弥彦舞（金城奉祝会）、弥栄節（羽咋郡富来村）、一木扇子踊（石川郡一木村）、加賀鳶踊（金沢市笹下町）、花月囃子・踊（金沢市枝町千鳥会）

三位の鶴来踊は昭和二年（一九二七）一月に地元の地搦節に振付を加えたもので、地元の芸妓が温習会で舞ったのが披露の最初である。ほか七位までは、姫獅子、渋川流剣舞、下柏野盆踊、七尾まだら節が選ばれた。一七日の大会当日、観客は五万人を越えたと新聞は報じた（一月一〇、一四、一五、一八日「北陸毎日」）。なお、同様の大会は昭和十一年（一九三六）四月にも丸越六階ホールで催された北國新聞社主催郷土芸術大会があり（四月五日「北國」）、戦前期に郷土芸能が人気を集めていたとわかる。

これらの芸能が祝祭をよりあげた要因は、まずもって郷土芸能が、地方が誇るべき文化として評価された経過を指摘できる。石川県を例にとれば、評価の先駆となったのが野々市の盆踊りである。

明治三四年（一九〇一）八月に風俗衛生上の弊害から県警察は盆踊りを禁止するように通達した（八月九日「北國」）。それが復活するのが明治三十九年（一九〇六）である。野々市出身の学生からなる「自然の聲俱樂部」が復活をはかり、その後、地元青年団の国民舞踏研究会に活動がひきつがれた。

大正九年（一九二〇）頃には各地で盆踊り評価の聲が高まったことを受け、同一年（一九二二）、県は明治期の禁止令を撤廃し（七月二九日「北國」）、以後、「民衆娯楽・民主芸術・郷土芸術」などの言辞をもって推奨されるにいたった。

もうひとつの要因は提灯行列の参加状況から読み取れる。大正御大典の頃から企業・工場の労働者が数多く行列に参加するようになった

と既述した。提灯を掲げた労働者の多くは地方出身者でなかったろうか。

つまり、都市の経済・産業を出郷者が支える構造の拡大により都市と地方の結びつきが強まることで、地方の芸能は、出郷者にとって郷愁の念を喚起する疑似的郷土として、また都市住人にとって野趣あふれる刺激的な異文化として消費されるようになったのである。

昭和初期、祝祭の催し物の人気は演劇や郷土芸能などへ移行し、そして遊芸サークルの参加が増加したわけだが、これらの動きに通底するのは都市祝祭の参加意義の変質である。つまり、人々にとって祝祭とは非日常性への没入機会ではなく、芸能者として視覚化される機会として意義が見いだされるようになったのである⁹⁵。金沢の町が地元の獅子をやめ、躍動感あふれる越中獅子を演じたことを記述したが、その参加意義からして自然の流れであったといえる。

六 戦時体制の拡大と祝祭行列

（一）商工祭と広告行列

昭和以降における行列の大きな変化として郷土芸能のあいづぐ参入を指摘したが、もうひとつの大きな変化として指摘できるのは広告行列の登場である。

金沢での商品宣伝を目的とした行列は明治三二年（一八九九）の旧藩祖三〇〇年祭で各店舗が仮装を凝らした「広告踊・広告隊」を催し

たのをさきかけとする。祝祭見物客を目当てに卯辰山に煙草のヒーローの巨大広告が設置されるなど『高德公三百年祭画卷』金沢市立玉川図書館蔵)、当該祭は広告事業との連携をはかる画期となった。

全国的に「広告行列」がひろがるのは日露戦争の頃からである。国立国会図書館デジタルライブラリーで検索すると、明治三十七年(一九〇四)・茅野廉太郎『動中静観』(東亜堂)に「東京にありふれたる廣告行列」とみえるのが早く、同時期から増加していったとわかる。

その起源については明治三十八年(一九〇五)「大阪の東西屋」によれば⁸⁶⁾、もともと東西屋は拍子木を叩いて広告していた程度だったのが、楽隊が入ってから広告行列が盛んになったとあり、広告行列は楽隊がうみだした行列形態であったと判明する。目新しい行列の見物を大衆は楽しみとし、また長崎医学専門学校の運動会ではそのパロディが余興として登場するなど⁸⁷⁾、祝祭の催し物としても人気を集めるようになったが、金沢では日露戦争以降、その登場を確認できない。

金沢で広告行列が大々的に繰り出す発端は昭和五年(一九三〇)四月二〇日に「廣告は不況を打開す」を目的に金沢広告協会が主催した広告祭である。出羽町練兵場を出発地とし、九〇店の珍趣向を凝らした造り物、サンドイッチマンが市街地を練り、二四日まで大売り出しを行った(四月二一日「北國」)。

このような大規模な広告行列は大正一三年(一九二四)に京都で大阪毎日新聞紙百万突破を祝賀し五〇台の自動車行列を催したのがさきがけであり、その後、昭和三年(一九二八)に名古屋市で商工会議所

等が主催で商品広告行灯行列が催され、時おかず、広島市、さらに翌四年(一九二九)に静岡市など、全国各地にひろがっていった⁸⁸⁾。

かかるイベントが全国各地で企画されたのは、販売方法が、商品の価値が顧客との間の交渉で顕在化する座売りから、事前に可視化された陳列売りへ変質し、それにより都市空間が広告や商品陳列でおおわれる広告空間・消費空間へと変貌していったからである。とりわけ、昭和恐慌当時は、景気冷え込みの打開策として広告の強化が求められたことで、都市空間は激しい広告合戦の場と化していった。

たとえば、昭和七年(一九三二)二月の新聞は、街頭は屋上看板・軒看板・吊看板・立看板など「看板のオンパレード」となり、また一〇年前までなかった電灯やネオンサインで照明したモダン看板も年ごとに増え、赤玉・美人座の電灯証明や魚反食堂のネオンサインが話題を呼んだと報じている(二月一七日「北國」)。商品広告のオンパレード空間となった都市が、次なる手として衆目を効率的に集められる行列に目をつけたのは当然の流れだった。

第四回目の開催となる昭和八年(一九三三)には市祭と同時開催となり各種行列のひとつとして広告行列が催された。従来の自動車利用を禁じたため大掛かりな造り物は出なかったが、四〇数店が屋台造り物を荷車に載せ曳いて練った(六月一五日「北國」)。

昭和十一年(一九三六)四月、広告祭は金沢商工祭(一八〇二〇日)へ発展する。主催は金沢の工芸品などの販売拡大を目的に同九年(一九三四)四月に発足した金沢産業協会である。開催の大義は「隣

接町村編入によつて建設された大金澤市の目ざましき商工業の躍進、発展を讃仰する」ことにあり（四月一八日「北國」、また祭典は中島徳太郎同会会長を祭主とし、前田利家に祈願し、商工界の物故先覚者の偉業を敬仰し、金沢の発展を祈願することを趣旨とした点、趣旨・次第は市祭の枠組みを転用拡大したものであった。

同祭の目玉として当初計画したのが芸妓の街頭行進だった。しかし、県保安課から禁止の命令が下されたため、協会は狼狽を極め、保安課に強く了解を求めたが（四月一〇日「北國」、要望が認められず、結局、兼六園長谷川邸跡に設けられた屋外舞台での手踊公演にとどまった（四月一二日「北國」）。

当日は、金沢広告協会の広告行列をはじめ、菓子業者二七〇名が造花を装飾したトラックに分乗し、花より団子、菓子報国のスローガンを表した大行灯を満州行進曲にあわせ繰り出したり、また自転車業者は牛若弁慶、白波五人男などの扮装で三輪自転車を徐行したりするなど各業界団体が仮装行進を催した（四月一日「北國」）。

翌一二年（一九三七）の商工祭では松竹座が大坂夏の陣をテーマに木村重成・真田幸村などの鎧武者に扮するなど、数十店が独自に造り物や仮装を凝らし広告行列を行った（四月一九日「北國」）。商工業の躍進・発展を大義とする祝祭だが、行列は実質、伝統的な俄的趣向を表面化させたものとなった。日常からの解放感をもたらす、慣れ親しんだ俄的世界こそが人々の消費意欲を喚起すると企図したのである。

（二）否認される祝祭性

昭和一二年（一九三七）一月、第二次上海事変が勃発し、日中の激しい交戦状態となる。同年五月二七日、連沼蕃部隊の凱旋を祝う北國新聞社主催の大提灯行列が催され、宮市大丸バンドが伴奏し、三六〇余の団体、三万人が参加した（五月二八日「北國」）。

久々に戦勝に都市が沸いたのが江湾鎮陥落の際であつた。同年一月二七日、陥落の知らせを受け、市内小学校五年以上男児一万三〇〇〇人の提灯行列が行われ（一〇月二九日「北國」）、さらに翌日、北國新聞社は大提灯行列を主催した。校下防護団・青年学校・婦人会・町会・組合・会社団体が紅提灯をもって市街地を練り歩いたが、その行列について、新聞は「乱舞の造り物、仮装陣」「アツと言はせた各町各様の趣向」という見出しを掲げたように、昭和の御大典以来の久々の俄的提灯行列となつた。

ただし、行列の趣向は、全町青年団は日の丸法被を着こみ、東西北廓の芸妓は白エプロンに襷がけの国防夫人の正装をし、主計町芸妓はタンバリンを打ち鳴らし、各町は太鼓で囃し、重砲・高射砲・タンクなどの造り物を曳き、樽神輿をかつぐなど笑いの趣向が消え、軍色が強く出たものとなった（一〇月三〇日「北國」）。戦争に対し人々がかつてない緊迫感を抱くようになったことがわかる。

戦局が深まる中、俄的行列はまもなくして規制されることとなる。昭和一二年（一九三七）一二月七日、第九師団司令部が、「長期戦を予想される今日、戦勝毎に行はれるお祭り騒ぎの催しは戦時下におけ

る銃後のとるべき道でない」「犠牲者に對する慰霊、遺族に對する慰問激励」を考慮してほしいと意向を発表した（二月八日「北國」）。これを受け、県・市・会議所は南京陥落祝賀会を市公会堂で厳粛に行うこととした（二月八日「北國」）。

自肅の流れを受け、同月一日に催された提灯行列の参加は官県立学校及び町内有志にとどまった（二月一日「北國」）。また翌年以降の市祭も様相を変えていく。昭和十三年（一九三八）開催時は、余興らしきものは、青年日本の意気を示さすことを趣旨とする柔道と剣道の奉納武道大会と自転車競走大会だけとなった（六月十五日「北國」）。このとき同祭最大の催し物となったのが北國新聞社主催の市中音楽大行進であった。市内各学校のラッパ、鼓隊や学校青年学校・青年団・会社などでそれぞれ編成するブラスバンドの二〇団が参加した（六月二日「北國」）。

昭和十三年（一九三八）一〇月二七日、武漢三鎮完全陥落の公報が発表される。前年、祝祭催し物の抑制を司令部から要請されていたが、再び大規模な提灯行列が繰り出した。事業は金沢市・北陸毎日新聞社・北國新聞社の主催で、七万人が一六校下ごとにまとまり行進した。新聞は、これまでのように「千金惜まぬ造り物、假装に意匠の全魂を傾け」ることを禁止されたため、参加するのは提灯ばかりであったことから、その様子を「雄々しさ」「偉大さ」であふれかえっていると賞讃した（一〇月二八日「北國」）。

この陥落祝賀の盛り上がりの影響だろう。昭和十四年（一九三九）

の市祭では同一二年（一九三七）より一〇〇〇人多い七〇〇〇人の児童が提灯行列を繰り出した（六月六日「北國」）。同年の市祭で留意すべきは従来なかった催し物が実施されたことである。

北國新聞社は従軍将校の労苦をしのび、肉体と精神を鍛錬するために制服制帽・巻脚絆・背囊・帶剣・担銃の姿の七人が一隊となり市内を競走する金沢市内青年学校対抗青年武装行軍競走を実施した（六月一日「北國」）。競争には二校一五〇人が参加した（六月四日「北國」）。軍事教練延長の催し物が街路でひろげられる祝祭の光景を、新聞は「時局色豊かな金澤市祭」と報じた（六月十五日「北國」）。

戦前期金沢において多数の催し物が繰り出す最後の祝祭となったのが昭和十五年（一九四〇）十一月の紀元二六〇〇年奉祝である。同一三年（一九三八）市祭の目玉となったブラスバンドの行進を踏襲し、北陸吹奏楽団連盟の行進が催され、また旗行列（小学校、中等学校）が繰り出した。また「三年振に余興の許された日」であることから獅子舞（淵上町）、尾山神社神輿（片町）、祇園囃子、仮装行列など、伝統的な催し物が同一二年（一九三七）の市祭以来久々に登場した（一月一、二日「北國毎日」）。

昭和十六年（一九四一）以降、小学生参加の催し物は夜の提灯行列から日中の旗行列に変更する（六月十五日「北國毎日」）。同一七年（一九四二）同祭での行列は認められず、同一八年（一九四三）の旗行列をもって催し物は中止となり、同一九年（一九四四）の市祭は神輿のみが巡行した。

(三) 軍国主義と獅子舞

明治四二年(一九〇九)の行啓以降、獅子舞は金沢の名物として価値づけられ、とくに大正期には催し物の中心となったことを既述したが、昭和一一年(一九三六)以降の祝祭縮小の動きのなか、獅子舞は新たな文脈化がすすめられていく。

昭和一二年(一九三七)の市祭には、郷土出身の林銑十郎内閣の発足にあたりその祝賀として獅子頭を贈ったことが話題となったことから、獅子頭五〇点の展覧会が宮市大丸で同時開催された(六月一二日「北國」)。つまり、芸能から分離し獅子頭自体の文化財的価値が発信されるようになったのである。

昭和一三年(一九三八)八月には富士山麓山中湖畔で催された日独青少年会主催のヒットラー・ユーゲント歓迎野営に参加した金沢市少年団連盟が贈呈用の獅子頭や道具で獅子舞を演じ、喝采を浴びた(八月二四日「北國」)。

文化財としての価値は集団の精神的支柱へ昇華していく。昭和一五年(一九四〇)には材木町青年団が二六〇〇年記念にあわせ、団旗に代えて獅子頭を青年士気高揚のシンボルとして仰ぐために、その制作をすすめた⁹⁸⁾。

制作にあたっては郷土史家の大友圭堂や東京美術学校名誉教授の島田佳矣に相談し、福徳円満な相貌に澆渌の士気をはらむことを表現の理念とし、原型を大樋焼の名匠中村良孝に依頼し、用材として白山山麓中宮の山林から樹齢一〇〇年の桐材を入手し、向正運が彫刻に着手

した。蚊帳の文様は獅子の巻き毛に牡丹の慣例をやぶり、時局色を帯びさせ、島田逸山が牡丹に桜を加味し、木刀・薙刀などは青年団員が自作した。完成後は護国神社の祭礼や国家的奉祝行事に舞うこととした(一月五日「北國」)。

昭和一四年(一九三九)九月の上鍛冶町の紹介記事には「町民が祭禮毎にこの獅子頭を眺め一層その町精神に活を入れるのだ、この獅子頭に無言の教訓を受けてゐる」とみえ(九月一七日「北國」)、祭礼の獅子飾りに挙国一致体制の強化を促す意義を見いだそうとする動きもあった。尚武の芸能であるゆえ、金沢の獅子は軍国主義の象徴として位置付けられたのである。

このような再評価の影響から市祭での催し物では獅子舞のみの参加が許されるようになる。昭和一五年(一九四〇)には、大衆免の板獅子が登場し、神前で舞い、神輿渡御に従った(六月一五日「北國」)。同一六年(一九四一)には小松郷交友会と材木町のそれぞれ獅子が繰り出した。前者の獅子は加賀獅子と別系統の能美郡小松町の獅子であり、後者の獅子は既述の通り青年団の結束のために新作したものであるが、その名称は興亜獅子と付けられた(六月一五日「北國」)。

七 カーニバルとパレードの時代

(一) 戦後祝祭の概況

金沢最大の祝祭であった市祭は昭和二〇年(一九四五)まで続いた

が、既述のとおり、催し物は同一六年（一九四一）に獅子が神輿をお供し、また大規模行列は同一八年（一九四三）の市祭で市内国民学校初等科および高等科児童六〇〇〇人が日の丸旗を手にし旗行列を催したのが最後となった（六月一三日「北國毎日」）。

ふたたび都市が祝祭で賑わうのは昭和二年（一九四六）六月の「尾山まつり」（以下尾山祭と記載）を嚆矢とする。戦後、神道指令により神社行事を公的機関が主催することが禁じられたことにより、尾山祭奉賛会を組織し、市祭の代替行事として催した。

奉賛会の構成メンバーは市長・助役や市内連合会長からなり、実質公的行事としての性格をもった。市民も以前の市祭と変わらないものととらえていたことは、新聞が尾山祭を市祭の「改称」として報じていることからうかがえる（六月一五日「北國毎日」）。

それから二か月後、敗戦を象徴する行列が催される。同年八月一日、県下在留朝鮮人一〇〇〇人が八・一五解放記念人民大会のあと市中行進を行った（八月一六日「北國毎日」）。

以後、昭和三〇年（一九五五）までの祝祭行列をまとめたのが表四である。行列の実施機会を整理すると、戦前の市祭・商工祭の後継行事たる尾山祭・百万石祭、商工祭の縮小版といえる各種商業団体・商店街の宣伝行事、学校祭、氏神祭礼の四種に大別できる。

行列の趣向をみると、昭和戦前期の流れをひきつづぐものが大半であり、とくに昭和十二年（一九三七）一〇月の江湾鎮陥落祝賀をもって途絶していた俄的行列は封印を解いたようにつぎつぎと実施されたこ

とは注目できる。人々にとって日常からの解放を味わえる最良の参加様式が俄であつたとわかる。

大正終わり以降、人気を集めた郷土芸能については、街頭での上演はなくなるが、昭和七年（一九五二）の百万石祭では尾山神社境内で協賛事業として野々市町じよんがら踊が青年団により披露され（四月二八日「北國」）、同三〇年（一九五五）の同祭では兼六球場での大カーニバルなる催しで、珠洲市上戸町の能登杜氏酒造り唄や輪島市の三夜踊、富来町のキリコなど県内各地の催し物が披露され（五月四日「北國」）、戦前期以上に盛況をみせた。

行列の多くはその後、漸次、途絶してしまうが、現在に連綿と続くものとして注目すべきは、百万石祭の奴行列と大名行列、金沢美術工芸大学美大祭の仮装カーニバルである。以下、戦後を特徴づける行列としてこの三種を概観する。

（二）奴行列の定番化

奴行列が繰出すのは昭和二年（一九四七）六月一四日の尾山祭が最初である。神輿渡御の先導役として大野町青年団員二〇人からなる奴が練り、ほかに二塚、鞍月、菊川、栗ヶ崎四校下の青年団の獅子舞、鳴和青年会の越中獅子、長町七番丁の俵神輿が繰り出し、夜には四高生がストーム行事にあわせ仮装で歩いた。翌一五日には石川県児童文化協会の総勢九〇七〇人からなる子供太鼓行列が催された（六月一三、一五日「北國毎日」）。

表4 戦後の祝祭行列

年月	行事名	行列催し物	出典
昭和21年6月	尾山まつり	仮装行列（四高生）、加賀獅子（菊川町青年団70、二塚、鞍月、粟崎）、越中獅子（鳴和青年会）、奴行列（大野町青年団20）、俵神輿（長町七番丁昭和会）、子供太鼓行列（970）	6.13-15「北國毎日」
昭和21年8月	8.15解放記念人民大会	市中行進（県下在留朝鮮人1000）	8.16「北國毎日」
昭和22年5月	憲法まつり	トラック祇園囃子（東西北郷）、囃子（東洋綿花）、獅子舞（畝田壮年団、鞍月壮年団、第三警防団・金沢輪業青年隊・蚊爪壮年団、穴水町壮年団）、自転車合唱隊（金城高女）、バンド（金商）、神輿（長坂青年団、横安江町青年団、米丸青年団、無量寺青年団）、花トラック（専売局、石川県繊維産業）、音楽トラック（日産自動車）、太鼓行列（上本多町少年団、味噌蔵町少年団、民主党・八坂少年団、新笠町少年団）、	5.5「北國毎日」
昭和22年6月	尾山まつり	奴行列（大野町青年団）、獅子舞・小原節（富山県石動町）、獅子・悪魔弘（金石、栗ヶ崎、大野、菊川、鹿島郡御祖村、羽咋郡志雄、日本電気冶金）、祇園囃子（石坂）、鬼踊（近岡少年団）、仮装行列（県農業会他）、子供太鼓行列（石川県児童文化協会）	6.15「北國毎日」
昭和23年4月	商工祭	広告行列（トラック15、徒歩100）、奴行列（大野町青年団）、	4、25「北國毎日」
昭和23年6月	尾山まつり	奴（大野町青年団）、奴・樽御輿（栗ヶ崎）、加賀獅子（福久町、白菊町、材木・味噌蔵両校下青年団）、越中獅子（富山県石動町）、能登獅子（鳳至郡住吉村）、四高生ストーム、子供太鼓行列（石川県児童文化協会）	6.15-16「北國毎日」
昭和24年4月	商工祭	広告行列（トラック14）	4.18「北國毎日」
昭和24年6月	尾山まつり	少年プラスバンド、子供太鼓行列、獅子舞、樽御輿、奴行列、弥彦婆、祇園ばやし、餅搗踊	6.14「北國毎日」
昭和24年11月	金沢美専創立三周年記念祭	仮装カーニバル	11.7「北國毎日」
昭和25年4月	商工祭・宗教平和博	広告行列（金沢市内商店）、長野善光寺尼公上人お練り行列	4、25「北國」
昭和25年6月	尾山まつり	奴行列（大野町）、子供太鼓行列、弥彦婆、越中平原節、樽御輿、祇園囃子	6.15「北國」
昭和25年11月	金沢美大開学記念式	美第芸術祭（仮装カーニバル）	11.6「北國」
昭和26年5月	不明	コドモ仮装カーニバル	5.6「北國」
昭和26年6月	尾山まつり	子供太鼓行列、俵神輿（長町七番丁）、獅子舞	6.15「北國」
昭和26年9月	鍛冶八幡秋祭	大名行列（荒町二丁目子供会・五〇）	9.16「北國」
昭和26年10月	食品衛生祭	トラック街頭仮装行進30台	10.23「北國」
昭和26年11月	金沢美大第二回開学記念	仮装行列	11.4「北國」
昭和27年4月	加賀百万石まつり	獅子舞（泉町、材木町）、大名行列、チンドン屋行列、花電車、広告行列、祇園囃子（四郎）、子供カーニバル	4.23-26「北國」
昭和27年9月	泉新町・泉国造神社秋祭	雲助行列	9.25「北國」
昭和27年11月	片町商店街協同組合結成記念	カーニバル行列	11.23「北國」
昭和28年4月	加賀百万石まつり	百万石行列（238）、広告行列（金沢商店街連盟）、子供百万石行列（市内子供会）、県下観光温泉行列、神輿（下松原町つばめ会）	4.25-28「北國」
昭和28年5月	パチンコ広告	造り物宣伝カー（41台）	5.27「北國」
昭和28年7月	金沢履物小売商業協同組合広告	トラック・三輪車「仮装行列」	7.3「北國」
昭和28年7月	片町商店街・中元売	宝船造り物曳き	7.6「北國」
昭和28年7月	彦三商店街・中元売	海水着・サンダル・麦わらのサンマーハットの着装行列・チンドン屋	7.6「北國」
昭和28年7月	片町納涼祭	お化けコンクール	7.26「北國」
昭和28年9月	片町商店街ファッションショー	コロネーション・カーニバル	9.16「北國」
昭和28年10月	市内麻雀連盟広告	三元パイ仮装行列	10.13「北國」
昭和28年11月	金沢美大第四回創立記念行事	広告行列・カーニバル（250）	11.4「北國」
昭和29年5月	百万石まつり	百万石行列、温泉観光行列、広告行列	5.3-5「北國」
昭和29年5月	第25回メーデー金沢地区大会	デコレーション自動車（20）、汚職内閣打倒仮装行列、骸骨張り	5.1「北國」
昭和29年5月	ボーイスカウト石川県連盟結成五周年	仮装カーニバル（100）	5.5「北國」
昭和29年7月	上石引町商店街ネオン完成祝	仮装行列（40）	7.3「北國」
昭和29年8月	第1回みたまま祭り	山伏行列（天台宗僧侶20、片町青年他30）	8.13「北國」
昭和29年8月	上石引町・行事名不明	石引行列	8.19「北國」
昭和29年12月	上石引町商店街大売	大黒仮装	12.5「北國」
昭和30年5月	百万石まつり	百万石お国行列、温泉観光行列、広告行列、カーニバル	5.3-4「北國」
昭和30年6月	第7回金沢大学開学記念祭	世界各国の風俗コンクール	6.3「北國」
昭和30年6月	第4回はきもの祭	宣伝カー・オートバイ・自転車の仮装行列	6.21「北國」

催し物の中で注目すべきが大野町の奴行列である。藩政期からの経過をみても、金沢の旧市内地で催された同様の行列は複数の役職からなる大名行列が基本であり、その役職のうち一部が独立する場合は、お手古が普通であった。管見のかぎり、奴行列の単独実施は明治二六年（一八九三）の前田慶寧侯贈位慶賀祭での十三間町の「奴踊」程度と思われる（九月三日「北國」）。

大名行列俄を得意とした堀川の住人の間でも、お手古こそが行列の華として意識されていたことは以下の昭和一三年（一九三八）の町紹介記事の記載からわかる。「金沢の三大名物として堀川の名行列は世に知られすぎてゐる。お手古の音頭取りで名聲ある人には日清戦争の生き残り有志である堀川市場に店舗を持つ津田惣太郎さん、米村久太郎さん、直江金次郎さんがある」（二月七日「北國」）。住人の記憶に残るのはお手古の音頭取りの面々であったわけである。

昭和二七年（一九五二）九月の泉新町・泉国造神社の秋祭に二〇年ぶりに雲助行列を行ったのも御手古人気の影響をしめすものだろう（九月二五日「北國」）。つまり、奴行列は大名行列のなから独立して登場することはなかったため、金沢の住人にとってお手古に比べなじみ深いものでなかったことに留意したい。

むしろ、奴が人気を集めたのは郡部（新市内）であった。東條さやかの調査によれば、郡部では、旧石川郡大野町が明治二〇年（一八八七）の大野湊神社の大祭で繰り出したのが最古という^⑧。筆者も以前、明治二六年（一八九三）頃より、金沢開始三〇〇年祭などの影響

から郡部各地で俄の一種として奴が催されるようになった様子を報告しており^⑨、明治二〇年代が伝播の画期となったと想定できる。

大名行列のなかで都市部ではお手古、郡部では奴が独立化する傾向となったのは見物人の好みの違いによる。都市部の人々がお手古を好んだのは俄の特性たる滑稽さを前面に醸し出していたからであろう。

対して、奴行列の見所は、大正一五年（一九二六）の堀川の名行列について新聞に「奴が殿様の宿入りの時に勤むる身振は音頭の聲に連れてヨイトコサ／＼コレワイサのサと飛びかはす形が奇観を呈して現代人の人の眼には異様に感じられる」とその印象が記されているように、巨大な道具を用いた曲芸的な所作にあったとわかり（六月一日「北陸毎日」）、郡部の人々はこのシンプルかつダイナミックな動きを愛でたとわかる。

二〇世紀以降の金沢の祝祭で奴行列が単独に繰り出すのは昭和一一年（一九三六）の市祭に大野町に近接する五郎島町の少年団が参加してからである。同町は同一三年（一九三八）一二月の第三次市域編入によって金沢市に所属したが、都市の人々は、当時流行した郷土芸能の一種として奴を見物した可能性がある。このような経過をみると、戦後に大野町の奴が実施されたのも、戦前の郷土芸能人気を踏襲したためと想定できる。

(三) ブランド化装置としての百万石行列

百万石祭は昭和二十七年（一九五二）に「商店街の振興と観光客の誘致」（四月一九日「北國」）を目的に金沢市商工会が従来の金沢商工祭を発展させた事業である。行事名は同二十九年（一九五四）には加賀が消え百万石祭となる。

行列の目玉となったのが大名行列である。昭和二十八年（一九五三）実施の際、催し物は百万石行列と名付けられた。同催し物は明治初めから金沢の住人にとって催し物の定番であり、戦後においても安定した人気をもったことは昭和二十六年（一九五一）九月一五日の鍛冶八幡神社秋祭でも荒町二丁目子供会の五〇人が大名行列を練ったことからもうかがえる（九月一六日「北國」）。

ただし、昭和二十七年（一九五二）に企画された同行列はいままでとは一線を画すものだった。趣旨は「百万石の昔をいまに」（四月二十三日「北國」）、「百万石城主を盛りの都金沢に再現」（四月二十四日「北國」）などの見出しなどから、同行列は金沢を歴史都市としてのブランド化するための地域振興・パフォーマンスとしての効果を期したとわかる。

企画者側は当初、実際の大名行列を再現する意欲もあつたようだが、藩政期の二〇〇〇人規模を催すことは「当節の物資難」で困難なため、一四一人に縮小した。行列の先頭となつたのは大野青年団の奴行列で、本隊は金沢青年団と金沢大学・金沢美術工芸大学の学生アルバイトが担当した。

本隊は「他藩にはなかつたお手古三組（九人）を先頭に宰領（三人）、（中略）先払い（二人）、その後に鉄砲組二十人が本物の火縄銃をかついでノツシノツシと続く。玉箱一指、侍、供槍弓組（二十人でこの弓も本物）、矢箱侍、供槍、大鳥毛……につづいていよいよ、お殿様のお駕籠に駕籠かきが八人、茶坊主四人、お小姓が四人」という構成からなり、県畜産課から御料馬二頭も出た（四月二十三日「北國」）。とくに力を入れたのが「他藩になかつたお手古組」で、「大きな笠をかぶつた二本差し、雲竜模様の皮羽織を着ていた」ことから、皮羽織の代用品をわざわざ用意したという（四月二十三日「北國」）。

実際の大名行列の再現を旨とし、貸衣装を着た当該の行列形態は既述のとおり、大正一二年（一九二三）の第一回市祭で堀川町が催したのをさがげとする。つとに検討したように、それ以前において大名行列は懷古主義的な趣向をもちつつも、道具は農具や農産物を用いた造り物であり、その造作の妙が行列の見どころであつた。

大正一二年（一九二三）の市祭の場合、造り物の使用はなくなつたが、奴連中などが滑稽な所作を以て観客を笑わせており、見る側も演じる側も俄的趣向を楽しむ気質が残っていた。しかし、百万石祭ではこのような趣向が完全に消えてしまったことに過去との決定的な違いを見出せる。

実はこのような俄的趣向を廃し、金沢の誇りとして大名行列を復活させようとする意識は戦後になって浮上したものでなく戦前期にすでにあつた。昭和一四年（一九三九）三月に尾山神社宮司と市立図書館

長が中心となり金沢文化協会で「百萬石の大半を偲ぶ行事」を創るために、藩政期の衣装を収集したり、古老が生存している間に不足の品々を再現したりする実践運動に乗り出すこととなったという（三月一九日「北國」）。

このような運動が生じたさらなる前提にはそもそも大正後期より郷土史教育の素材として大名行列が評価され、その教材として絵巻や屏風が作成され、学校や郷土展覧会などの場で盛んに展示されてきた経緯がある^④。戦後の百万石行列とは、このような大正期からの郷土意識醸成にかかわる動きのなかで実現をみたといえる。

（四）カーニバル・コンクール・パレードの時代へ

戦後、仮装行列は祝祭の目玉として盛んに催されるようになったが、留意したいのは、俄なる通称が忘れられ、カーニバルやコンクールの名で催されたことである。同語彙の利用の先駆けとなったのが、昭和三年（一九四八）に金沢市美術工芸専門学校創立三周年記念祭で催された学生たちによる「仮装カーニバル」である。

円山応挙の幽霊を先頭に額縁ショウを真似た名画モナリザ、本物の人間に金属板を着せた仏像など三〇数名の一行が繰り出した。最後尾にはアルバイトが市内各店の広告看板を担いで練った（十一月七日「北國毎日」）。

昭和二五年（一九五〇）、専門学校は金沢美術工芸短期大学へ再編する。その開学記念式では「美大芸術祭」と銘打ち開学を祝うカーニ

バルの一〇〇余名の団が繰り出した。日本画科は素っ裸のカッパ一〇数名、洋画科はギリシア神話の神々に取り巻かれた「ヴィナスの女神」、彫塑科は牛車にのせたスフィンクスなどで、日展の影響を受けてか、昨年と比較にならない大作ぞろいと報じられた（十一月六日「北國」）。

学校祭の仮装行列は他校へも波及していく。昭和二五年（一九五〇）、泉丘高校の開校記念祭の三日目に催された運動会で各組仮装行列がクライマックスを彩った^⑤。また金沢女子短期大学では同年四月の金沢女子専門学園からの昇格後、毎年、運動会で仮装行列が催された^⑥。

学生による仮装行列が実施された前提には、既述の通り、昭和二一年（一九四六）に四高が尾山祭にあわせ、ストームで仮装行列を行ったことがある。四高ストームは当初、運動会に自治寮で造り物を飾り、終了した夜に慰労宴を催し騒いでいた程度であったが、同六年（一九三二）の金沢市祭で街頭に繰り出したことがきっかけで、翌年から造り物を集め焼却し、香林坊・片町を練り歩くようになった^⑦。

昭和初期から街頭に繰り出すようになった背景には大正末からカフェエの進出などにより都市が夜の繁華をみせるようになり、学生にとっても身近な遊楽空間となった関係があるろう。

ただし、当時の練り歩く範囲は最寄りの盛り場にとどまり、また目立った行動は空缶を乱打し看板などに悪戯する程度、つまり悪戯を風物詩とした金沢の年中行事の社日や酔客の行動レベルにとどまり、見

物人が発生することはなかった^④。

戦後における四高生の仮装行列は戦前のストームを系譜としつつも、都市空間との関係において大きな違いがあったことに留意が必要である。それまで学生が仮装行列を繰り出すことは運動会に限られ、それも既述の通り大正期には運動会／学生の本分を忘れたものとして厳しい批判を集めた。

つまり、学生が都市空間での集団的行動が許される唯一の様式は規範的な提灯行列しかなかったことを鑑みれば、学生集団が都市空間に仮装で参入することは画期的な出来事であったのである。想像をたくましくすれば、この都市参入に、一九六〇年代の学生デモや、八〇年代の竹の子族へとつながっていく若者たちの集合文化の萌芽を見いだすことも可能でなからうか^⑤。

美大の仮装カーニバル実施の契機はひとつにはこのような四高生の行動の画期性があったと思われるが、もうひとつ視野に入れておくべき契機は、もともと美術系学校の文化祭で仮装行列が定番となっていたことである。さかのぼれば、明治三十六年（一九〇三）に東京美術学校（現・東京藝大）の設立一五年記念の「美術祭」が先駆例としてあげられる^⑥。これが後に創設された美術学校の祝祭に影響を与えたことは、昭和六年（一九三一）の帝国美術学校（現武蔵美術大学）の創立記念祭にも看取でき、このときは街頭に繰り出している^⑦。金沢美術工芸専門学校もこれらの前例を参考にした可能性が高い。

留意したいのは仮装行列をカーニバルと称したことである。同語彙

は、その後も、百万石祭の子供カーニバルや片町商店街協同組合結成記念のカーニバル行列、ボーイスカウト石川県連盟結成五周年の仮装カーニバルなど、仮装行列の代名詞として多用された。

百万石祭の子供カーニバルは市内二七子供会の児童三〇〇名余が奴、年貢米運び、鬚をはやした歴代市長、大野醤油の今昔、子鹿パンビ、孫悟空、桃太郎などに扮し練った（四月二八日「北國」）。片町商店街協同組合のカーニバル行列は組合結成記念と福引付き売り出しの宣伝を目的としたもので、店主七一名が花咲爺、尉姥、花魁などに仮装し歩いた（十一月二三日「北國」）。

戦後期金沢においてカーニバルが流行した背景として想起されるのが、作家の久米正雄が戦前期に鎌倉の海浜を会場に始めた納涼イベントの「夏のカーニバル」「鎌倉カーニバル」である^⑧。カーニバルという言葉は戦後、鎌倉のイベントを中核イメージにしながら全国へ定着していったことは『最新時事新語辞典 一九四九年版』のカーニバルの説明で、用例として「海のカーニバル、鎌倉カーニバル」のみをあげていることや、また子供向けの事典『小学館新学習年鑑 昭和三年版』では「海のカーニバル」のようにカトリックとは関係なくただばかさわぎのことをいう」と定義していることからわかる。

つまり、往時の人々にとつて、カーニバルとは太平洋岸の夏、海、陽光、そしてバカ騒ぎを想起させる語彙であったのである。そのイメージは昭和三年（一九五六）の『太陽の季節』映画公開を起点とする湘南イメージの形成にも少なからぬ影響をもたらしたと想像でき

る^⑤。とりわけ、敗戦後社会において、軍事体制からの解放気分を味わい、また陰鬱たる空気を一掃する上で、カーニバルほど力強い言葉はなかったのだろう。

カーニバルのほかに多用されたのがコンクールである。昭和二八年（一九五三）七月には夏の夜の賑わいのために片町商店街では、美大生がつくったお化け二〇体が練り歩き、人気を決めるお化けコンクールが実施された（七月二六日「北國」）。また、同三〇年（一九五五）六月の第七回金沢大学開学記念祭では世界各国の風俗コンクールなる仮装行列が催された。

昭和三〇年（一九五五）五月の第四回百万石祭では最後の三日目に金沢市兼六園球場で大カーニバルと題し、さまざまな催しが行われ、そのなかで一般参加企画として昔話童話、有名小説、空想科学的、世界風俗の四つのテーマからなる仮装コンクールを実施した（四月二六日、五月四日「北國」）。

仮装コンクール形式は昭和二〇年代、県下一円にひろがった。枚挙にいとまがないが、若干例をあげれば、昭和二九年（一九五四）の鳳至郡釧地村千代・神明神社八〇年祭では青年団主催の五〇〇人規模の狸・国定忠治・ストリップ・赤垣源藏などが登場するコンクールが（九月五日「北國」）、また昭和三二年（一九五七）の高松町の秋祭では各町内、各団体の仮装コンクールが催された（一〇月四日「北國」）。

その後、行列の呼称としてカーニバルにかわって定番化するのがパ

レードである。昭和三一年（一九五六）の金沢専門店主会主催のせんもん祭りでは東北花巻の鹿踊、徳島の阿波踊、熊本のおてもやんなど二キロにわたる郷土芸能のパレードが行われた（四月二二日「北國」）。

百万石祭でも「百万石大カーニバル」（第三～五回）などカーニバルをつけた事業は昭和三六年（一九六一）の第一〇回をもってなくなり、かわりに「ブラスバンドの大パレード」（第九回）・「商工パレード」（第七回以降）・「豊年太鼓パレード」（第一三回以降）など、パレードが中心となる。同語彙は敗戦後の解放と沈痛の空気を抜け出し、日本が高度経済成長期に入ったことを物語る言葉であった。

六 まとめ

以上、明治三七年（一九〇四）の日露開戦後以降の祝祭行列の動向を追った。最後に要点を時系列に整理する。

① 明治三七年日露開戦…提灯行列の導入と俄文化との相克・接合

日露戦争開戦以降、国民的祝祭の様式として提灯行列が催されるようになる。人々は提灯を手にするだけでは、日常からの解放や歓喜の共有を得ることができないために、藩政期以来の祝賀の参加様式である俄を組み合わせたところ、新聞社や警察は祝賀の様式として不適切であると指導した。しかし、その後も人々は俄的趣向を自制することはなく、県保安課は最終的に祝祭盛り上げのため容認した。一方、明

治三七年（一九〇四）九月の遼陽占領祝賀で県立学校が、同三八年（一九〇五）一月の旅順陥落祝賀で小学校児童が大規模かつ整然たる行列を実施することで、行列の模範性と、群衆が生み出す夜の光景の美をひろく感受することとなった。結果、戦前期まで規範的と放縱的（俄的趣向性）という相反する志向性をもつ二つの提灯行列が展開することとなり、大人たちは当初は規範性を順守しつつ、次第に俄的趣向を前面化させていく参加姿勢をもつようになった。

② 明治四二年行啓・獅子舞の名物化

金沢の祝祭行列は幕末頃に獅子舞・祇園囃子・俄の三種が定着した。三種間の価値の優劣はなかったが、この対価性を変質させたのが明治四二年（一九〇九）の行啓であった。獅子舞の台覧をきつかけとし、獅子舞は金沢の名物、言い換えれば鑑賞に値する芸能と位置付けられ、かつ青年団活動の活発化の影響もあり、住人の芸能者としての自意識と芸の継承意欲が高まり、大正期まで都市祝祭の中心的な催し物として力が注がれた。また、獅子舞とあわせ、郡部の集落が虫送りや市街地に近接する里山で催し台覧に供した。都市祝祭はその後、地方の芸能を街頭や舞台上演する重要な機会となっていくが、その濫觴となる出来事であった。

③ 大正三年青島陥落祝賀・統御技法として大提灯行列

日露戦争をめぐる祝賀で最大の盛り上がりを見せた旅順陥落では、提灯行列は当初規範性を順守しているものの、徐々に俄的趣向が前面化していく流れをみせた。この流れは大正三年（一九一四）の青島陥

落祝賀や大正・昭和の御大典にも共通した。青島陥落の際は、祝賀一斉開始の当日に合同提灯行列を実施したが、その後、連日のように俄的趣向を前面化させた行列が繰り出し、終息のめどがなくなつたために警察は強制的な終了措置をとった。大正や昭和の御大典では祝賀開始の約一週間後に北國新聞社主催による群衆規模の提灯行列実施が企画されたのは、行政当局が際限なき祝祭状況に陥らないようにメディアの情報力を用い、祝賀参加への動員とその管理をすすめるようにとした可能性がある。一方、メディアは提灯行列が生み出す美的風景の俯瞰場所を事前に喧伝し集客にも努めた。提灯行列は街路と群衆がうみだすスペクタクル・ショーとして広く意識されるようになった。

④ 大正一二年市祭・提灯行列の恒例化

国による官幣社の財政的支援や神社の自治中心化、さらに敬神崇祖観念の浸透から、尾山神社の後援団体たる尾山旧誼会が明治末より組織を拡大し、神社事業の活性化を目指すようになり、大正八年（一九一九）以降、同社封国祭は再び殷賑をみせるようになった。尾山神社を金沢の神社の中核に位置付けようとする動きに在地神職層が強く反発したものの、同一二年（一九二三）、市長は敬神観念を介し市の発展を期すために封国祭を金沢市祭へ再編する。市祭では敬神観念教育の一環として児童主催の提灯行列が恒例事業化した。また、市祭再編にあたって盛り上げのための目玉と期待されたのが堀川・小立野・卯辰各方面地域の俄であった。その後も小立野に対し主催者がその参加交渉をすすめたが、費用の大きさから継承されることはなく、藩政期

以来の独特の俄文化が途絶することとなった。

⑤ 昭和御大典…祝祭行列の郷土芸術大会化

大正十一年（一九二二）の招魂祭の頃から近郊郡部や能登の催し物が増加し、さらに同一三年（一九二三）の軍旗祭では富山県の民謡舞踊が披露され、地方の芸能が都市祝祭を盛り立てるようになった。背景には出郷者が都市の経済産業をささえる構造化がすすみ、都市と地方の結びつきが強まったことや、またその動きに連動し地方在来の芸能が郷土芸術として評価されたことがあった。地方の芸能は、出郷者にとって郷愁の念を喚起する疑似的郷土として、また都市住民にとって野趣あふれる刺激的な異文化として消費された。郷土芸能の参入や遊芸サークルの参加増、都市住民による郷土芸能の披露は人々にとって都市祝祭がもはや日常から解放を得る機会以上に、芸能者として視覚化される機会へと意義づけが変化したことを物語る。

⑥ 昭和恐慌…消費都市と広告行列

大正終わるところから、販売方法が商品価値を顧客相手の交渉のなかで顕在化させる座売りから、事前に可視化させた陳列売りへと変化していくことで、結果、都市空間は宣伝で覆われる消費・広告空間と化していった。昭和恐慌により景気浮上策として宣伝がさらに強化されるなか、各業界団体は商品価値の視覚化の強化のために造り物行列を核とする広告祭を昭和五年（一九三〇）から行うようになる。昭和十一年（一九三六）には金沢産業協会主催の商工祭へと発展し、大々的な広告行列が行われた。ただし、行列は、広告宣伝とは無縁の俄的趣

向が多くみられた。俄という様式こそが、いいかえれば祝祭世界それ自体が景気向上・地域活性を促すと考えた。

⑦ 昭和十二年上海事変後…祝祭世界の抑制

昭和十二年（一九三七）の上海事変以降、日中戦争が激化していく。戦死者の身辺化が進み、挙国一致体制のスローガンが浸透するなか、南京陥落を前に地元の軍司令部は戦勝祝賀関連の催し物の自粛を要請した。これによって祝祭行列は学校団体による規範性をもった提灯・旗行列が中心となり、その影響はほかの都市祝祭にも及び、日中の行列は楽隊行進や疑似軍事教練に限られ、藩政期より続いた俄文化が途絶することとなった。それは日常からの解放志向が人々のあいだに抑制されていった状況を物語る。

⑧ 敗戦…祝祭行列の多義化と若者の街頭進出

戦時中の封印をとくように、戦後、仮装行列がつぎつぎと催された。行列は、鎌倉の陽光イメージから喚起される解放感からカーニバルと呼ばれた。仮装行列はとくに商店街や業界団体による宣伝目的で実施された。また市祭の後継行事となる百万石祭では昭和二十七年（一九五二）から大名行列が金沢の歴史都市としてのブランド化のために催された。商業や地域の振興を目的とする行列が増大する一方、そのような企図を持たない学生たちの仮装行列が街路で歴史上初めて催された。戦後社会のその後を見通すとき、都市空間への学生たちの集合的参人は一九六〇年代の学生デモへつながる萌芽的状况として理解できる。

注

- ①拙稿「金沢の祭礼俄」『金沢祭礼図譜』(近刊)。
- ②岸本亜季「日露戦争以前の提灯行列」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五六(二〇一〇)、同「日露戦争期の都市における多衆行動の一背景」『史観』一七一(二〇一四)。
- ③古川隆久「皇紀・万博・オリンピック」(一九九八・中央公論社)、右田裕規『近現代の皇室観と消費社会』(二〇二〇・吉川弘文館)は従来の国民統合論を批判し、利益追求や消費という視線から国民的祝祭の意義を検討する。
- ④中筋直哉『群衆の居場所』(二〇〇五・新曜社) 一二七頁。
- ⑤前掲①(二〇一〇) 参照。
- ⑥山口昌男「徒党の系譜」『人類学的思想』一九九〇・筑摩書房。
- ⑦前掲①参照。
- ⑧日露戦争と葬儀社成長の関係は拙稿「競い合う霊柩自動車」『民具研究』一六六(二〇二四)で検証した。
- ⑨拙稿「お買い初めの経済学」『石川県立歴史博物館紀要』一九(二〇〇七)。
- ⑩宮地正人『日露戦後政治史の研究』(一九七三・東京大学出版会) 第一章三節。
- ⑪『加賀藩史料』一三編四二七頁。
- ⑫『加賀藩史料』幕末下編四八七頁。
- ⑬能川泰治「軍都」金沢における日露戦争の記憶『北陸史学』七〇(二〇二二)。
- ⑭拙稿「石川県の祭礼花火」『石川県立歴史博物館紀要』三三(二〇二四) 九八頁。
- ⑮拙稿「寄せ物・飾り物・模型」『石川県立歴史博物館紀要』二一(二〇〇九)。
- ⑯前掲①参照。
- ⑰拙稿「金沢市五寶町の獅子舞」『加能民俗研究』五七(二〇二六) 参照。
- ⑱『米澤弘安日記』(二〇〇〇～二〇〇三・金沢市教育委員会)。
- ⑲拙稿「美人ツーリズムの成立(下)」『石川県立歴史博物館紀要』二九号(二〇二〇) 四六頁。
- ⑳尾山神社々務所編纂『尾山神社誌』二一六～二三〇頁(一九七三・尾山神社々務所)。
- ㉑以上の説明は阪本是丸『国家神道形成過程の研究』(一九九四・岩波書店) 第九章に負う。
- ㉒山本吉次「大金沢論」と「市民」意識の涵養」『地方史研究協議会編『伝統の礎』(雄山閣)。
- ㉓赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』(一九八五・校倉書房) 第二章、畦上直樹『村の鎮守』と戦前日本』(二〇〇九・有志舎) 第三章参照。
- ㉔同右畦上(二〇〇九) 参照。
- ㉕香林坊大神宮の活動については拙稿「大神宮の香林坊」『石川県立歴史博物館紀要』三一号(二〇二二) 参照。
- ㉖高瀬幸恵「近代日本の国民道徳の展開と神道の接近」第三章(二〇二四・日本大学リポジトリ)。
- ㉗高瀬幸恵「一九三〇年代における小学校訓育と神社参拝」『日本の教育史学』五〇(二〇〇七) 及び㉘第五章参照。
- ㉘石川県編『大正十三年陸軍特別大演習並地方行啓記録』(一九二六) 二四五～六頁。
- ㉙前掲①参照。
- ㉚模擬戦の概要は前掲⑬参照。
- ㉛前掲㉑及び㉓赤澤第五章参照。

- ③②『石川県史 現代編(2)』(一九六三) 一二二四頁。
- ③③拙稿「聞き書き「御陣乗太鼓」『加能民俗』一六七(二〇二四)。
- ③④拙稿「美人ツーリズムの成立(下編)」『石川県立歴史博物館紀要』二九(二〇二〇)。
- ③⑤郷土芸能(郷土芸術)の消費背景と芸能者としての自意識覚醒の分析は橋本裕之「文化としての民俗芸能研究」『民俗芸能研究』一〇号(一九八九)、笹原亮二「民俗芸能大会というもの」『民俗芸能研究会の会／第一民俗芸能学会』課題としての民俗芸能研究(一九九三・ひつじ書房)の成果に負う。
- ③⑥『広告大福帳』(一九〇五・毎日繁昌社) 一四頁。
- ③⑦『長崎医学専門学校研瑤会雑誌』(一九一一・長崎医学専門学校研瑤会) 〇三頁。
- ③⑧『広告年間 昭和六年』(昭和五年・万年社) 一八コマ。
- ③⑨同獅子の聴取による成果に小倉学「金沢の桜獅子」『同右』三二号(一九九九)がある。
- ④⑩東條さやか「金沢の奴行列」『加能民俗研究』四四(二〇一三)。
- ④⑪前掲①参照。
- ④⑫拙稿「巖如春と史談会」石川県立歴史博物館編『風俗画伯 巖如春』(二〇二二)。
- ④⑬『金沢一中・泉丘高校七十年史』一九六三 三三三頁。
- ④⑭『金沢女子短期大学二十年の歩み』(一九六六) 三三四頁。
- ④⑮金沢におけるストームの概要と背景は前掲⑮で検討した。
- ④⑯社日の詳細は拙稿「廓の俗信雑考」『加能民俗』一六三号(二〇二〇)参照。
- ④⑰都市空間と若者の集合的行動の関係についての刺激的成果として桐谷詩絵音「集合現象としてのデモへの参加過程」『社会学評論』七五卷一号(二〇二四)、同「利用者による都市商業空間の変革可能性」『年報社会学研究』三八号(二〇二五)がある。
- ④⑱『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第二卷(一九九二) 一三二～一三三頁。
- ④⑲「帝国美術」を読む(一) 宮永芳江「仮装行列記」『MAU2029』(二〇二五)。 <https://2029mag.musabi.ac.jp/column/509/>
- ⑤⑰開始年は野田宇太郎「鎌倉と逗子」『市政』九七(一九六〇)他、昭和九年とする。
- ⑤⑱菅原孝太「湘南イメージの変遷について」『国士舘大学地理学報告』二六号(二〇一八)。
- ④⑰都市空間と若者の集合的行動の関係についての刺激的成果として桐谷詩絵音「集合現象としてのデモへの参加過程」『社会学評論』七五卷一号(二〇二四)、同「利用者による都市商業空間の変革可能性」『年報社会学研究』

近世能登外浦における干鰯の輸送

— 北川尻・今浜浦を事例に —

吉田 朋生

はじめに

一八世紀後半になると、日本海側では中・大型船による遠隔地間の輸送が発達した。「北前船」と称される、大坂や兵庫を起点とし、北は松前、南は下関・瀬戸内海などを結んだ買積廻船が代表的である。

現在の能登外浦地域（能登半島北西部の日本海外洋に面した地域、以下「外浦」^①）では、そうした遠隔地交易を担う廻船の所有者（船主）や、その乗組員（沖船頭や水主）が輩出したことで知られる。

一方で、「小廻り」と呼ばれるような小型の船舶による小地域間の輸送が存在したことも見逃すことができない。これを、和泉清司氏は「地廻り海運」として定義し、一七世紀における加越能の中核的湊から周辺諸浦との間での輸送の実態を検討した^②。その中で明らかに

なつたのは、年貢米や塩などの物資の集積地が、中核的湊として機能していた点である。加賀藩領において、年貢米と塩は、他領からの移入制限が行われていた産品であり^③、主要な港湾（湊・浦）はその統制の拠点となる点からも重要であった。

一方、領内における原料用品確保や自給体制の確立などの観点から、他領への移出が制限された産品もある。大豆・鰯・蠟・漆・油・油種・竹・紙・楮などがそれであり、今回取り上げる魚肥^④魚を原料とする肥料のうち、「干鰯」^{ほしか}（史料上で「干加」や「干か」と表記されることもある）も対象となった^⑤。他領への移出が制限されるということは、すなわち流通の大部分は加賀藩領内での小地域間の輸送が占めるということである。

干鰯の主要な生産地の一つに、現在の能登外浦のうち能登国口郡

（羽咋郡・鹿島郡）の海岸が挙げられるが、その流通に関して次のような記録がある⁽⁵⁾。

【史料1】岡部家文書「羽咋鹿嶋両御郡諸産物之様子書上申帳」

近年出来高少キ故歟、相願候而も他国出ハ不被仰付、御国之内通
用ニ罷成申候、加州筋ハ舟積出津ハ御作法御座候、越中筋者多ク
ハ馬附ニ売遣申候、尤兩御郡之内ニ干鰯養相応之御田地ハ多ク無
之故、多分ハ加州・越中江売出シ申儀ニ御座候

これは、安永七年（一七七八）に作成された羽咋郡・鹿島郡の産物に関する報告書の干鰯の項目である。右の両郡では、干鰯を肥料として用いる田地が多くないため、大半は加賀や越中へ売り出すのだが、加賀方面へは船積みし、越中方面へは馬を用いたという。つまり、能登外浦から加賀方面（石川郡や能美郡など）へは廻船による比較的短距離の輸送が行われていたことになり、先に述べた地廻り海運の一例として捉えることができる。

本稿では、以上で確認したような地廻り海運の一端を捉えることを目的に、これまで富山湾沿岸に比して研究蓄積の少ない能登外浦の浦々からの干鰯の輸送状況を分析する。その際に、羽咋郡（現在の羽咋市・宝達志水町域）の北川尻浦と今浜浦を分析の対象とする。両浦を選ぶ理由は、第一章二節で述べるように、能登国口郡の中でも干鰯の出来高が顕著な二村内に位置する浦だからである。まず、第一章で

加賀藩領内における干鰯生産と利用の実態を踏まえた上で、第二章で史料上に見える干鰯の輸送状況を検討したい。

一 加賀藩領内における干鰯の生産と利用

（1）干鰯利用に関する先行研究

本節では、加賀藩領内の干鰯流通に関する研究の到達点を確認する。加賀藩領における物資の流通を体系的に解明したのが、高瀬保氏の一連の研究である⁽⁶⁾。干鰯に関わるものとしては、越中国を流れる小矢部川の舟運権をもった高岡木町の特権を分析する中で、越中国砺波郡に散在した肥料商の分布を明らかにし、伏木湊から小矢部川流域への流通状況が示された。干鰯の産地として主に想定されるのは砺波郡に隣接する越中国射水郡の浦々だが、砺波郡の農民は農耕馬をもつて、さらに安価な干鰯を能登・加賀国に求めることもあったという⁽⁷⁾。

さらに近年、加賀藩領内の農業経営や、藩による魚肥政策の観点からの研究が進んでいる。武井弘一氏は、干鰯を利用する百姓の視点を重視し、農業経営における魚肥の影響力を評価した分析を行っている⁽⁸⁾。上田長生氏は、魚肥をめぐる加賀藩や地域社会の動きを分析し、干鰯をはじめとする魚肥が百姓に行き渡るための仕法が模索されたことを明らかにしている⁽⁹⁾。

そうした中で、加賀方面での干鰯利用の実態は、流通史の側面から

はこれまであまり分析されてこなかった。生産と消費の両面を意識した上で、その輸送や仲介に携わった人々に関わる史料を探索し、位置づけていく作業が必要と思われる。本稿は、その試論である。

(2) 能登国口郡における干鰯生産

次に、能登国口郡に注目し、史料から分かる干鰯生産の実態を押さえていきたい。口郡は、羽咋郡と鹿島郡に分かれる。外浦に面するのは羽咋郡である。郡はさらに、十村（他藩の大庄屋に相当）が支配する複数の組に分かれる。羽咋郡には、文政四年（一八二一）段階で押水組・邑知組・土田組・富来組があり、天保一〇年（一八三九）に甘田組が加わった。

文政期以降に押水組を裁許した十村・喜多一三郎家に伝わった文書群に、文政三年の押水組浦方における五月までの鰯の取り揚げ状況を書き上げた史料がある⁽¹⁰⁾。そこでは当時の押水組57村のうち、次の11村が挙げられている。

一、七拾六貫五百文	中沼村
一、百六拾五貫文	二ツ屋村
一、六拾五貫文	免田村
一、三百六拾貫文	北川尻村
一、四百貫文	米出村
一、八百廿貫文	今浜村
一、百五拾貫文	宿村

一、貳百五拾貫文	柳瀬出村
一、四百貫文	柳瀬村
一、百貳拾貫文	新保村
一、三百八拾貫文	粟生村

出来高が三百貫文（単位は銭高）を超えるのが、北川尻村・米出村・今浜村・柳瀬村・粟生村の5村で、特に今浜村が多かった。これは、鰯を砂浜に干して肥料に加工する前の産出状況である。

次に時代は下るが、天保七年（一八三六）七月に口郡で生産された干鰯の内訳が分かる史料を見ていく。

邑知組などを裁許した十村・岡部七左衛門家に伝わった「口郡村々干加直段附帳」には、口郡で生産された二、〇〇〇俵の干鰯の村ごとの生産高が記されている⁽¹¹⁾。それをまとめた【表1】をご覧いただきたい。これによれば、押水組が大部分を占め、特に、北川尻村、次いで今浜村の生産高が多かった。時代によって増減はあるはずだが、一九世紀において、北川尻村・今浜村の両村が口郡における主要な干鰯の産地であったことが窺える。

以上のことから、次章で検討する干鰯の積出しを行った浦として、羽咋郡の浦々のうち北川尻浦と今浜浦を対象とする。

ちなみに、【表1】について補足すると、他に一〇〇俵以上を記録する中沼村・免田村・二ツ屋村のうち、中沼と二ツ屋は現在のかほく市域に該当する。特に二ツ屋については、鰯漁の盛んな地域として知られる⁽¹²⁾。そのため、羽咋郡に隣接する加賀国河北郡の浦々もまた

【表 1】天保7年（1836）7月に口郡で生産された干鰯2,000俵の内訳

組	村	出来元	出来高	
押水組	今浜村 (うち11俵は 新保村分)	与次右衛門	54俵(代342匁1分4厘)	323俵 (代2貫245匁7分5厘)
		甚左衛門	25俵(代169匁5分)	
		十兵衛	40俵(代297匁8分8厘)	
		武兵衛	30俵(代198匁3分9厘)	
		惣助	174俵(代1貫237匁8分4厘)	
	宿村			88俵(代616匁1分8厘)
	柳瀬出村			54俵(代369匁1分4厘)
	柳瀬村			53俵(代382匁9分3厘)
	栗生村	小兵衛	28俵(代142匁2分8厘)	48俵 (代355匁7分)
		忠三郎	10俵(代73匁3分6厘)	
		源左衛門	18俵(代140目6厘)	
	北川尻村	小右衛門	166俵(代1貫136匁6分)	667俵 (代4貫730匁5分9厘)
		吉郎兵衛	40俵(代278匁7分6厘)	
		加右衛門	146俵(代1貫107匁4分1厘)	
		長助等三人	94俵(代642匁5分8厘)	
		平三郎	94俵(代684匁3分2厘)	
		甚右衛門	58俵(代390目5厘)	
		甚七	69俵(代490目8分7厘)	
	中沼村	助左衛門	12俵(代81匁3分6厘)	126俵 (代770目9分4厘)
		仁左衛門	58俵(代386匁8分)	
		茂左衛門	6俵(代41匁3分5厘)	
		善七	18俵(代128匁5厘)	
		半助	20俵(代133匁3分8厘)	
		二ツ屋村方	12俵	
	米出村			94俵(代626匁8分9厘)
	免田村			233俵(代916匁5分)
	二ツ屋村 (うち12俵は 中沼村)	八郎右衛門	112俵(代771匁7分9厘)	226俵 (代1貫535匁1分6厘)
		宗左衛門	64俵(代441匁2厘)	
		長次郎	50俵(代322匁3分5厘)	
邑知組	塵濱村			89俵(代613匁3分)
	羽喰村			84俵(代574匁2分2厘)
	宮村			21俵(代140目)
	宮寺家村			6俵(代40目1厘)

〔出典〕岡部家文書「口郡村々干加直段附帳」（宝達志水町教育委員会蔵）より作成。

干鰯の積出し場所となり得るため、次章で触れるように、河北郡の村方の文書にも干鰯の津出に関する史料を確認することができる。

二 能登外浦出来の干鰯の輸送

(1) 浦々の概況

『押水町史』は、羽咋郡押水組における主要な浦として、宿浦・今浜浦・北川尻浦・米出浦の4か所を挙げる¹³⁾。元治元年(一八六四)七月の津出品の口銭を書き上げた記録によれば、干鰯はそのうち今浜浦のみに記載されている。ただし、干鰯は四月から五月頃に生産されるため、この記録以前に他の浦から積出した可能性がある点には留意が必要である。

この口銭の記録から、【表2】に北川尻浦と今浜浦分を抜き出した。「干か」や「灰」といった肥料のほか、御蔵が置かれた今浜村ならではの品目として町蔵米の積出しを行っていることが分かる。

さらに、津出品の行先・荷主を知ることができ、干鰯の行先は石川郡の相川浦である。相川浦(現在の白山市松任、相河浦とも表記)は、宮腰浦(現在の金沢市金石)と本吉浦(現在の白山市美川)の中間に位置し、松任周辺一帯の海上物流拠点として公認されていた¹⁴⁾。

邑知組の十村・岡部家に、天保七年(一八三六)七月に相川村甚左衛門が干鰯の取引相場を記録した「所々出来干鰯石川郡相川浦において売買直段等書上申帳」がある¹⁵⁾。【表3】に見られるように、相川

【表2】元治元年(1864)7月の北川尻浦・今浜浦の津出品

	品名	数量	代価	口銭	行先	荷主
北川尻浦	西 瓜	350	175 匁	1.75 匁	地 頭 町	北川尻村 理兵衛
	石 灰	130 俵	390 匁	1.56 匁	宮 腰	山崎村 与三右衛門
	〃	125 俵	375 匁	1.5 匁	相 川	〃
	西 瓜	300	150 匁	1.5 匁	羽 咋	北川尻村 忠兵衛
	小 麦	7 石	735 匁	7.35 匁	秋 浜	北川尻村 助左衛門
	西 瓜	300	150 匁	1.5 匁	滝	北川尻村 源四郎
	古 網	50 把	100 匁	1.0 匁	高 松	北川尻村 伝右衛門
	西 瓜	120	60 匁	0.6 匁	滝	〃
	松垂木・敷居・横木		1,150.6 匁	11.51 匁	大 野	北川尻村 喜三郎
	桐材・足駄天井		658 匁	6.58 匁		
	石 灰	750 俵	2,250 匁	9.0 匁	相 川	山崎村 与三右衛門
	松 牧 木	1,800 束	450 匁	4.5 匁	大 野	北川尻村 小兵衛

今 浜 浦	こ り 干 か	230 俵	1,794 匁	7.18 匁	相 川	今浜村 吉兵衛
	松 割 木	1,500 束 1,500 束	450 匁 450 匁	4.5 匁 4.5 匁	宮 腰 大 野	今浜村 仁助
	松 六 歩 板	100 間	600 匁	6.0 匁	宮 腰	今浜村 次右衛門
	小 豆	1 石	110 匁	1.1 匁	大 野	今浜村 甚左衛門
	箕	18 箇	515 匁	5.15 匁		
	炭	65 俵	260 匁	2.6 匁		
	小 羽	30 束	60 匁	0.6 匁		
	み の 瓜 西 瓜	4,000 150	575 匁	5.75 匁	皆 月	今浜村 又八
	み の 瓜	2,000 3,000	260 匁 390 匁	2.6 匁 3.9 匁	大念寺新 富 木	今浜村 理助
	今 浜 町 蔵 米	100 石	12,000 匁	120 匁	大 野	米主 大野町 五宝屋又四郎
	子 浦 米	70.399 石	8,095,89 匁	80.96 匁		
	今 浜 町 蔵 米	20 石 25 石 25 石 25 石 50 石	2,360 匁 2,950 匁 2,950 匁 2,950 匁 5,900 匁	23.6 匁 29.5 匁 29.5 匁 29.5 匁 59.0 匁	大 野	米主 大野町 若狭屋藤右衛門
	石 灰	230 俵	840 匁	3.36 匁	相 川	宝達村 喜右衛門

〔出典〕喜多家文書「子七月分出津之品御口銭取立帳」。『押水町史』（石川県押水町役場、1974年）pp. 346-347所載の表を基に作成。

【表 3】天保7年（1836）の相川村甚左衛門の取引相場

種別	時期	取引先	干鰯の種類	値段 (1 俵に付)
河北郡高松村等	5 月下旬	高松村仁左衛門へ入	北川尻干加 70 俵	9 匁替
	6 月下旬	二ツ屋村八郎右衛門出	能州口郡二ツ屋干加 160 俵	7 匁 7 分替
石川郡相川浦において当五月以来売買仕候干鰯直段	5 月下旬	大野浦又右衛門へ入	能州奥郡小木干加(4 樽入) 1,500 俵	7 匁 8 分替
	6 月上旬	安宅浦鉄炮屋次郎兵衛船	越後角田干加 328 俵	11 匁 5 分替
	6 月中旬	安宅浦鍛冶屋与三郎舟	角田干加 575 俵	9 匁 2 分 5 厘替
能州奥郡所ノロ・中井・穴水辺所々出来干加	7 月上旬	能州蛸島村惣兵衛出	奥郡干加(4 樽入) 660 俵	6 匁 6 分替
	7 月上旬	右同人へ	右同断 550 俵	6 匁 2 分替

〔出典〕岡部家文書「所々出来干鰯石川郡相川浦において売買直段等書上申帳」（宝達志水町教育委員会蔵）より作成。

浦に能州奥郡や越後などの各地の干鰯が出入りし、宮腰や安宅などの他の浦への干鰯の売買拠点になっていたことが窺える。詳しい分析は割愛するが、「越後角田干加」の例から分かるように、六月上旬の方が中旬よりも高い取引相場であり、早く売る方が高値で売却可能であった。

（2）津出津入願にみる輸送―北川尻浦を中心に

はじめに述べたように、加賀藩領では干鰯の他領への移出が制限されていた。そのため、干鰯の入・出津が行われる浦では潤改人による吟味が行われた。特に、寛保三年（一七四三）九月以降、加州奉行から十村への通達により、浦方猟師が干鰯を何郡何村誰に売り出したかを記帳し、津出にあたり船積みの際に提出する願書への郡奉行の押印が必要とされた¹⁶⁾。「津出津入願」などと呼ばれる願書は、これまで流通史の研究対象とされてこなかったが、これを分析することで、浦から浦への輸送の実態を知ることができる。

次に掲げるのが、羽咋郡北川尻浦から石川県本吉浦への「入津願」の提出を受けて、改作奉行から本吉町奉行・神戸小兵衛（天明四年〔寛政五年在任〕）宛てられた潤改めに関する覚書である¹⁷⁾。

【史料2】「本吉浦預入干鰯俵数覚写」

覚

一、式百三拾俵

干鰯河北郡

高松村平六荷主

北川尻村市十郎

津出願人

右羽喰郡北川尻浦方出津本吉浦江入津願二付、承届候間、右干鰯俵数無間違入津有之候者、早速及案内候様二間改〔欠損〕渡綿密念を入相改候様二御申渡、入津〔欠損〕様子御申聞可被成候、為其如此二御座候、以上

五月廿日

杉野多助印

不破右平次印

神戸庄兵衛様

杉野・不破は、天明期から寛政期にかけて改作奉行を務めた人物であることから、【史料2】の年代を絞り込むことは難しいが、神戸の本吉町奉行在任期間の天明四年（一七八四）から寛政五年（一七九三）のものと考えたい。

本史料で注目すべきなのは、干鰯の情報として「河北郡」と記され、荷主についても河北郡高松村の人物であるが、津出の願人は羽咋郡北川尻村の市十郎だという点である。（喜多）市十郎が十村役（新田裁許）に任じられるのは寛政八年である。【史料2】はそれ以前の史料であることから、十村としての出願でないとすれば、北川尻浦を経由した干鰯の積廻しに買請人などとして介在した可能性がある¹⁸⁾。

河北郡に積出しに適した浦が無かったかといえ、そうではない。

河北郡の干鰯の積出しについては、管見の限りで特に古い享保一九年（一七三四）三月の津出津入願がある。河北郡の「白尾村浦」で取り揚げた小干鰯一二〇俵を白尾村の金平が買請け、同村の肝煎・弥五兵衛との連名で、白尾村を含む浜金津組の十村・岩佐清兵衛に対して出願し、石川郡の「相川村浦」へ積廻している¹⁹⁾。積出しの浦は明記されていないが、特殊な事情がない限りは白尾浦からの積出しと思われる。

白尾村の事例のように、基本的に願書類には積出しの浦が表れてこない。その意味で【史料2】は、出来した地域と積出しの浦が異なる場合があったことが分かる点で注目される。羽咋郡・河北郡域における干鰯の積出しにおける北川尻浦の機能とも関わる点であり、その分析は今後の課題としたい。

（3）手形・仕切書類にみる輸送—今浜浦を中心に

次に、干鰯輸送の経路や形態がより具体的に分かる事例として、今浜浦を取り上げる。

今浜村の山田文左衛門家に伝来した資料群には廻船関係の史料が含まれる²⁰⁾。宝達志水町教育委員会所蔵分から干鰯関係を抜き出したのが、【表4】である。計13点のうち、No.118を含む11点が「午年」の史料と見られる。年代観を推定する手がかりとして、まずはNo.74の「鰯干加売切証文」（画像①）から始

【表4】山田家文書（宝達志水町教育委員会所蔵分）の干鰯関係資料

番号	資料名	年月日	差出・宛名	備考	図版
67	今浜干加代差引書	卯6月14日	平本屋平次郎 →長中屋長左衛門	印文「加州宮腰平本屋平次郎」	
74	鰯干加売切証文	巳5月6日	今浜彌師惣代清五郎・同商人惣代瀬助 →同所文左衛門		画像①
73	運上中勘書上	午4月22日	松任木助→今浜船主様	裏書「松任木助手形入」	画像②
75	買仕切（干鰯代）	午5月27日	北川屋久兵衛・平松屋小助 →八百屋嘉兵衛・山田や文左衛門	印文「加州松任北久」	画像③
145	銀子手形	午5月28日	法仏村吉右衛門・請人八郎右衛門 →金沢八百屋嘉兵衛	干加代1貫150目	画像④
80	干加代保銀書上	午6月	竹松村清吉・請人甚兵衛 →金沢八百屋嘉兵衛	干加代500目	
146	保銀預り証文	午6月	徳光村助左衛門・請人長左衛門・同小兵衛 →金沢八百屋嘉兵衛	干加代670目	
72	買仕切（今浜干鰯代）	午6月13日	縮屋三之丞 →八百屋嘉兵衛	印文「加州野々市縮屋三之丞」	画像⑤
78	買仕切（今浜干鰯代）	午6月13日	（魚屋与右衛門） →八百屋嘉兵衛・今浜文左衛門	印文「加州野々市魚屋与右衛門」	
79	買仕切（今浜干鰯代）	午6月13日	（魚屋与右衛門） →八百屋嘉兵衛・今浜文左衛門	印文「加州野々市魚屋与右衛門」	画像⑥
147	銀子延納願	午8月6日	野々市村魚屋与右衛門 →今浜文左衛門		画像⑦
83	干加代金書上	午11月	相川与右衛門→今浜文左衛門		画像⑧
118	干加代金書上	年末詳	相川浦半右衛門 →今浜山田屋文左衛門	印文「加州相川半右衛門」	画像⑨

【出典】番号は「今浜山田家文書目録」による。目録は、宝達志水町ホームページ内の埋蔵文化財センターの「収蔵資料について」（<https://www.hodatsushimizu.jp/soshiki/bunkazaishitsu/7425.html>）にて公開されている（最終閲覧2026年3月7日）。

【史料3】

売附之覚

一、四千俵計り 鰯干加

但シ壹俵二付八匁五分式厘替

代

内四貫目 手附銀請取

残銀当月廿二日切之定

右之通り売渡申候所、相違無之候ニ付、売切証文如件

巳五月六日 今浜獵師惣代

清五郎（花押）

同 商人惣代

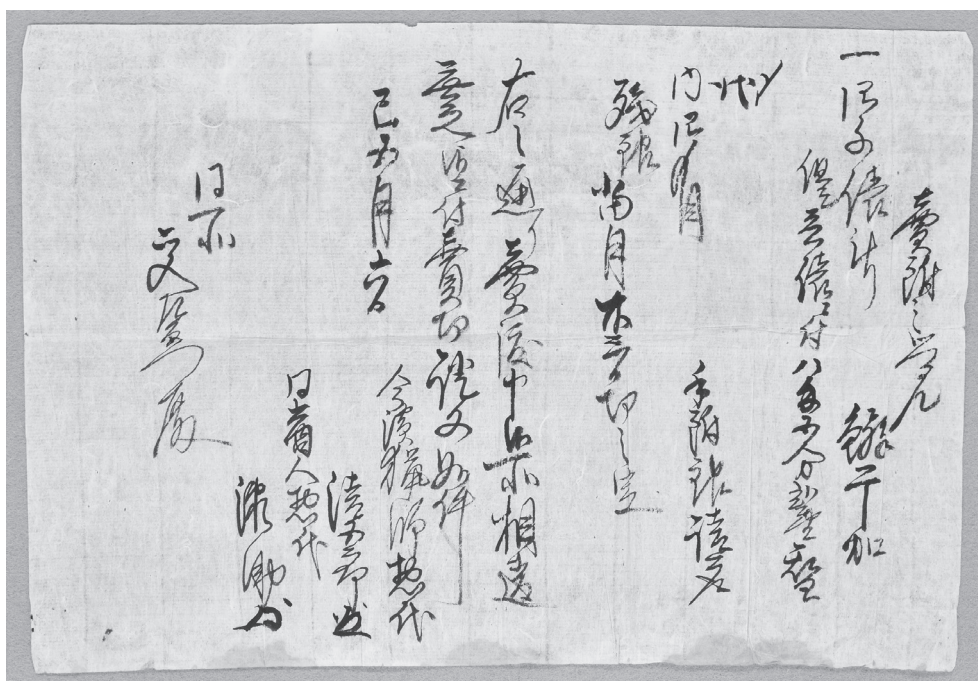
瀬助（花押）

同所

文左衛門殿

今浜の獵師惣代から山田文左衛門が購入した鰯干加四、〇〇〇俵の証文である。この証文の年代を推定する手掛かりが、鹿島郡矢田組の十村・真館家伝来の文書にある。真館文庫「安政四年 鰯干加出入指引帳」は、裏表紙に「能州今浜浦山田屋文左衛門」と記される全60丁の帳簿である²¹⁾。

内容は、安政四年（一八五七）の巳年分に出来した干鰯の取引記録である。計五〇件余りの干鰯販売元の取引状況が、一丁分の裏表に記



画像① 鰯干加売切証文（山田家文書No. 74）

され、「文左衛門入」などと記される売買先の内訳と、「太左衛門」となどと記される恐らくは干鰯の製造者（猟師）の内訳が記されている。【史料3】との関係では、多くの場合、文左衛門は売買先に、清五郎は製造者の方に名前が登場する。

【史料3】は文左衛門の購入分を一括して猟師の惣代の立場から清五郎が証明した書類といえそうである。以上のことから、No.74は安政四年のものとしてよい。

次に、【表4】のうち計11点を数える「午年」の史料群の年代についてである。やや短絡的ではあるが安政四年の翌年の安政五年（一八五八）が候補となる。こちらについても、帳簿による傍証がある。

【表4】には挙げていないが、山田家文書No.122の「万覚帳」は、安政五年正月からの山田家の取引の記録である。同村内の取引相手と見られる「善助」「勘六」の二項目で「干か」の記載があり、この年に干鰯を仕入れていたのは間違いない。根拠に欠けるが、午年分は安政年間の取引と仮定して進めたい。

午年分の11点は、「A」入津関係の書上（No.73）、「B」仕切書（No.75・72・78・79）、「C」保銀借用証（No.145・80・146）、「D」代銀支払い延期願（No.147）、「E」積入れの覚書（No.83・118）に分類することができる。

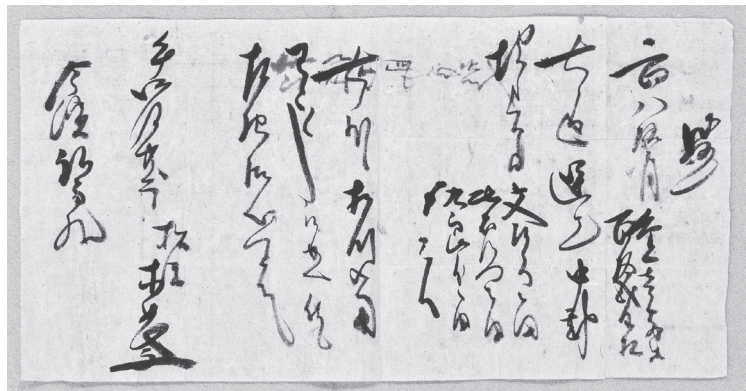
【A】は、四月二日付の「運上中勘書上」（画像②・1）である。「相川浦」への入津にあたっての手数料の書上と見られ、文左衛門を含む三名の入津について運上等の課税がなされている。裏面（画像②・

2）に「松任木助手形入」と記載があり、相川浦に近い松任町で発行された入津手形が付属していた可能性がある。

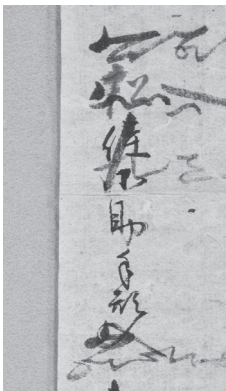
次に、「B」の仕切書であるが、五月二七日付の北川屋（加州松任）らへの売却（画像③）と、六月一六日付の縮屋および魚屋（加州野々市）への売却（画像⑤⑥）とがある。

いずれも、仕切書の宛名、つまり売主として文左衛門と共に八百屋嘉兵衛が名を連ねているのが特徴である。

この八百屋嘉兵衛については、「C」保銀関係の3通から、金沢の商人と分かる。そのうち1通を紹介すると、法仏村（現、白山市法仏町）の吉右衛門が八百屋嘉兵衛から一貫一五〇目で干鰯を仕入れた史料となっている（画像



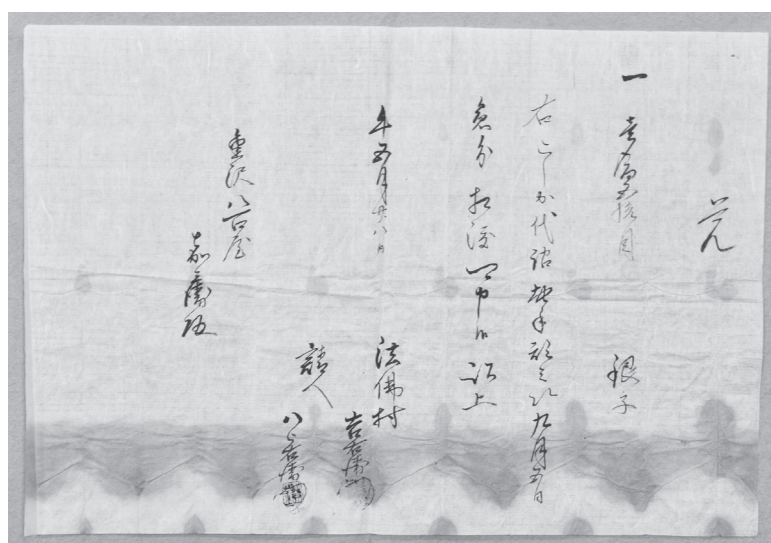
画像②-1 運上中勘書上（山田家文書No. 73）



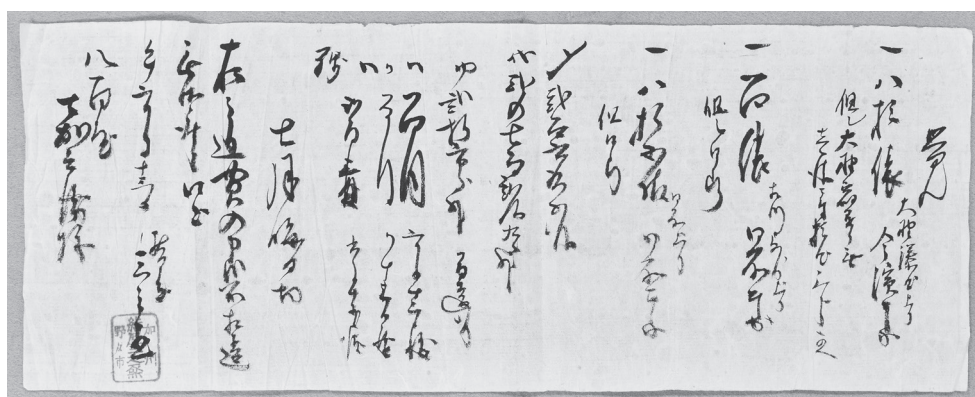
画像②-2



画像③ 買仕切（干鰯代）（山田家文書No. 75）



画像④ 銀子手形（山田家文書No. 145）



画像⑤ 買仕切（今浜干鰯代）（山田家文書No. 72）

④。代銀は九月五日までの支払いということで手形を交わした。残りの二通も、竹松村（現、白山市竹松町）と徳光村（現、白山市徳光町）という松任町周辺域の村による購入である。八百屋については、詳細は不明であるが、肥料商のような存在ではないかと思われる。

ここで、「B」のうちNo.79の魚屋からの仕切書（画像⑥）が、「D」代銀支払い延期願と「E」積入れの覚書と一連のものであるため、詳しく取り上げたい。

【史料4】 覚

一、百三拾五俵 今浜干加

代老貫三百七拾七匁

内、百目迄相渡候

老貫貳百七拾七匁

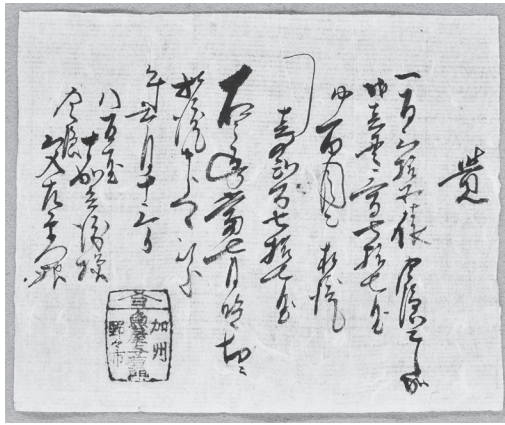
右之通り当七月晦日切二

相渡申上候、以上

午六月十三日 印

八百屋嘉兵衛殿

今浜文左衛門殿



画像⑥ 買仕切（今浜干鰯代）（山田家文書No. 79）

る様に願っている。

【史料5】 覚

五月廿三日 大野湊屋方請取

同廿八日 相河半方請取

一、五拾俵 〃請取

六月十五日 〃請取

一、貳拾貳俵 〃請取

〃百貳拾七俵 十匁貳分五厘

代老貫貳百九拾五匁四分

内、百三拾四匁 札五拾目貳枚与

内、八百目 銀子只今上ル

老貫百六拾老匁四分三厘

三百六拾老匁四分

九貫十二文

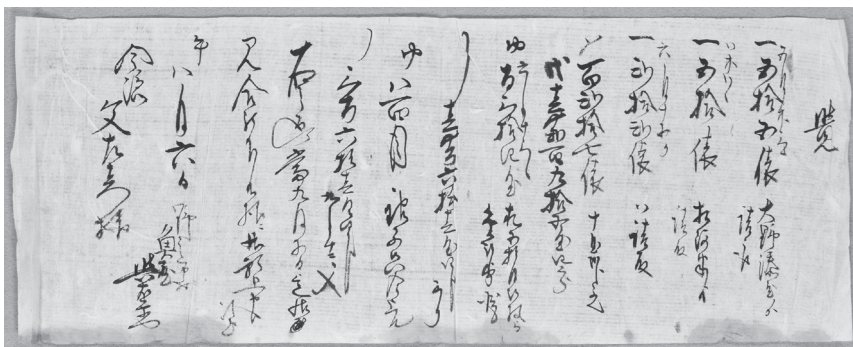
右之通り当九月五日迄被

見合被下候様ニ被願上申候、以上

午八月六日 野々市村

魚屋 与右衛門

今浜 文左衛門様



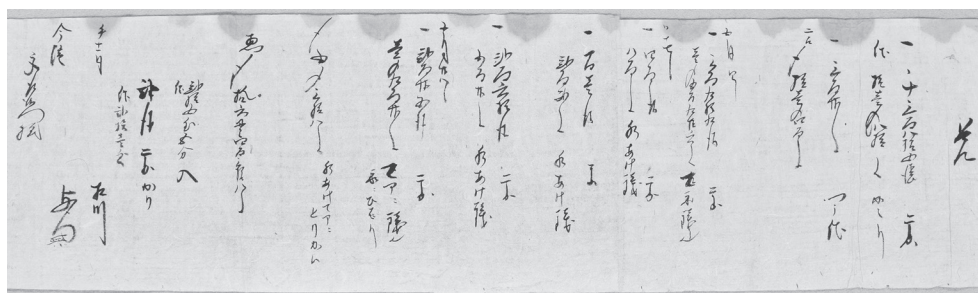
画像⑦ 銀子延納願（山田家文書No. 147）

【史料5】について、本稿の関心から重要なのは、干鰯の輸送経路が記されている点である。一二七俵を三回に分けて入手しており、五月二三日には大野浦の湊屋から、五月二八日と六月一五日には相川浦の「半（半右衛門）」から請取っている。

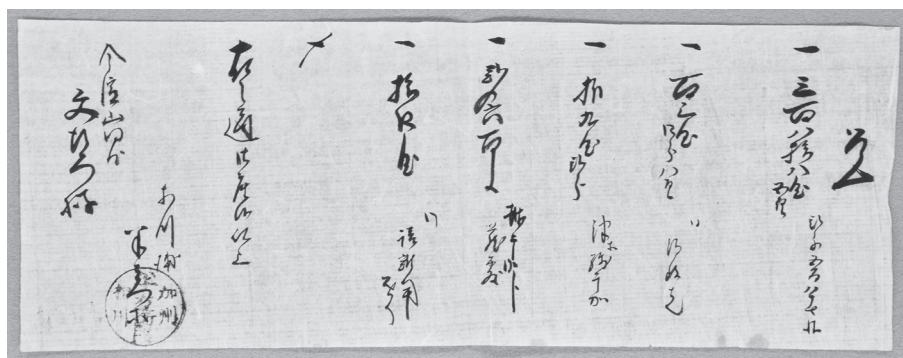
「E」の積入れの覚書2通は、相川浦での積入れの記録であり、そのうちNo.118が【史料5】の相川浦半右衛門を経由した際の諸費用の記録（画像⑨）である。「蔵敷」などの倉庫での保管料が記されており、半右衛門は船問屋の類と思われる。一方のNo.83は、「相川与右衛門」を経由しての取引（画像⑧）だが、No.72の縮屋の仕切書にも与右衛門の名が見えることから、こちらも野々市へと売却されたと見られる。

以上のことを整理すると、今浜で生産された干鰯を今浜の山田屋文左衛門が大野浦や相川浦に輸送し、野々市の縮屋や魚屋といった商人が買い入れたということになる。問題は、それがその後、どのように流通したかであるが、【史料5】で魚屋が支払いを延期した後の期日（九月五日）と、「C」保銀関係の3通における支払い期日が、九月五日で一致する点が注目される。実際の干鰯の購入者である法仏村などの村方からの依頼で、魚屋が八百屋からの購入を仲介していた可能性が考えられる。

山田家文書から分かる流通経路は以上である。この取引について一点付言すると、今浜で生産された干鰯が、「今浜干加」として銘柄（ブランド）が付けられている点が興味深い。そうした名称が表れるのは、野々市の商人が購入した際の【史料4】からであり、流通の過



画像⑧ 干加代金書上（山田家文書No. 83）



画像⑨ 干加代金書上（山田家文書No. 118）

程で産地が意識されている点を看取することができるのである。

これまで羽咋郡域で生産された干鰯の輸送先は必ずしも明らかではなかったが、山田家文書の関係資料から、石川郡の法仏村や竹松村といった松任地域の村々が移出先の一つとして明らかになった。今回、検討できたのは一年間分の記録であるため、通時的な把握が今後求められる点を強調しておきたい。

結びにかえて

以上、雑駁な事例紹介となつてしまつたが、能登外浦で生産された干鰯が、大野浦や相川浦といった加賀方面の湊・浦を経由して石川郡へと運ばれる流通構造の一端を明らかにした。

今後の課題として挙げられるのは、加賀藩領内の干鰯輸送の変遷をより広域的な視点で捉えることである。特に、年貢米や塩の輸送を中心とする加賀藩の流通機構の中に、干鰯の輸送をどのように位置づけるかという課題がある。

他の地域については、房総半島の事例として、原直史氏による九十九里浜産魚肥の流通構造に関する研究がある⁽²⁾。問題の所在が示される中で、生産・流通の全体構造の中に運輸の担い手を位置付けることの重要性が指摘されており、こうした事例に学びながら検討を進めたい。

なお、令和七年（二〇二五）より、本稿でも使用した喜多家文書の

本格的な整理作業が始まった。作業の進展により、加賀藩の流通史分野についても研究が深化することを期待したい。

註

(1) 外浦の概念が示す範囲、特にその南限は必ずしも明確ではない。一八世紀中頃の紀行文「能登名跡志」では、羽咋郡今浜宿の項に「今は内外の追分の駅なれば、獵師商家数多出来、内浦へ行は子浦にて馬次也。外浦に行には一宮に而馬次也」『能登名跡志』石川県図書館協会、一九三一年、五頁）とあり、今浜宿あるいは一宮宿から北側が外浦として認識されているため、本稿が対象とする今浜浦周辺域を含むとは限らない。ただし、これまでの干鰯輸送の研究が富山湾側を対象として進められてきた状況に鑑み、本稿はその反対側の地域を対象とすることを示す意図から、便宜的に羽咋郡域を含む概念として使用する。

(2) 和泉清司「近世前期日本海における地廻り海運の展開」『近世の流通経済と経済思想』岩田書院、一九九八年〔初出は柚木学編『日本水上交通史論集』文献出版、一九八七年〕。

(3) 一七世紀後半の加賀藩の津留法令を見ると、他国米と他国塩の買入禁止に関わるものが多くを占める。高瀬保「全国市場確立に伴う加賀藩の対応策」『海史研究』第二五号、一九七五年を参照。

(4) 『河合録』六之巻所収の「屎物他国出御制禁之事」（藩法研究会編『藩法集』第六巻続金沢藩、創文社、九一六頁）からは、寛文元年（一六六一）に御算用場から出された干鰯の「他領・他国」への移出を禁じる法令を根本とし、それ以降の移出制限の強化、あるいはその緩和が模索されていた様子を伺うことができる。

(5) 岡部家文書 No. 4885（宝達志水町教育委員会蔵）。以下、岡部家文書の資料番号は、『十村岡部家文書目録』（石川県立歴史博物館、一九八九

年)による。

- (6) 高瀬保『加賀藩流通史の研究』(桂書房、一九九〇年)には一連の成果がまとめられている。干鰯の流通に関わるものとしては、第六章「高岡木町の特権成立と崩壊」。
- (7) 同右、四〇四〜五頁。他に、能登半島内浦の流通を対象とした研究に、深井甚三「能登内浦の湊町と富山湾岸地域流通の展開」(渡辺信夫編『近世日本の都市と交通』河出書房新社、一九九三年)がある。内浦の干鰯生産に関わるものでは、中村只吾「イワシ漁と海辺の暮らし」(武井弘一編『イワシとニシンの江戸時代―人と自然の関係史』吉川弘文館、二〇二二年)で、氷見浦・灘浦の事例が検討されている。
- (8) 武井弘一「文政期の魚肥と農業経営―加賀藩を事例に―」『地理歴史人類学論集』第一四号、二〇二五年)、同「天明期の凶作と砺波平野」『人文学報』第二二二号、二〇二四年)など。
- (9) 上田長生「魚肥と藩領社会」(前掲『イワシとニシンの江戸時代』所収)。
- (10) 喜多家文書No.3914のうちの一点(宝達志水町教育委員会蔵)。資料番号は、上多津太郎編『喜多家文書目録』(喜多家、一九五九年)による。
- (11) 岡部家文書No.5971(宝達志水町教育委員会蔵)。
- (12) かほく市史編集専門委員会編『図説 かほく市の歴史と文化』(北國新聞社、二〇二四年)九二〜三頁。
- (13) 『押水町史』(石川県押水町役場、一九七四年)三四六〜四七頁。
- (14) 『相川新町史』(松任市相川新町内会、一九九九年)一六一頁。
- (15) 岡部家文書No.5970(宝達志水町教育委員会蔵)。
- (16) 註(9) 上田論文、七九頁。
- (17) フラッシュェム氏収集文書No.403/250(石川県立図書館蔵)。請求番号は、

「石川県立図書館蔵書検索システムSHOSHIO ISHIKAWA」による。

- (18) この頃、喜多市十郎は廻船経営を行っていたとされる(『能登国喜多家』喜多家保存会、一九八八年)。このことを踏まえると、喜多市十郎自身がこの輸送に関わった可能性もある。
- (19) 岩佐家文書No.333(石川県立歴史博物館蔵)。資料番号は、「岩佐家文書目録」『石川県立郷土資料館紀要』第二号、一九七一年)による。
- (20) 山田文左衛門は遅くとも嘉永年間(一八四八・五四)に廻船を所有し、船主・山田屋として廻船業を営んだ。詳しくは、ロバートG・フラッシュェム、ヨシコN・フラッシュェム「船主・沖船頭訴訟一件」『海事史研究』第一九号、一九七二年)、拙稿「今浜山田家文書の紹介と翻刻―館蔵の廻船経営文書を中心に―」『石川県立歴史博物館紀要』第三三号、二〇二四年)を参照。
- (21) 真館文庫No.248(石川県立図書館蔵)。資料番号は、『十村役真館家文書目録 加賀藩士小幡家文書目録』(石川県立図書館、一九九三年)による。
- (22) 原直史「近世両総地域における物流の構造―九十九里産魚肥と年貢米を中心として―」(吉田伸之・高村直助編『商人と流通―近世から近代へ―』山川出版社、一九九二年)。

「付記」資料閲覧にあたり、宝達志水町教育委員会・麦居和真氏に大変お世話になりました。ここに記して御礼申し上げます。

石川の歴史遺産セミナー要旨集

当館では、県内外の研究機関並びに研究者の協力を得ながら、古代から現代に至る当地の歴史を多角的な視点から再検証することを目指し、「石川の歴史遺産セミナー」を開催している。平成三十一年度の第三十二回まではシンポジウム形式を採り、講演録の刊行を続けてきた。コロナ禍による中断をはさんだのち、令和四年度からは、リレー講義へと開催形式を変更して再開し、当館の紀要にてその実施内容の紹介を行っている。

今回は、令和七年度に実施した、第四十一回と四十二回のセミナーの開催趣旨および講座要旨を収録する。第四十一回は、同年度夏季特別展「未来へつなぐ―能登半島地震とレスキュー文化財―」の、四十二回は、秋季特別展「花開く九谷―十九世紀加賀藩のやきもの生産ブーム―」の会期中に実施したものである。

第四十一回「人びとは災害とどう向き合ってきたのか

―歴史学の視点から―

日本列島は、長い歴史の中で数々の自然災害に見舞われてきた。また、社会に危機をもたらす災いという点では、疫病も災害と言える。こうした災害と社会との関係については、歴史学には幅広い事例の研

究蓄積がある。

そして、近年は地震や水害が頻発し、世界的に影響を及ぼした新型コロナウイルス感染症の流行もあったが、現代社会はそうした災害と向き合い、対応していかねばならない。とりわけ、令和六年能登半島地震および奥能登豪雨からの復興は、長期的な支援や展望を必要としている。

今回の石川の歴史遺産セミナーは、最新の研究成果から過去の人々が災害とどのように向き合ってきたのかを学び、災害と隣り合わせである現代日本を生きる指針とすべく開催した。

日本古代史に関して、岡山大学文明動態学研究所長の今津勝紀氏に、飢饉・疫病に脆弱な古代日本の社会の実態や、飢疫と当時の宗教や支配体制との関係についてお話しいただいた。日本近世史に関して、金沢大学人間社会研究域学校教育系教授の武井弘一氏に、凶作や飢饉が天候不順といった「天災」によるものではなく、近世社会のしくみが原因となった「人災」としての側面が存在したことをお話しいただいた。日本近代史に関して、聖心女子大学現代教養学部史学科教授の土田宏成氏に、倒壊や火災以外に津波などの被害もあった複合災害としての関東大震災について、都市部だけでなく農山漁村にも目を配った被害と復興の実態をお話しいただいた。いずれも、災害について向き合わざるを得ない我々にとって、重要な論点をご提供いただいた。

令和七年八月二日（土）

「日本古代の災害と社会」

今津 勝紀（岡山大学文明動態学研究所所長）

列島固有の信仰世界では、災害は「ワザハヒ」（禍、災）と称された。これは「サキハヒ」（幸）と対になるものであり、それは神々もたらす祟りであったが、六世紀以降、中国大陸・朝鮮半島から伝来した儒教や道教、仏教によっても説明されるようになる。

天平六年（七三四）四月に生駒断層帯が引き起こしたと考えられる大地震が発生し、多くの犠牲者がでるが、当時は聖武天皇の治世下で、天皇は地震の直前に被害地域を行幸しており、そこは聖武天皇と光明皇后にゆかりの地であった。天の譴責として災害が起こるとされたので、聖武天皇はこれを受けて、天下に大赦を実施する。その詔には「朕が訓導の不明に由り、民多く罪に入る。責は予一人に在り、兆庶に関かるに非ず」（『続日本紀』天平六年七月辛未条）とあるように、その責任を統治者たる自分にあることを明言している。そこで天皇は、人々の安全と生活の保全には仏教が最も効果的と考え、一切経の写経事業を開始するとともに、大乘經典のなかで最も重要とされる大般若経の転読を命じること、事態の收拾をはかるのであった。

水稻耕作を基盤とする古代においては、水の管理のために神に対して、祈雨（黒毛馬を奉納）と止雨（白毛馬を奉納）を頻繁に祈るのだが、当時の人々の生存基盤は脆弱であり、慢性的な飢饉の状態にあった。そのため、わずかな気象変動でも凶年が発生し、種稲の貸付制度

である出挙に依存していた人々の生活を直撃した。凶作で返済不能に陥った場合、身を役して償う（債務奴隷）こととされており、凶年には子を売るなどの人身売買も行われた。また飢饉が発生すると必然的に疫病が蔓延し、飢疫として多くの人が亡くなった。天平九年（七三七年）の疫病の大流行では、被災地域の年間死亡率は推定で二五〇％（三五〇％程度に達したと考えられている。平安時代前期の貞観年間にも疫病が流行し、隠岐国では推定で当時の人口の少なくとも三割強が亡くなっている。これは通常時の死亡率の約四倍から五倍にあたり、こうした飢疫の流行により地域社会は壊滅的な打撃を被るのであった。

古代において、疫病を引き起こす病原体の宿主となる人口の最大の集中地は都城であり、上京する脚夫や役民がそれを媒介することもあった。古代国家の支配の仕組み自体が、当時の人々の生存を脅かす重要な要因になっていたのである。

令和七年八月十日（日）

「近世中期の気候変動と能登奥郡」

武井 弘一（金沢大学人間社会研究域学校教育系教授）

日本近世で広く作付けされていたのはイネ（稲）である。日射量が少なければイネは生育不良となり、米の実りも悪くなり、食糧危機（凶作・飢饉）が生じてしまう。

本講演の目的は、近世中期の気候変動と食糧危機とのありようにつ

いて明らかにすることである。そのために、近世有数の米どころである加賀藩領のうち、能登奥郡をクローズアップした。能登奥郡とは、能登半島の北端に位置する能登国鳳至郡・珠洲郡をさす。その視点は、次の三つである。

- ① 気候、新田開発、百姓の四季という三つの視点から、近世中期はどのような時代なのかをおさえる。
- ② 食糧危機の現実を知るために、能登奥郡を事例にしつつ、元禄期（二六八八～一七〇四）・宝暦期（一七五一～一七六四）の動向を追っていく。

- ③ ①②をふまえたうえで、なぜ食糧危機に陥ったのか、その根本的な原因についての評価を試みる。

これらの視点から、次のことが浮き彫りとなった。

近世中期は小氷期であり、現在とくらべると寒冷化に直面していた。これはイネにとつて、けつして好条件とはいえない。それでも、新田開発が進み、中期には耕地面積がピークに達して、百姓は稲作を中心とした農業経営を成り立たせることになった。

しかし、近世中期は寒冷であったため、能登奥郡では食糧危機が起こった。元禄期には稲穂の白化現象をきっかけに凶作が起こり、翌年には飢饉へと連鎖していった。宝暦期には降雹をきっかけに大凶作が生じ、百姓たちは年貢米を滞納してしまふ。

たしかに、寒冷化は食糧危機の引き金となった。それでも、これが根本的な原因とはいえない。イネの品種に注目すると、仮に早稲が植

えられていたならば、白化現象も降雹も避けることができたからである。飢饉や年貢米の滞納も、それらのプロセスを詳しくおとてみると、役人の独断でもたらされていたことが判明した。

食糧危機に見舞われたのは、気候変動というより、むしろ稲作を営み、村社会で生きる百姓たちの判断に大きく左右されていた。それでも、それは「能登奥郡の百姓の責任ではない」。なぜならば、近世の百姓がイネを作付けしていたのは、領主に年貢米を納めることが義務づけられていたからである。

このような近世の社会のしくみこそが、食糧危機が生じた根本的な原因といえる。したがって、近世の食糧危機は「人災」と評価することができよう。

令和七年八月二十四日（日）

「広域複合災害としての関東大震災―都市と農山漁村の被害と復興―」

土田 宏成（聖心女子大学現代教養学部教授）

大正十二年（一九二三）九月一日に発生した関東大震災では、約一〇万五千人の死者（不明者を含む。以下同じ）を生じた。特に地震後の火災により東京などで被害が大きかったこと、流言に基づく朝鮮人などに対する殺傷事件の発生が知られている。しかし、関東大震災は、名前の通り広域にわたり、火災に加え、土砂災害や津波による被害もあつた複合災害である。そこで今回は都市部に加え、農山漁村の被害と復興にも注目し、関東大震災の全体像と関東大震災の現代的な

意味を再検討したい。

関東大震災では、東京・横浜という大都市で、おもに火災によって大きな被害が生じた。両市の死者は関東大震災の死者全体の約九割を占めた。ただし、それ以外の地域でも実数にすれば一万人以上の死者を伴う、様々な被害が生じているのである。震源に近い関東地方南部などの農山漁村地域では、家屋の倒壊・焼失はもちろん、山間部での大規模な土砂災害、沿岸部での津波、農業関係では用水路の被災、農地の陥没、漁業関係では被災した石油貯蔵施設からの重油流出による被害、土地の隆起による漁港の機能喪失、海底地形の変動による漁場の変化が起きていた。

被害を拡大させた要因として、火災については、地震発生が昼食などで火を使う機会が多い時刻だったこと、強風という天候条件などがあつた。土砂災害については、地震発生前の降雨、発生後の大雨や余震が崩落を助長した。社会的な混乱については、中央政府や通信手段・メディアが被災し、その機能が損なわれただけでなく、首相の病死に伴う内閣の交代の最中であつたことも影響している。こうしたことが人々の不安を増幅させ、政府や国民の間にあつた朝鮮人への差別・偏見、反体制運動への敵意・警戒が爆発、殺傷事件を引き起こすことになった。

政府は救護・警備などの緊急対応に当たった後、帝都復興事業に着手、街路や公園、橋梁の整備・建設などのインフラ整備を実施した。それによって東京や横浜が近代的な都市に生まれ変わったことはよく

知られている。いっぽうで農山漁村を対象とした施策としては、通常より手厚い国庫補助を付して、砂防工事や林野復旧工事、用水路工事、漁船建造、漁具購入、漁港復旧などの事業が行われた。こうした都市や農山漁村で行われた施策は、以後の各種災害にも適用される。

関東大震災の研究では、従来の都市部に加え、農山漁村地域にも注目することで、これまで知られていなかった側面が明らかにされ、新たな教訓が導き出せるのではないか。

第四十二回「やきものにみる加賀藩の産業」

江戸時代後期には、技術の広がりや諸藩の産業振興策の影響により列島各地で数多くの窯が成立し、やきもの生産が行われた。加賀藩でも多くの窯が築かれ、生産の広がりには能登半島にまで及び、文献史料や出土資料から金沢などの城下町にも流通していたことが知られる。これら「再興九谷諸窯」の研究はこれまで伝世品に注目した研究が中心であつたが、近年では窯跡や、金沢・小松などの城下町遺跡の発掘調査の成果を活用した研究も進められている。

本セミナーは令和七年度秋季特別展「花開く九谷―十九世紀加賀藩のやきもの生産ブーム―」に関連して開催したもので、石川県を代表するやきもの産業として知られた「九谷焼」と「瓦」に着目し、江戸時代後期における生産の実態に迫った。講師には元（公財）石川県埋蔵文化財センター所長・藤田邦雄氏と加能地域史研究会副代表・袖吉

正樹氏、金沢大学名誉教授・佐々木達夫氏を迎えた。藤田氏には江戸時代後期の加賀における陶磁器生産の展開について、袖吉氏には近年まで「能登瓦」の一大生産地であった高松瓦の生産について、佐々木氏には窯業史における「九谷焼」の位置づけについてご解説いただいた。

令和七年十月十一日（土）

「再興九谷―その新たなはじまりと系譜―」

藤田 邦雄（元公財）石川県埋蔵文化財センター所長）

江戸時代後期の十九世紀に金沢以南の地に興った陶磁器諸窯をいわゆる「再興九谷」と呼ぶが、そのはじまりの多くは江戸時代前期の九谷焼の再興を目指したのではなく、他国産陶磁器（唐津・今里・有田・京の清水など）の市場独占に対抗するための国焼の創設にあった。そして、それらの起点となったのが金沢の春日山窯、能美の若杉窯、江沼の吉田屋窯の三窯である。

春日山窯は金沢城下で用いる生活食器の国産化を目指したはじめての窯場で、京の名工青木木米を招聘したことでよく知られている。木米は瓦窯（だるま窯）での試し焼きなど入念な準備のもと、肥前系の磁器焼成技術をもつ本多貞吉の参画を得て、当窯で自身初となる磁器製品（南京焼）を完成させる。卯辰山麓に築かれた登窯は、残された絵図から関西系（信楽・京）の窯構造をもつとされ、以降に続く金沢・能美等の関連諸窯全般に受け継がれたものとみている。その

後、木米は金沢城二ノ丸御殿の焼失をきっかけに京へ戻ることになるが、金沢側では最新設備を備えた名工木米監修の窯場一式がそのまま残り、木米側では磁器焼成が可能な登窯構造及び薪窯による上絵付技術の習得が図られるなど、短期間ではあるが双方ともに利のある金沢滞在であったとみられる。ただし、城下における当窯製品の出土は限定的で、当時の生活食器の主流を占めることはなかったようである。

若杉窯は春日山窯を離れた本多貞吉が、当地の十村林八兵衛の要請を受け小松丘陵の裾野に築いた窯場で、春日山窯と同じ関西系の登窯構造をもつことが発掘調査によって確認されている。領内各地の産業振興施策と連動するように藩の直営となり、積極的な保護政策のもと御国焼の量産化に向けた生産質量の拡大が図られていく。そうした中、窯室の失火により隣村八幡村への窯場移転を余儀なくされるが、調査では古墳の墳丘斜面を利用して築かれた登窯一基とその関連遺構がみつきり、登窯を取り囲むようにして堆積した物原からは膨大な量の陶磁器・素焼き・窯道具・瓦類が出土し、藩窯の威容を彷彿とさせる。なお、特徴的な製品の一つに、当時金沢で頒布されていた略暦（月頭暦）を写した暦手碗があるが、近年では製作年代を推定できる紀年銘資料として、金沢城下からも一定量の出土が確認されている。

吉田屋窯は大聖寺の家柄町人豊田伝右衛門が開いた窯場で、その目的はかつて大聖寺藩で焼かれていたとされる色絵磁器九谷焼の再興にあった。十七世紀の九谷古窯に隣接して築かれた登窯は、同じ肥前系の窯構造をもつ古窯を手本とした可能性があり、先人陶工への真摯

な敬意と製品造りに向けての強い覚悟がうかがわれる。なお、吉田屋窯の新たな色釉開発に関しては、単発的な九谷風青手製品の出土が認められる若杉窯での開発準備を想定し、その当事者として若杉窯と吉田屋窯の両窯で色釉の探求に携わった小松の陶工栗生屋源右衛門あおやげもんの関与が不可欠であるとした。そして、そうしたこだわりの技法の数々は、伝統九谷を支える重要な技術系譜の中に今も生き続けている。

令和七年十月十八日（土）

「高松瓦の生産について」

袖吉 正樹（加能地域史研究会副代表）

旧高松町地区（現かほく市）は「能登瓦」の一大産地として知られ、近年においても瓦製造業は町の主要な基幹産業の一つであった。瓦を製造するには、良質の粘土と、それを焼き上げるための豊富な燃料（薪）が必要となるが、旧高松町地区はこうした資源に恵まれた土地であり、瓦焼が盛んとなり、瓦の生産量も次第に増えていったのである。

旧高松地区における瓦生産の時期については、文化五年（一八〇八）十一月に中沼村の金屋九右衛門が、来年夏から村内で瓦を焼くことを藩に願い出ており、これが瓦生産の始まりとされている。なお、瓦細工人は越前国から多く雇われ、瓦細工人から瓦焼の指導を受けた。

瓦焼稼ぎが盛んとなると、共通の燃料となる薪をめぐつて、

製塩業を営む塩土との間で争いが起きてくる。安政二年（一八五五）五月十五日付の史料によると、羽咋郡押水組中沼村・二ツ屋村の七人は、瓦焼稼ぎを営んでいたが、在所の塩土村々から薪に指支えがあるため、嘉永二年（一八四九）に瓦焼が指止められる。しかし、他に稼方も無いため、松枝に代わり牧木を用いた登窯を拵えて、試験したところ出来方も良く、塩土の薪の指支えがないとのことで、聞届けてほしいと願ひ出ている。牧木を燃料とする登窯に変更し、窯五枚以外は増やさないようにするとしている。

それに対して、塩土たちの立場はどうであったのか。同じく安政二年五月十五日付けで、中沼村・二ツ屋村・免田村・北川尻村・米出村の五か村の塩土たちは、瓦焼の人々が薪を買い集めていくので、塩焼村々には手に入らない。そのため、瓦焼の指止めと窯数を増やさないようにしてほしいことを願ひ出ている。

安政二年（一八五五）七月八日付けの史料によると、瓦焼稼ぎを指止めるようにとのことであったが、中には瓦焼をする者もいるとのこと。このことは沙汰の限りであり、小屋と窯の取払い、縮方を厳重に相心得るように御算用場から申し渡しがあった。中沼村平八など五人は、瓦焼稼ぎは指止めていたが、小屋は取払っていなかった。去年より小屋内に窯形を替え、光窯に築替え、光窯で少々試験焼をした。そのことは、沙汰の限りであるとし、指預けを申し渡されている。

塩は藩の専売品で重要な財政源であったため、嘉永期になると塩焼の薪に指支えがあるとし、瓦を焼く松枝に制限が課され、瓦焼稼ぎも

指止られている。しかし、燃料の制限や製造の禁止が出されても、瓦職人は松枝の替わりに雑木を燃料とし、一定以上の窯数を増やさないようにし、細々ながら瓦焼を続けて来たのである。その結果、慶応四年（一八六八）六月押水組の瓦屋十八人が、藩の施設である銃卒稽古所の屋根用瓦六十八坪を献上するまでに瓦焼稼ぎの規模は拡大している。

令和七年十一月一日（土）

「窯業史から見る九谷」

佐々木 達夫（金沢大学名誉教授）

美術品として評価が高い九谷焼は、江戸時代後期に白く硬い磁器と施釉陶器を焼き、ともに地域の生活用品となる。世界各地で十九世紀は日常生活の必需品となる磁器が流通する。加賀能登の十九世紀九谷は、生産技術系統が十七世紀九谷焼の再興でなく、日本各地で同時に誕生した新興磁器窯である。大量生産で磁器のみを焼き、全国販売する伊万里焼と違い、九谷焼を含む地方窯は施釉陶器を主に染付や色絵磁器も焼き、地域内に多くを販売した。

中世の加賀能登は窯業が途切れること、中国の磁器生産、窯業の地域的特質と生産背景、産地独特の陶磁器、九谷焼と瓦生産、今は九谷で焼かない九谷焼の名称も話題にした。伊万里磁器誕生を取り上げ、海外から注文を受ける有田と、販路の狭い九谷にそれぞれの特徴が生まれた。

十九世紀は磁器生産が日本各地に拡散し、地元陶石が産地を生む地域と、江戸中期に天草陶石を使用した九州各地の新たな産地がある。

四国や関西、加賀の新興磁器窯は地元陶石の発見で産地を生む。加賀藩の需要と産業の発展、江戸時代後期の多様な窯業地、大産地と新興窯業地の関係、伊万里焼流行と九谷焼増産も話題にした。瀬戸物屋、陶石が産地を造る、藩窯と殖産興業、町人の陶磁器、大規模産地と小規模産地の共存、税金、陶磁器の用途の多様性、大量生産地の盛衰と陶工移動からも九谷焼を語れる。

加賀能登地方は、古代窯業から中世窯業への地域内技術継承が無く、近世初期も地域内の中世技術継承が見られない。近世初期の窯業技術は十七世紀後半で絶え、同じ地域の十九世紀の窯業技術に継承されない。加賀地域は新たな技術を他地方から取り入れ、各時代に興窯業を興している。技術で九谷焼を評価すると、焼き物産業が変遷した社会環境が見えてくる。

十九世紀、景德鎮磁器はメキシコの一般家庭でも使われ、スペインや現地産の模倣品も流行する。同時期の江戸時代は、有田が大量に染付を日本国内に販売し、北前船も北海道まで運び、九谷焼も少量が日本国内に流通した。明治時代に藩の庇護を失った地方小規模窯は盛衰を繰り返す。幕末明治初の万国博覧会は日本国政府主導で参加し、日本工芸技術は世界の上流家庭に受け入れられ、明治二〇年頃の能美九谷海外輸出は莫大であった。家庭内を飾る美術工芸品として欧米を魅惑し、アメリカ一般家庭の主婦は隣家の同じ九谷焼や薩摩焼に不満を

もった。一人の家庭の主婦が感じた気持ちは、社会の雰囲気に影響し、欧米の九谷焼流行は終わった。



写真1 珠洲刻文叩壺

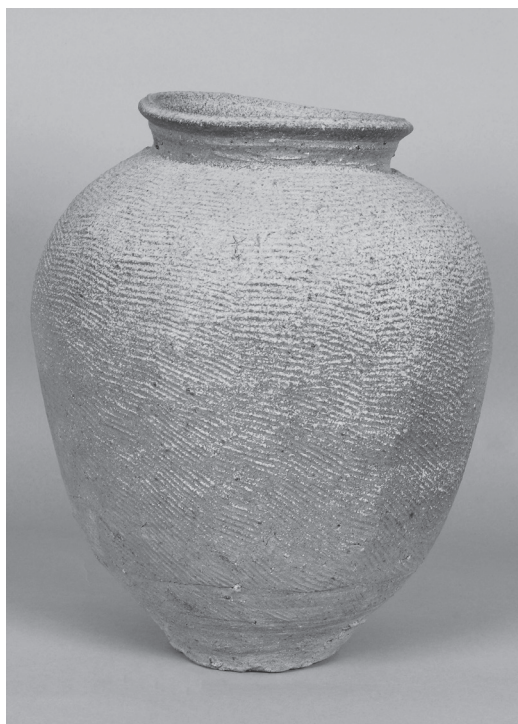


写真2 珠洲叩壺



写真3 珠洲叩中甕

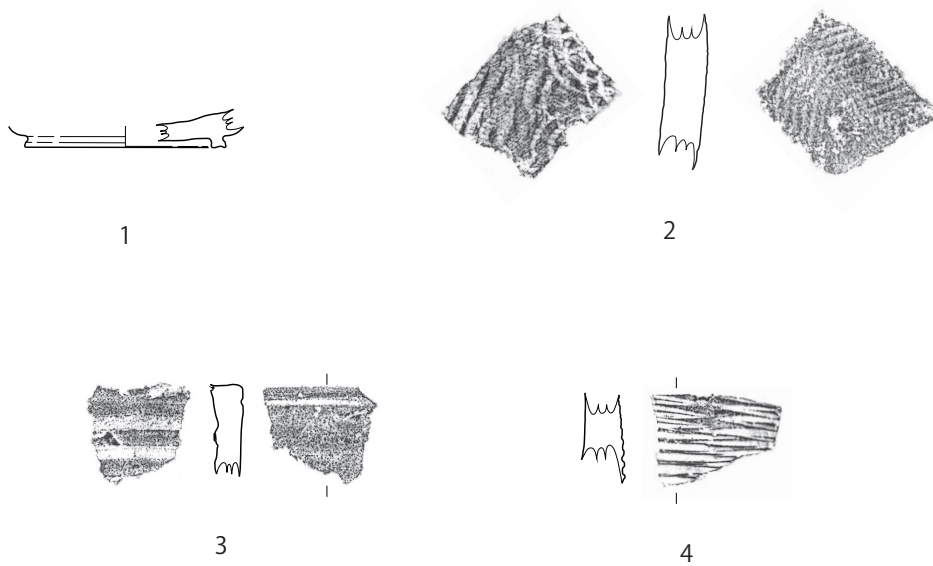


図3 珠洲中甕に附属した土器・陶器片 (S=1/3)

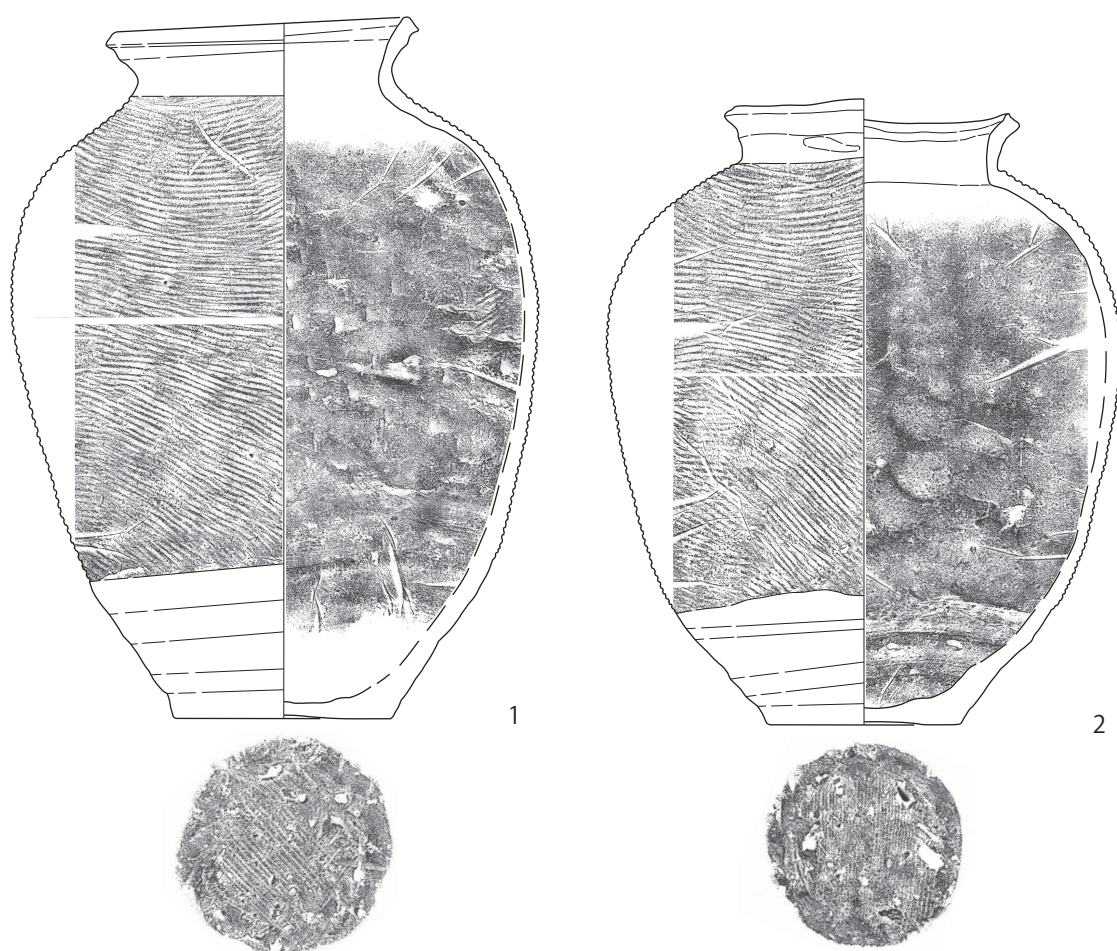


図1 珠洲市三崎町大屋出土珠洲壺 (S=1/4)

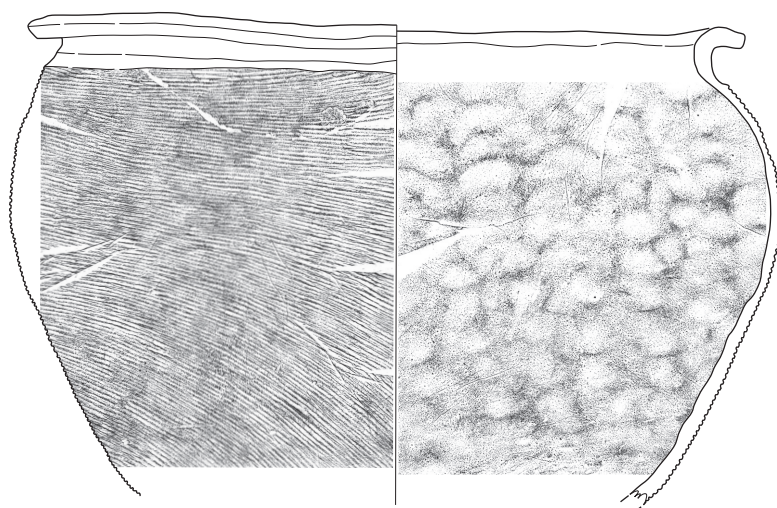


図2 珠洲市内出土珠洲中甕 (S=1/6)

みられる。

まとめ

三崎町大屋出土の珠洲壺2点については出土時の状況から蔵骨器と評価できるが、これに加え平成5年（1993）の能登半島沖地震を物語る資料であるという点も見逃せない。2月7日22時27分に発生したこの地震ではマグニチュード6.6、当時の震度階級で最大震度5を記録し、輪島港と小木港（佐渡島）では津波も観測されている。被害は石川県と新潟県で重軽傷者30名のほか、家屋の倒壊、トンネルの落盤、道路損壊などが報告されている³。令和6年能登半島地震では現在も文化財レスキューが続いているが、本資料はこうした能登半島における地震と文化財の被害の歴史をたどるうえでも大きな意義を持っているといえよう。

また、珠洲市内出土の中甕はいつごろから水田の用水に使われていたかは不明なものの、用途を変えて近年まで人びとの生活に根付いていたことを物語っている。珠洲焼が近年まで使用された例として、味噌甕や米櫃、漆壺、茶壺が知られている。また、底部を欠いた珠洲甕の使用例として、中世の集落では井戸枠として転用された例が知られるが、本資料も耐水性や耐候性といった、珠洲焼が持つ強みが評価され転用されたとみられる。

令和6年能登半島地震の発災から2年が経つが、現在でも被災文化財についての相談が寄せられている。今回紹介した資料も、こうした相談の連絡がきっかけとなり収蔵となったものであり、寄贈者の方々に感謝申し上げるとともに、被災地の1日も早い復旧・復興を願いたい。

注

- 1 拙稿2026「地域に密着していた珠洲焼」『石川れきはく』No. 153 石川県立歴史博物館
- 2 なお、人骨はその後、寄贈者の父によって出土地点に埋め戻され、地元の僧侶によって供養されたという。また、相伴した鉢片は壺と同じく珠洲市内の家屋に保管されていたが、令和6年能登半島地震による家財の散乱に巻き込まれてしまい、発見できなかったとのことである。
- 3 地震の情報や被害状況については、地震津波監視課・地震予知情報課・金沢地方気象台1995によった。

参考文献

- 石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会編『珠洲法住寺第3号窯』
地震津波監視課・地震予知情報課・金沢地方気象台1995「1993年2月7日能登半島沖の地震調査報告」『験震時報』第58巻
珠洲市教育委員会文化財課編2006『珠洲焼窯跡群－珠洲古陶関係遺跡発掘調査等事業－』珠洲市教育委員会
吉岡康暢監修1989『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館
吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

(2) 珠洲叩壺 (図1-2・写真2)

珠洲叩壺は口径14.4cm、胴径27.2cm、底径10.0cm、器高33.2cmを計測する。胎土は7mm程度の礫粒を少量含み、灰色の焼き上がりとなる。胴部はややなで肩であり、叩き目は縦列で向きを変えて施される。口縁部はやや外反し、先端が肥厚し端部に条溝がめぐる。また、上胴を中心に、口縁部から下胴にかけて灰白色の自然釉が降りかかる。

年代観であるが、口縁部の形状は吉岡編年Ⅳ期の標式資料である法住寺3号窯出土資料に類例が認められることから14世紀前半～半ばの製作とみられる。

2 珠洲市内出土の珠洲甕 (図2・写真3)

本資料は珠洲市内の個人宅に保管されていたもので、もとは水田の用水調整に使われていたものが30年ほど前に重機で掘り出されたという。その具体的な用途は不明であるが、形状からあえて推定するならば、用水から水田へ水を供給する給水栓を保護する枠や、地下かんがい用の水槽の代用品として使われていた可能性が考えられる。

保管されていたのは珠洲叩中甕で、底部を欠失するものの口径53.8cm、胴径61.4cm、現状の器高36.0cmを計測する。胎土は精良で、石英や雲母の微粒を多く含むが礫粒はほとんど見られず、焼き上がりも青みがかった灰色の堅緻なものとなる。胴部はややなで肩で、叩き締め整形が施され、外面には右下がりの叩き目が、内面には楕円形の押圧痕が残る。頸部は「コ」の字状に強く折り返し、口縁端部は平縁となる。

また、肩部には印花文がひとつ刻印される。印花文はやや不明瞭であるが五弁花とみられる。

年代観であるが、本資料にみられる頸部は寺社キヨミズ窯や鳥屋尾窯、郷窯に類例が見られる。その形状は吉岡編年Ⅰ期に見られる嘴頭状に屈折する口縁部からやや退化した形状とみることができる。その一方で、Ⅲ期以降に見られるような方頭状にまでは退化しておらず、以上の点から吉岡編年Ⅱ期のものとみたい。

なお、受入時に中甕と同じ地点から出土したと伝わる陶器片が4点付属していた (図3) ので、あわせて紹介する。

1は須恵器有台坏の底部。胎土は1mm未満程度の砂粒を少量含む精良なもので、内面が灰白色、外面が灰色の焼き上がりとなる。

2は須恵器甕の胴部片。胎土は精良で、白色の微粒を多く含む。内外面ともに灰色の焼き上がりとなり、外面には格子目状とみられるタタキが、内面には同心円状のタタキが残る。

3は須恵器壺の口縁部。胎土は黒色の雲母の微粒を多く含み、内外面ともに灰色の焼き上がりとなる。外面には条線が1本、内面には幅6mmほどの帯状の段が見られる。

4は珠洲甕の胴部片。胎土は2mm～5mmの礫粒が混じり、焼き上がりは内面が灰色、外面が暗灰色となる。叩き締め整形が施されており、外面には条線状のタタキが、内面には楕円形の押圧痕が残る。その胎土や焼き上がりから、珠洲叩中甕とは別個体のものと

珠洲市内出土の珠洲焼二題

—令和6年能登半島地震を契機として収蔵された資料—

野村 将之

はじめに

本稿にて紹介する珠洲焼は、令和6年能登半島地震に関連して、いずれも珠洲市内の個人から寄附の申し入れがあり当館で新たに収蔵したものである。これらの資料は当館の令和7年度夏季特別展「未来へつなぐ—能登半島地震とレスキュー文化財—」や、当館の広報誌¹にてすでに紹介したものであるが、実測図や拓本といった、考古資料として活用するうえでの基礎資料は未公開であった。そこでこれらの実測・拓本採取を行ったうえで、あらためて紹介するものである。

1 珠洲市三崎町大屋出土の珠洲壺

本資料は平成5年（1993）の能登半島沖地震の際、珠洲市三崎町大屋（下大屋）の山林から出土しているのを寄贈者の父が発見し、その後は珠洲市内の家屋に保管されていたものである。具体的な出土地点は現在では不明であるが、出土時は壺の中に人骨が入っており、鉢片も共伴していたという²。

寄贈されたのは珠洲刻文叩壺と珠洲叩壺の2点で、いずれも底部を鉢造りとし、腰から粘土紐を継ぎ足して胴部を輪積み成形とし、頸部まで叩き締め整形を施し、底部には静止糸切り痕が残る。

(1) 珠洲刻文叩壺（図1-1・写真1）

珠洲刻文叩壺は口径15.4cm、胴径28.0cm、底径11.4cm、器高37.2cmを計測する。胎土は精良で、礫粒はほとんど見られない。焼成時に火前に近い位置に窯詰めされたとみられ、火表には灰白色の自然釉が広範囲にわたって厚く付着しているほか、焼き歪みによる大きな割れが確認できる。胴部はややなで肩であり、叩き目は縦列で向きを変えて施され、肩部には浅く「×」状の刻文が施される。口頸部は「く」の字状に外反し、口縁端部が外方に突出する形状となる。

年代観であるが、本資料に見られる口頸部のつくりは吉岡編年Ⅲ期の標式窯跡である馬縹カメガタン窯跡出土資料や、吉岡編年Ⅳ期の標式窯跡である法住寺3号窯出土資料と同様のものが見られる。口縁部の法量や作行は馬縹カメガタン窯のものに近く、吉岡編年Ⅲ期の製作とみたい。

令和八年三月三十一日発行

石川県立歴史博物館紀要 第三十五号

編集
発行

石川県立歴史博物館

金沢市出羽町三番一号
電話 〇七六―二六二―三三三六

印刷

株式会社 谷 印刷
金沢市中村町二八―一四

Bulletin of the Ishikawa Prefectural Museum of History

No. 35 2026

Article

Buddhist Sculptures around Mount Sekidosan

SUGISAKI Takahide 1

Cerebrative Processions in 20th Century Kanazawa

: Victory Ceremonies, the Enthronement Ceremonies, City Festivals and
School Festivals

DAIMON Satoru 27

Notes

Transport of Fish Fertilizers made from sardine on the Western Noto Peninsula

: The Case of *Kitahamajiri Bay* and *Imahama Bay*

YOSHIDA Tomoo 105

Abstracts

Abstracts of Seminar on the History of Ishikawa 121

Research Materials

Suzu Ware Jars Excavated from Suzu City

: New Acquisitions After 2024 Noto Earthquake

NOMURA Masayuki 1

Ishikawa Prefectural Museum of History

ISSN 0916-1120